

# 豊 後 府 内 5

中世大友府内町跡第31次調査区(瑞光寺周辺)

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

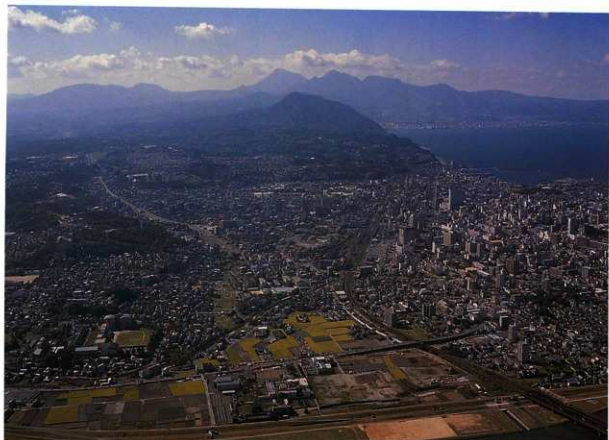
2 0 0 6

大分県教育庁埋蔵文化財センター

# 豊 後 府 内 5

中世大友府内町跡第31次調査区(瑞光寺周辺)

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)



大分市空撮



中世の府内想像図



調査区全景



14世紀の溝状遺構から見つかった推定長3mのクロマグロである。



SD3出土京都製土師器



SE1出土漆器碗

## 序 文

本書は、大分県教育委員会が大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受けて実施したJR久大本線高架化事業に伴う、大分市の中世大友府内町跡第31次発掘調査の報告書です。

大分市は、古代以来豊後国の国府が置かれ政治経済の中心地として栄えました。また、中世には、豊後国の守護であった大友氏の本拠地となり南蛮貿易やキリスト教布教により国際都市として発展しました。

今回調査した大友府内町跡第31次調査区は、大分川下流域左岸にあり大分駅の東約1キロメートルに位置し、国衙跡が推定される上野丘陵の北東斜面部に立地しています。中世においては大友城下町の南端部にあたり、鎌倉時代の「一遍上人年譜略」によれば、この付近に一遍上人が訪れた瑞光寺があったと伝えられています。

発掘調査の結果、中世の柱穴・溝状遺構等をはじめ多量の瓦や中国製青磁花瓶等を発見し、寺院に関係すると思われる貴重な歴史資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財の保護、地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、長期にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成18年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター所長

渋谷忠章

## 例 言

- 1 本書は大分市六坊南町に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査はJR久大本線高架化事業に伴い、県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所から依頼され、大分県教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は平成15年5月27日から平成15年9月30日まで行った。
- 4 現地での遺構の実測・写真撮影は大分県教育委員会文化課の職員が担当した。(当時)
- 5 遺物の整理作業・実測・製図等は教育庁埋蔵文化財センターにおいて行った。
- 6 動物遺体の分析は国立歴史民俗博物館の西本豊弘教授が行った。
- 7 出土遺物ならびに図面・写真等は大分県教育庁埋蔵文化財センター(大分市中判田1977番地)で保管している。
- 8 本書で使用する方位はいずれも座標北である。また、国土座標は2002年4月1日改正以前の座標値を使用している。
- 9 本書の編集・執筆は高橋信武が担当した。



# 目 次

<b>第1章 はじめに</b>	
1. 調査の経緯	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査の経過	1
(3) 調査の体制	1
2. 遺跡の立地と環境	1
(1) 地理的環境	1
(2) 歴史的環境	3
<b>第2章 調査の成果</b>	
1. 調査の概要	5
(1) 遺構面の重複について	5
2. 最上層の擾乱	10
(1) 分布状態	10
3. 1区上層の遺構と遺物	10
(1) 分布	10
(2) 遺構と遺物	10
4. 1区中層(新)の遺構と遺物	19
(1) 分布状態	19
5. 1区中層(古)の遺構と遺物	38
(1) 分布状態	38
(2) 遺構と遺物	38
6. 1区下層の遺構と遺物	47
(1) 分布状態	47
(2) 遺構と遺物	47
7. 1区の掘立柱建物跡	68
8. 1区包含層の遺物	68
9. 1区その他の遺構	77
10. 2区の調査	80
(1) 分布状態	80
11. 2区上層の遺構と遺物	80
(1) 分布状態	80
(2) 遺構と遺物	81
12. 2区包含層の遺物	88
13. 3区の調査	89
(1) 層序	89
(2) 遺構と遺物	89
<b>第3章 中世大友府内町跡第31次調査区出土の動物遺体</b>	
<b>第4章 まとめ</b>	
観察表	101
写真図版	117

## 挿 図 目 次

第1図	調査区の位置 (明治34年 1/5万地図) .....	2
第2図	調査区付近の地図 (1/10,000図) .....	4
第3図	府内古図と街路名称の設定 .....	5
第4図	調査区周辺の拡大図 .....	6
第5図	攪乱・トレンチ分布図 .....	7
第6図	1区南西壁層序図 .....	8
第7図	1区北東壁層序図 .....	9
第8図	1区近世初頭遺構分布図 .....	11
第9図	SD1・SD2・SX1遺構実測図 .....	12
第10図	SK5出土遺物実測図 .....	13
第11図	SD3・SD8遺構実測図 .....	14
第12図	SD1・SD2・SX1出土遺物実測図 .....	15
第13図	SD3出土遺物実測図 .....	15
第14図	SD7・SD8出土遺物実測図 .....	15
第15図	SD16・SD17・18遺構実測図 .....	16
第16図	SD16・SD17・18出土遺物実測図 .....	16
第17図	SD16・SD17・18出土遺物実測図 .....	16
第18図	中層 (新段階) 遺構分布図 .....	17
第19図	SD12・SD13・SD14・SD15遺構実測図 .....	18
第20図	SD15出土遺物実測図 .....	19
第21図	SK11出土遺構実測図 .....	20
第22図	SK11出土遺物実測図 .....	20
第23図	SD19・SD23付近南壁実測図 .....	20
第24図	SD19・SD23遺構実測図 .....	21
第25図	SD19出土遺物実測図 .....	22
第26図	SD19出土遺物実測図 .....	23
第27図	SD19出土備前焼他実測図 .....	24
第28図	SD19出土遺物実測図 .....	25
第29図	SD19出土木製品 (漆器碗・折敷・下駄) 実測図 .....	26
第30図	SD23出土遺物実測図 .....	27
第31図	SE1遺構実測図 .....	28
第32図	SE1出土遺物実測図 .....	29
第33図	SE1出土遺物実測図 .....	30
第34図	SE1出土備前焼他実測図 .....	31
第35図	SE1出土石臼実測図 .....	32
第36図	SE1出土石臼実測図 .....	33
第37図	SE1出土五輪塔部実測図 .....	34
第38図	SD26遺構実測図 .....	35
第39図	SD26出土遺物実測図 .....	35
第40図	SX2遺構実測図 .....	36
第41図	SX2出土青花実測図 .....	36
第42図	SX2出土瓦実測図 .....	36
第43図	SX2出土瓦・埴実測図 .....	37
第44図	中層 (古) 分布図 .....	39
第45図	SP69遺構出土遺物実測図 .....	40
第46図	SK14遺構実測図 .....	40
第47図	SK14出土遺物実測図 .....	40
第48図	SD10遺構実測図 .....	41

第49図	SD10出土遺物実測図	42
第50図	SD10出土遺物実測図	43
第51図	SD11遺構実測図	44
第52図	SD11出土遺物実測図	45
第53図	SK12遺構実測図	46
第54図	SK12出土遺物実測図	46
第55図	SK17遺構実測図	46
第56図	SK17出土遺物実測図	46
第57図	SP45遺構実測図	46
第58図	SP45出土遺物実測図	46
第59図	SP78遺構実測図	47
第60図	SP78出土遺物実測図	47
第61図	SP35出土遺物実測図	47
第62図	下層遺構分布図	48
第63図	SD9検出面遺物分布図	49
第64図	SD9上部・5層出土遺物実測図	50
第65図	SD9出土遺物実測図	50
第66図	SD9出土銭実測図	50
第67図	SD9下層遺物出土状況実測図	51
第68図	SD9出土遺物実測図	52
第69図	SD9出土遺物実測図	53
第70図	SD9下層遺物分布図	54
第71図	SD9下層出土木製品実測図	55
第72図	SD9下層出土木製品・雄石実測図	56
第73図	SD9出土木製品実測図	57
第74図	SD9出土弥生式土器実測図	57
第75図	SX3遺構実測図	58
第76図	SX3出土遺物実測図	58
第77図	SX3出土石臼実測図	60
第78図	SK13・SD24遺構実測図	60
第79図	SK13出土遺物実測図	61
第80図	SD20・SD21・SK16・SK18遺構実測図	62
第81図	SD20・SD21・SK16・SK18遺物分布図	63
第82図	SD20・SK18出土遺物実測図	64
第83図	SD20・SD21・SK16・SK18出土遺物実測図	65
第84図	SD24の位置と出土遺物実測図	66
第85図	1区掘立柱建物跡・柱穴群位置図	67
第86図	SH1遺構実測図	68
第87図	1区柱穴出土の木柱	69
第88図	SH2遺構実測図	70
第89図	1区柱穴出土の木柱	71
第90図	1区柱穴断面実測図集成	72
第91図	1区包含層出土遺物実測図	73
第92図	1区包含層出土遺物実測図	73
第93図	1区包含層出土遺物実測図	74
第94図	1区包含層出土遺物実測図	75
第95図	1区包含層出土遺物実測図	75
第96図	1区包含層出土遺物実測図	77
第97図	1区包含層出土遺物分布図	78
第98図	SK20遺構実測図	79

第99図	SK15遺構実測図	80
第100図	SD22遺構実測図	80
第101図	SK49遺構実測図	80
第102図	1区時期不詳遺構出土遺物実測図	81
第103図	2区遺構全体図	82
第104図	2区層序実測図	83
第105図	SX4遺構実測図	84
第106図	SX4出土遺物実測図	84
第107図	SX4出土瓦実測図	85
第108図	SX4出土埴瓦・瓦実測図	86
第110図	SX4出土埴瓦・鬼瓦実測図	87
第111図	2区包含層出土遺物実測図	88
第112図	3区東北壁実測図	90
第113図	SD25遺構実測図	91
第114図	SD25出土遺物実測図	91
第115図	3区出土遺物実測図	92
第116図	3区出土遺物実測図	93
第117図	調査区周辺の地籍図	97

## 表 目 次

第1表	遺構一覧表①	103
第2表	遺構一覧表②	104
31次調査区遺物観察表	(土器・陶磁器①)	105
31次調査区遺物観察表	(土器・陶磁器②)	106
31次調査区遺物観察表	(土器・陶磁器③)	107
31次調査区遺物観察表	(土器・陶磁器④)	108
31次調査区遺物観察表	(土器・陶磁器⑤)	109
31次調査区遺物観察表	(土器・陶磁器⑥)	110
31次調査区遺物観察表	(土器・陶磁器⑦)	111
31次調査区遺物観察表	(土器・陶磁器⑧)	112
31次調査区遺物観察表	(土製品)	112
31次調査区遺物観察表	(石製品)	113
31次調査区遺物観察表	(金属製品)	113
31次調査区遺物観察表	(瓦・埴石) ①	114
31次調査区遺物観察表	(瓦・埴石) ②	115
31次調査区遺物観察表	(その他)	115
31次調査区遺物観察表	(銅銭)	116
31次調査区遺物観察表	(木製品)	116

## 写真図版目次

- 巻頭図版1 大分市空撮  
中世の府内想像図
- 巻頭図版2 調査区全景
- 巻頭図版3 14世紀の溝状遺構から見つかった推定  
長3mのクロマガロ
- 巻頭図版4 SD3出土京都製土師器  
SE1出土漆器機
- 写真図版1 1区東北壁  
近世初め頃の溝状遺構 (SD3周辺)
- 写真図版2 SE1の推積層
- 写真図版3 SD23東北壁付近の完備状態  
漆器機出土状態
- 写真図版4 SD9南北層序
- 写真図版5 SD9遺物出土状態  
瓦集中部 (SX2)
- 写真図版6 古代の土師器(1区包含層)  
越州窯青磁 (SD7)  
SK11 IV14区 (SD23) (IV14区)  
(SK13) (SD23)
- 写真図版7 大内系土器 (SD11)  
(F7区) (SD9) (SK13)  
(SK18) (SX3) (SD24)  
(SD9)土師器皿類 京都市ヘソ皿 (SD9)
- 写真図版8 青花 (中国製染付)
- 写真図版9 青花 (中国製染付)
- 写真図版10 SE1青磁器台片
- 写真図版11 タイ製ハンネラ土器(SE1) 礎石  
(左: SD11 右: SD9) SE1出土礎石
- 写真図版12 軒平瓦 (3区包含層) 鬼瓦 (SX4)  
礎石 (G10区 C5区 G9区 SP73)
- 写真図版13 折敷 (SD9)
- 写真図版14 折敷 (SD9)
- 写真図版15 折敷 (SD9)
- 写真図版16 木柱 (SP68・SP62・SP32)  
木製容器 (SD9)  
円盤状木製品 (SD20・SD9)  
折敷 (SD9)
- 写真図版17 調査風景 (1区) 1区西端 同左低地部
- 写真図版18 1区 1区上層部調査状況
- 写真図版19 1区SD3 近世初め頃の溝状遺構
- 写真図版20 SD4周辺  
近世初め頃の溝状遺構 (SD12~15)
- 写真図版21 その調査状況 (左) SD17周辺 (右)  
SD12~15
- 写真図版22 3区
- 写真図版23 SD9検出状態
- 写真図版24 SD10完備状況
- 写真図版25 SD11土層
- 写真図版26 SD11上部 (上) SE1 SD9調査状況
- 写真図版27 SX2出土状態 SK13・SD24完備状態
- 写真図版28 1区東部 SD24西側柱穴群
- 写真図版29 SD24 SK20
- 写真図版30 SD9全景 折敷 (SD9)
- 写真図版31 SK18周辺
- 写真図版32 遺物出土状況 1区東部から2区・3区を  
見る
- 写真図版33 SX4 (2区)
- 写真図版34 SX4 2区柱穴
- 写真図版35 3区礫出土状況 3区調査状況
- 写真図版36 青花 (中国製染付)
- 写真図版37 青花 (中国製染付)
- 写真図版38 白磁・青花・青磁
- 写真図版39 青磁 (1区包含層) 青磁 (S41-78)  
青磁 (S50-6) 青磁 (P-16一括)  
青磁 (SE1) 白磁 (SD10)  
白磁 (SD10付近) 白磁 (SX3)  
白磁 (SD19)
- 写真図版40 青磁 (1区包含層) 青花
- 写真図版41 白磁 (S72) 白磁 (SD23)  
福輪陶器 (SD23) 福輪陶器 (SE1)  
福輪陶器 (上: 表棟 SK14)  
鉄製品 (SE1)
- 写真図版42 瓦質土器火鉢 (SD23)  
瓦質土器火鉢 (SD19)  
備前焼 (SE1) 備前焼壺 (3区包含層)  
備前焼楕鉢 (SE1) 青磁 (1区包含層)
- 写真図版43 銅 火鉢 銅E8-12 銅M14-8 (SK16)  
銅(SD9) 瓦質土器
- 写真図版44 鬼瓦(SD15) (3区) (SK13)  
軒平瓦 (SX2)

## 第1章 はじめに

### 1. 調査の経緯

#### (1) 調査に至る経過

本書に収録した中世大友府内町跡第31次調査区は、中世豊後の守護大名であった大友氏の行政・経済の中心地である府内町跡の南端部に位置し、大分駅周辺総合整備事業に伴う試掘・確認調査によって発見・確認されたものである。大分駅周辺総合整備事業は国・大分県・大分市が進めている大分駅周辺地域の再開発事業であり、今回の調査の契機となったのは、現在地上を走っているJRの日豊本線・豊肥本線・久大本線を高架化する「大分駅付近連続立体交差事業」のうち、久大本線高架化事業である。

この事業は大分駅東側で大分川下流までの地域において大部分、中世大友氏の遺跡と重なるものである。大分県教育委員会では、県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所の委託を受けて、1998(平成10)年より大分駅周辺総合整備事業対象地域における埋蔵文化財の有無に関する試掘・確認調査と遺跡の発掘調査を継続し現在に至っている。これまで高架化に伴って本発掘調査を行ったのは、久大本線関連では大分市上野町1番地所在の上野町遺跡と日豊本線関連では大分市大字大分字願徳寺所在の願徳寺遺跡、中世大友府内町跡第5次・7次・8次・10次・40次調査がある。

#### (2) 調査の経過

JR久大本線高架化予定地のうち、2002(平成14)年9月に行ったJR久大本線北側地区を対象にした試掘・確認調査によって明らかとなった範囲を、今回報告する中世大友府内町跡第31次調査として2003(平成15)年5月から10月にかけて発掘調査した。なお、遺跡名は館跡である大友氏遺跡と府内町跡を総合して中世大友城下町跡と呼んでいる。

#### (3) 調査の体制

大分駅付近連続立体交差事業の発掘調査は、大分県教育委員会と大分市教育委員会とがそれぞれの工事事業担当が県か市かによって別個に対応して調査している。しかし、国指定史跡となった大友氏館跡をはじめとして関連する重要な遺跡が正確な位置が不詳のまま散在しているため、文化庁の指導のもと、大分県教育委員会と大分市教育委員会が共同で調査指導者を年間二回開催し、その指導を受けながら調査を実施してきた。

中世大友府内町跡第31次調査は、以下の調査体制で実施した。役職名は調査当時のものである。

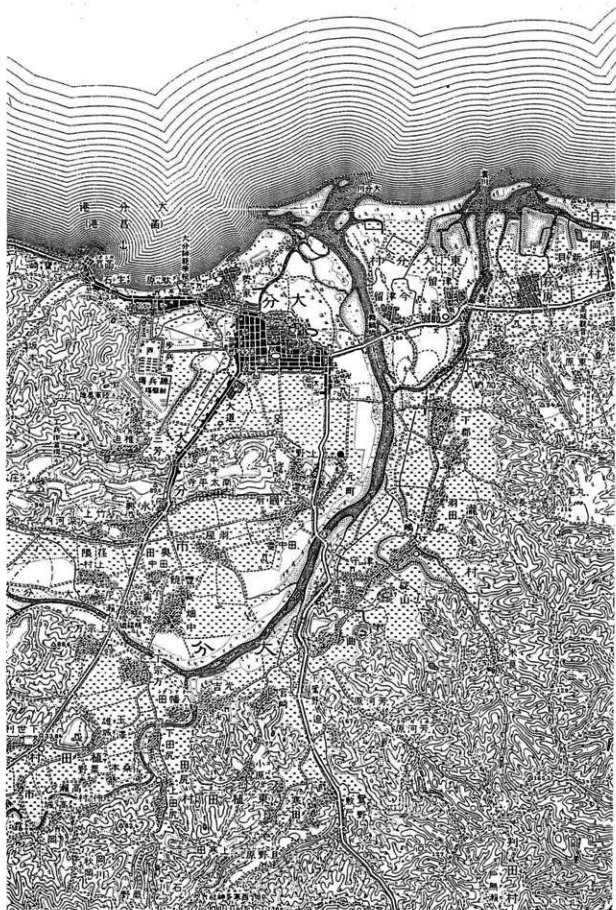
大分県教育委員会教育長	深田 秀生
文化課長	今永 一成
参事兼課長補佐	麻生 祐治
参事兼課長補佐	清水 宗昭
大型県事業担当主幹	高橋 信武
嘱託	細川 愛
嘱託	安井由加里
嘱託	生野 令子

### 2. 遺跡の立地と環境

#### (1) 地理的環境

九州の北東部に位置する大分県は、県南部を東北から西南に横断する臼杵八代橋造線によって地質的に二分される。南部は石灰岩や砂岩・チャートその他の古い地層が構造線に平行に走る山地帯である。九州本島最高峰の祖母山や傾山等はこの範囲にある。平野部は山地を浸食してできた河川流域の狭い河岸段丘カリアス式海岸部に限られる。

一方、大分市を含む北部は火山起源の地形であり、国東半島・鶴見岳・由布岳・久住連山から阿蘇山に連なり、火山と火山灰台地、海岸段丘地形が分布する。このように大分県の南北共に山



第1図 調査区の位置 (明治34年 1/5万地図)

が多く、地形は分断され、比較的大きな平野は県北部の旧豊前国である宇佐や中津に求めるしかない。中世大友城下町跡は大分川下流域の左岸沖積地にあり、別府湾に面している。瀬戸内海・豊後水道を介して広く国内外との交流が可能である。しかし、現在の大分市は河川から流入する土砂によって中世段階よりも海に向かって広がっていて、中世段階の大分平野はもっと狭かった。

## (2) 歴史的環境

大分市の市街地の南側には東西方向に延びる上野丘陵が東側の大分川にむかって突き出ているが、ここからは旧石器時代の石器（約2万年前）、縄紋時代晩期（約3,000年前）、弥生時代後期（約1,800年前）の竪穴住居跡、古墳時代（約1,600年前）の遺跡が確認されている。

丘陵の北側裾部では最近の発掘調査によって弥生時代の遺物が発見されており（若宮八幡宮遺跡）、2,000年くらい前には丘陵寄りの低地でも生活できたらしい。約1,500年前の古墳時代の集落が丘陵と低地との中間に立地する上野中学校運動場で発掘されている。この時期の古墳としては上野丘陵の東端にある大臣塚前方後円墳がある。

古代（奈良・平安時代）の竊立性建物跡が<sup>見つかるとはしてはたまたま</sup>大友第7次調査で出土しており、遺物も中世大友城下町跡で散見される。1997年、大分芸術文化短期大学の構内南部での発掘調査によって上野丘陵で初めて飛鳥時代・奈良時代・平安時代の各時期の役所的遺構群が確認されて以来、古代豊後の国府及び周辺官衛群は上野丘陵上に想定されるようになったが、低地部の中世城下町跡地域における古代の様相・性格を判断するには現状はまだ全く資料不足である。今回の調査でも古代の遺物が少量出土した。

本格的に低地部が日常生活の中心になったのは中世からである。中世大友城下町跡がいつ成立したのか不詳だが、13世紀中頃、大友氏三代目であり最初に豊後国の守護として赴任した頼泰の守護所が上野丘陵周辺のどこかにつくられたらしい。最近の発掘調査でも14世紀初め（1306年）、万寿寺が大分川左岸にできた頃から遺構が登場する傾向にある。

1586年、島津氏の豊後侵攻の際に大友氏は配下のいる県北部に逃れ、大友城下町は放火され消滅した。大友氏の豊後降参後、新たに入ってきた近世大名により海岸線沿いに城下町の移動があったため、中世大友城下町跡は近年に至るまで郊外の農耕地であった。

中世に描かれた大友城下町の地図は存在しない。地図の中でもっとも古く、中世の様子を描いたものとされるのは「府内古図」であるが、江戸初期（1634年）よりも遅らないとされている。今回の調査地は「府内古図」では城下町南部に位置し、御藏場の南方にあたり、万寿寺西側道路の西側にあり、若宮八幡社よりも東にあり、城下南部に四つ並んだ寺（北から瑞光寺・真花寺・比丘尼寺・極楽寺）の北端の瑞光寺周辺に該当する。「府内古図」はもちろん、きわめて大雑把な地図であり、大友館や御藏場等の中心部ほどには信頼をおけない。

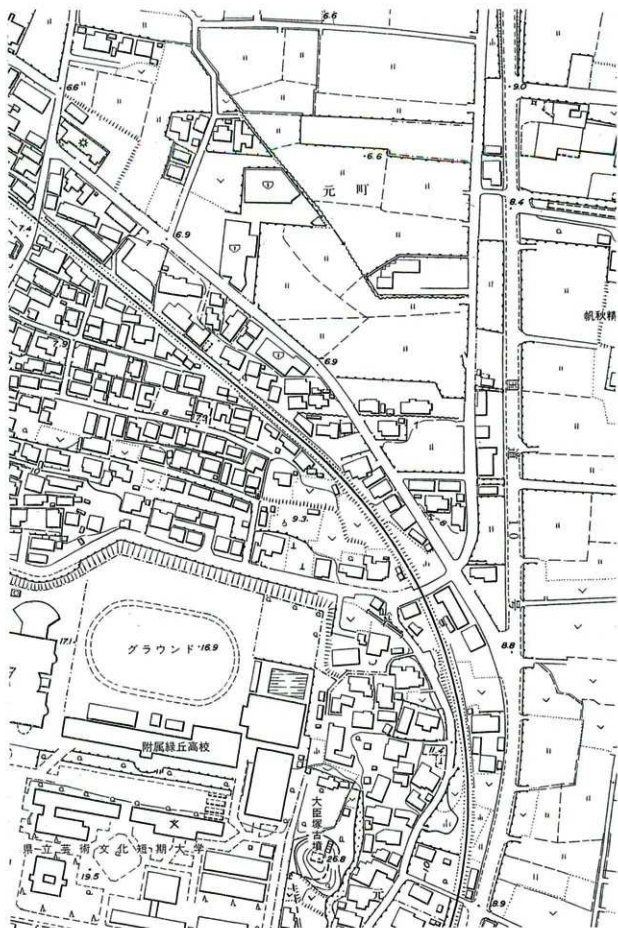
以上のように豊後の中心である大分の中心部、城下町は古代、中世、近世と新しくなるにつれて、大分川のの上流から下流へと位置を移してきた。

高橋信武「大分県大分市上野遺跡群電玉畑遺跡」『日本考古学協会年報50』

国府

府内古図





第2図 調査区付近の地図 (1/10,000図)

## 第2章 調査の成果

## 1. 調査の概要

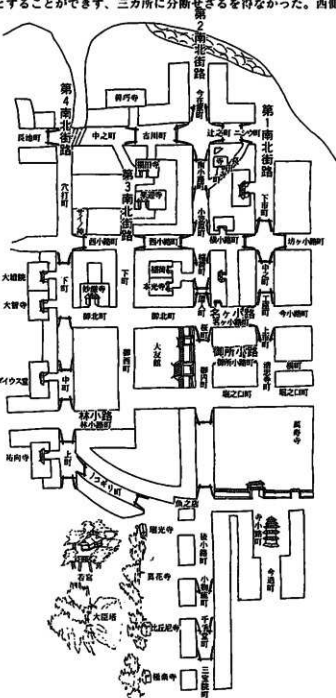
## (1) 遺構面の履獲について

5mm方眼

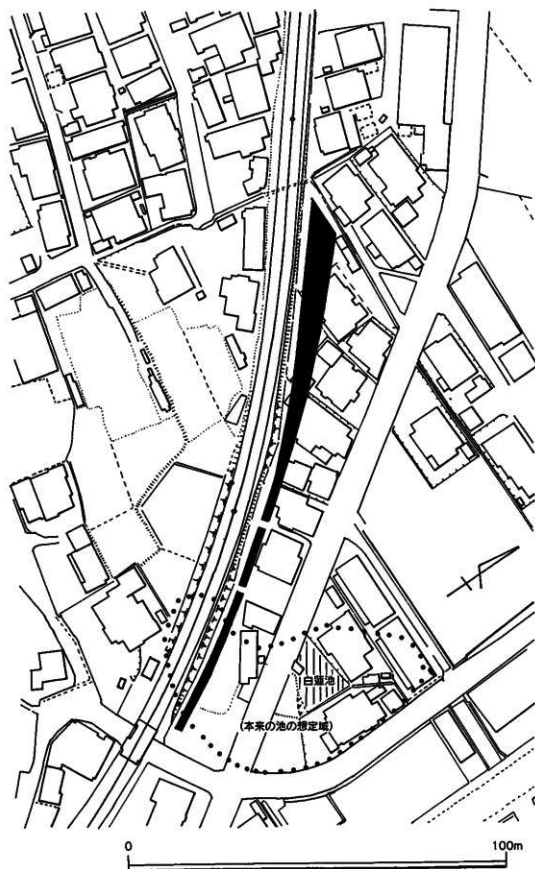
中世大友城下町跡大31次調査区では、調査区では国上座標軸による方眼に合わせて5m方眼を設定し、それぞれの小区画を西から東へ1～18、北から南へA～Qの番号を付し、数字とアルファベットの組合わせで、各々の区画を呼称することにした（例えば7F区など）。また、諸般の事情で調査区全体を連続した発掘区とすることができず、三カ所に分断せざるを得なかった。西側からそれぞれ1区・2区・3区と呼ぶことにした。複数の層に分かれて古代から中世末期に至る各時期の遺物が出土しているが、確実な遺構の時期は中世14世紀初頭から16世紀後葉の鎌倉時代末から室町末期である。

1区 調査以前は住宅地であったため、コンクリートで固めた穴やU字溝を埋めた溝、ガラス瓶が廃棄された直径30cm前後の土坑類等、中世の層にまで達した擾乱が1区西半分を中心として分布していた。重機で行った試掘調査のトレンチも1区に三カ所、2区に一カ所あって、遺構を破壊していた。調査では重機を使って耕作土層を剥ぎ取り、後は人力で遺構検出作業を行っていった。1区においては、現代の擾乱直前のものは1区の8F区を中心として分布した溝状遺構数条と1区東部で検出した4条の細い溝状遺構である。これらは焼土の入った遺構を切っており、遺構としてはもともと新しいと判断した。近世初めの可能性がある。1区西部のA区は青灰色の粘土層が分布し、それ以东のような地山が分布しない範囲である。試掘調査の結果、これらの青灰色粘土層がない部分を調査対象とした。B区に東西方向に二段差があるのは水田の拡張痕をしめすものと考えた。

2区 2区では土管をつないだ配水施設を南北方向に検出した。地元の人に聞いたところでは、大正9年に久大本線が部分開通したとき、南側の上野丘陵側から水田用の水を線路の下を通して持つために線路工事前に埋設した



第3図 府内古園と街路名称の設定  
〔豊後府内1〕より

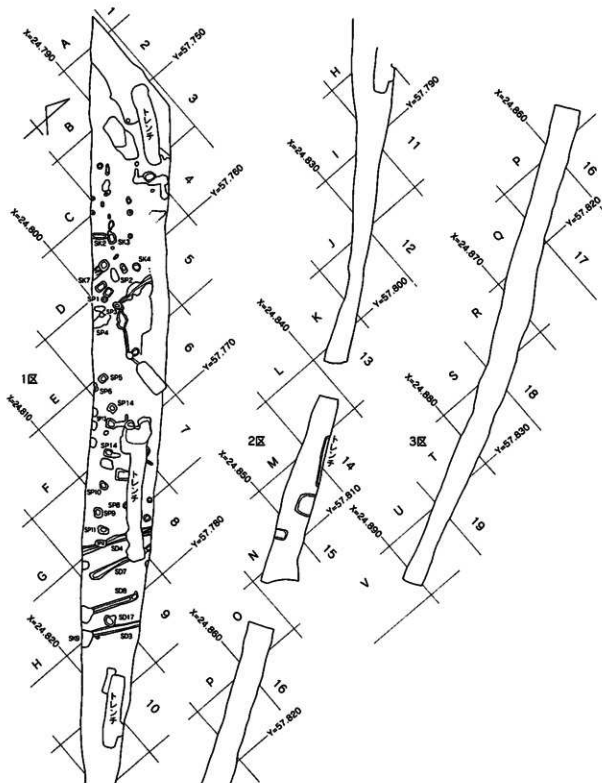


第4図 調査区周辺の拡大図

ものだとのことであった。

3区 3区は調査区の幅が狭い割に、地山まで深く、しかも客土が厚かった。常時水が湧き出るので排水ポンプが欠かせなかった。

発掘調査で検出した掘乱穴から出土した遺物を区別するため、掘乱の穴にも遺構番号を付した。



第5図 掘乱・トレンチ分布図

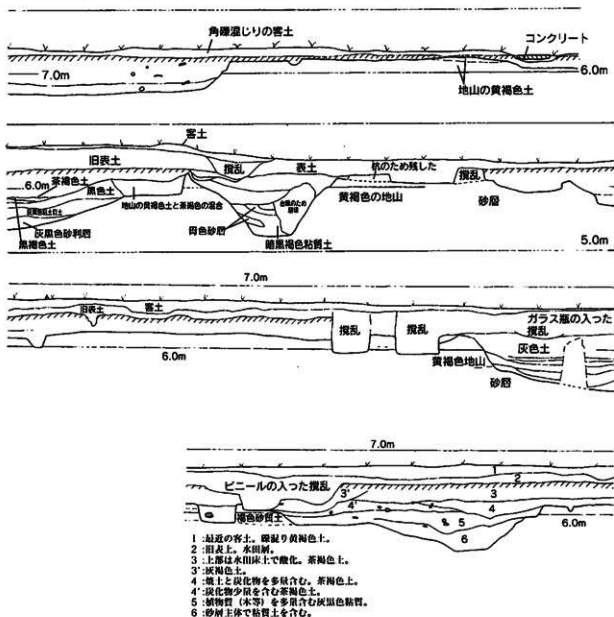
現地調査時点では、すべての遺構・掘乱には頭にSを付けることにした。報告書作成段階になって遺構の性格ごとに土坑(SK)・柱穴類(SP)・井戸(SE)・溝状遺構(SD)・掘立柱建物跡(SH)とし、それぞれ1から番号をつけた。旧称との対比は色采の遺構一覧表に記した。本文中では、図示すべき遺物の出土しなかった柱穴等について説明を省く場合がある。

調査区が細長かったため、同一時期の遺構面だけを複数回検出する、という理想的な調査はできなかった。従って、西の方で古い遺構を掘り下げている時に、東の方でそれより新しい遺構を掘っている可能性があるという状況だった。報告に当たり、遺物時期の検討結果を参考に、最上層・上層・中層・下層に分けて説明する。上記の各時期は、最上層が現代の掘乱である。

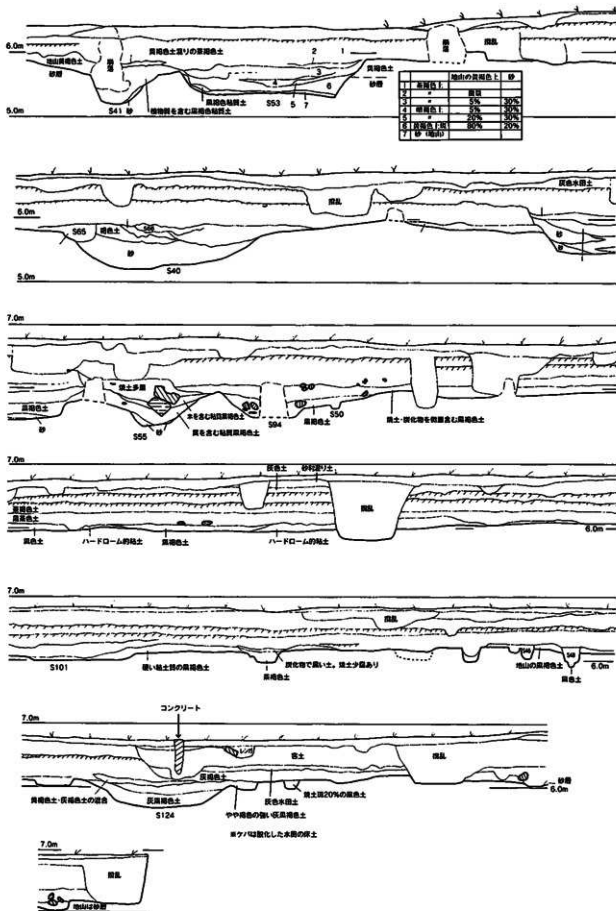
上層は1600年前後以降、18世紀位までで、中層は15世紀末葉から16世紀後葉で、京都系土師器の時期のもの。その新段階は京都系土師器だけの時期で16世紀中頃から後葉である。古段階は京都系土師器と内面に段状ナデを残す在地系土師器皿に伴う15世紀末葉から16世紀前葉の時期。

下層は在地系土師器の内面に段状で調整痕が残らない段階である。12世紀中頃から15世紀後葉までと時間は長い。

層の区分



第6図 1区南西掘乱序図



第7図 1区北東壁層序図

**(2) 層序**

本調査区では旧表土上に客土された最近の砂利層が覆っている。用地買収後、既存の建物を撤去し、地面を均したためである。この造成層の下位、標高6,7mほどに旧地表面があり、1区を中心に多数の穴が掘り込まれ、遺跡を覆乱していた。

旧表土の下位には全域に水田層が存在した。水田の水のために酸化して錆色に変色し硬化した面が基本的に二面重なっていた。その水田床土の標高は上位のもので約6,6m、下位は約6,4mである。本調査区でそれ以下に遺跡のない地山面は1区東部で標高6,2m、中央部で6,1m、西部は少し低く5,8mである。上位では黄褐色土、それが失われている場所ではその下にある砂層であった。

2区も1区東部と同じく、地山の黄褐色土が標高6,2mに存在した。3区は標高6,2mに一枚だけ水田床土があり、1区・2区よりも明らかに低い場所に水田を作っている。

3区中央部から東では、一枚ある水田床土の下は中近世の常時水分を帯びた遺物包含層が0,7mほどの厚さで堆積し、その下は標高5,4m前後で地山となる。言い換えれば、3区のこの部分では他より一段低い位置に水田があり、地山も他より0,6m程度低いわけである。調査区の北側にある白蓮池の続きだったと考えられる。

白蓮池

**2. 最上層の覆土****(1) 分布状態**

1区の北西半分を中心に分布するS1～S28は覆乱である。N14区のS68も新しく砂利が上から下まで入っていた。1区の長軸と平行に穴が並んでいるが、以前にあった住宅に関連する覆乱である。調査区内には北東部に覆っていくつか試掘トレンチが溝状にある。3A区・5C区～6C区・7D区～8F区・9G区～10G区・14L区～14M区の溝状のものがトレンチである。

2区の西部を調査区に直交するように土管4個が繋がって出土した。大正9年の鉄道敷設直前に埋設したものである。

3区は西部を除き中世の遺構はなく、大部分は浅い池状窪であり、それがある程度埋まった段階で五輪の塔の部材5個を含んだ石列が16P区に東西方向に並んでいた。列の西部を造成したもののらしい。石の上面標高は6,06m～5,9mであった。

覆乱部の穴からは現代のゴミに加えて、中世の遺物が出土した(第10図1・2)。1は軒丸瓦で、外縁部に珠紋が並んでいる。2は中国銭。

**3 1区の上層の遺構と遺物****(1) 分布**

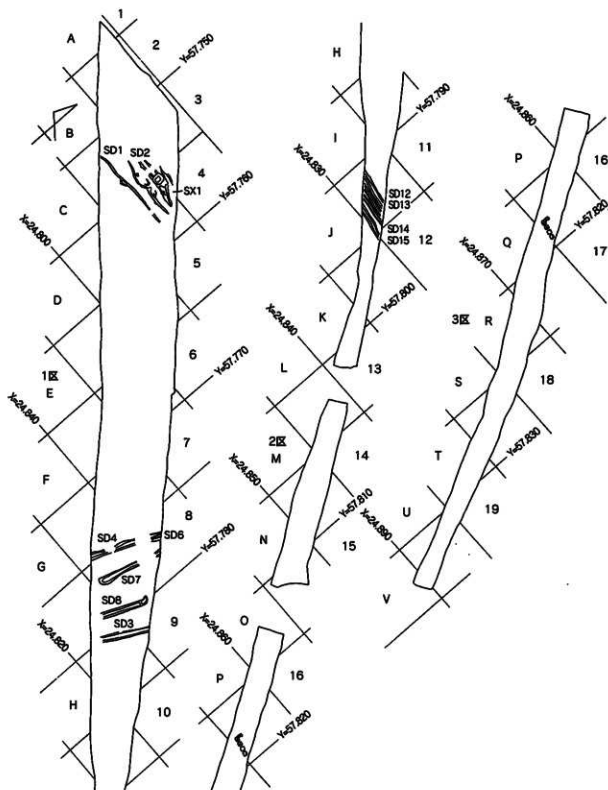
1区北西端の3B区・4B区に東西方向の段差をもつ遺構の重複する部分はすべて中世以後の遺構である。水田床土の高さで1区中央部に細い溝状遺構を並列して検出し(S32～37)、10cm程度の比高差をもつもう一段下位ではほぼ同じ位置、同じ走行の溝状遺構を検出した(S50～52)。これらは1区に二枚ある水田床土の中位から上の位置で検出した。

水田床土

**(2) 遺構と遺物**

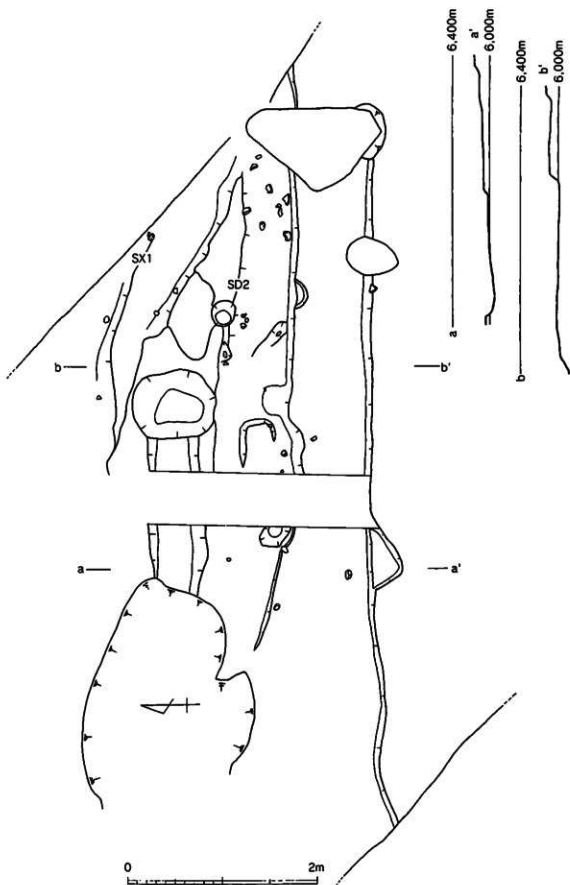
1区西部では硬い地山面が下り斜面となってその上に水田耕作土のような水分を帯びた土層が堆積する。この部分では地山の縁に沿うような形で近世の遺構を検出した(第9図)。

地山側のSX5は段差6cm～8cmの浅い平坦面である。東部には三角形のコンクリート塊が重なる。瓦質土器鉢片が1点出土している。(第9図1) SX5の性格は水田の縁辺部である可能性を考えている。1は内面調整が刷毛目、その他で調整した鍋である。



第8図 1区近世初頭遺構分布図





第9図 SD1・SD2・SX1遺構実測図 (S=1/40)

SD2はSX5の北西側にあり、平行に走る最大幅80cm程度の部分である。北東部では溝状をなし、北西部では平坦である。肥前系染付け(第12図3)と備前播鉢(同4)が出土している。SD2とSX1に挟まれた部分は幅70cm、深さ8cmの溝状を呈する。小礫が1点出土した。

SX1は最下段にあり、深さ5cm。肥前系染付けが出土した。

I区中央部にあるSD3・SD4・SD5・SD6・SD7・SD8は類似した規模で、ほぼ等間隔に南南西～北北東に走る溝状遺構であり、同時期であろう。暗渠らしいSD8からみてこれらは水田に伴う排水路か。これらが地山としている層は上位の水田床土中(1586年の島津侵攻に伴う焼土粒と思われるものを混入する)であり、16世紀末以降の可能性がある。

これらの調査後、ほぼ同じ場所に同じ走向の溝状遺構SD16・SD17・SD18を抽出した。比高差は10cm弱であり、前者とは若干時間差があるが、きわめて近接した時期に作られたと考えられる。

### SD3 (第9図)

9G区にある幅44cm、深さ40cmの溝状遺構で内部の中心以下に円礫がざっしり詰まっている。暗渠であろう。床面標高は5.8mで南北とも同じ高さであった。

出土遺物(第13図1～4) 3は中国製青磁碗で淡緑色の釉がかかる。

### SD4 (第8図)

8G区にある幅cm、深さcmの溝状遺構である覆乱のSP12に切られる。トレンチの北側にある細いSD6は分岐したのか。

### SD7 (第8図)

8F区にある溝状遺構で、覆乱(試験トレンチ)を挟んで北側にも続いている。北部はSD7として遺物を採り上げたが同一の遺構であろう。

出土遺物(第14図1) 9世紀の越州窯青磁碗の底部である。底部外面は蛇の目高台になっている。内外面とも全面に淡い緑黄色釉がかかる。底径7.2cm。

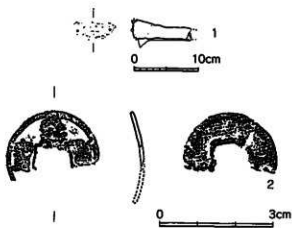
### SD8 (第10図)

四条のうち、東から二番目の溝状遺構である。検出標高は約6.2mである。SD8からは第14図に示す様な中世の遺物が出土したが、下層の遺物が混入したものであろう。

出土遺物(第14図2～4) 2は瓦質土器で口縁部が強く折れた鍋である。3は瓦質土器で器面はなで調整。4は中国製褐釉陶器甕である。両面とも施釉している。

### SD16 (第15図)

F7区にあり、北北東に走る溝状遺構である。



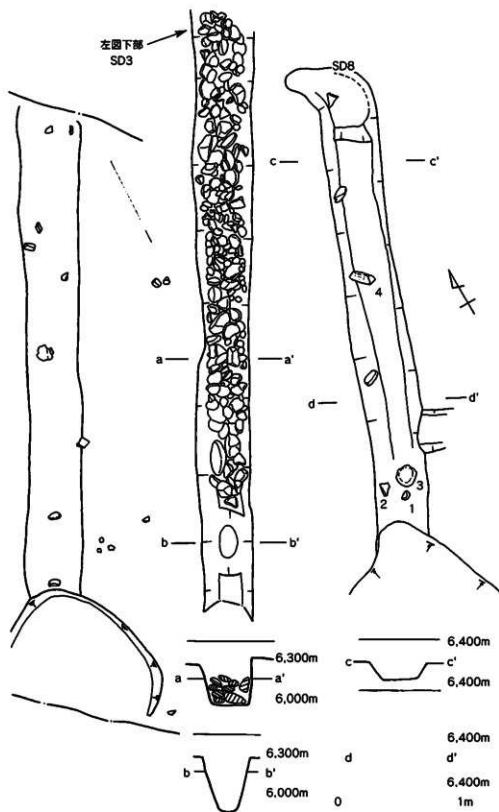
第10図 SK5出土遺物実測図(瓦S=1/6 鉢S=1/1)

### 出土遺物(第16図2・3)

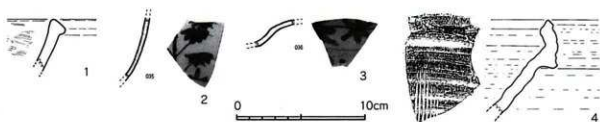
2は中国製白磁碗で口縁部は玉縁、全面に施釉している。12世紀代に比定する。2は外面に帯状の沈線4条が廻る。青磁香炉である。

### SD17 (第15図)

F7区にある。東側には同じ走向でSD16、西側にも細い溝が走る。これらは直前に掘り上げたSD3・SD4・SD7・SD8と同一方向である。検出面が水田床土の少し下であり、水田に伴う水路と考えられる。



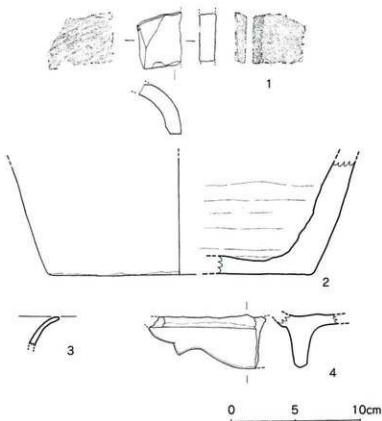
第11図 SD3・SD8遺構実測図 (S=1/30)



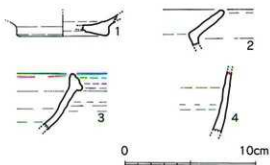
第12図 SD1・SD2・SX1 出土遺物実測図 (S=1/3)

出土遺物 (第16図  
1~3・第17図1・  
2)

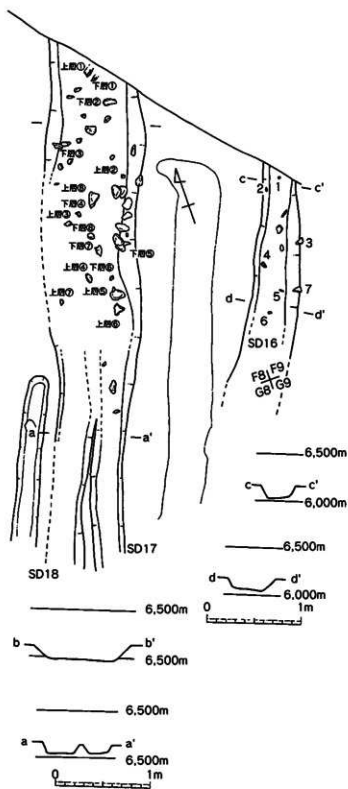
1は青花碗。2は白磁碗。3は青磁香炉である。4は段状なで調整痕の残る在地系土師器皿。5・6は京都系土師器皿で、外面上部を横なで調整している。第17図1は元祐通宝(北宋:初鑄年1086年)である。2は煙管の雁首である。筒部と皿部は別材で、接合している。筒から皿までの間が長く、緩やかに湾曲しており、江戸初期のものである。



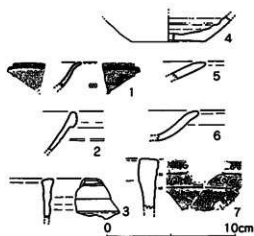
第13図 SD3出土遺物実測図 (S=1/3)



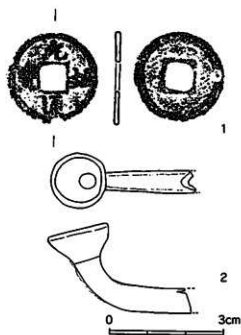
第14図 SD7・SD8出土遺物実測図 (S=1/3)



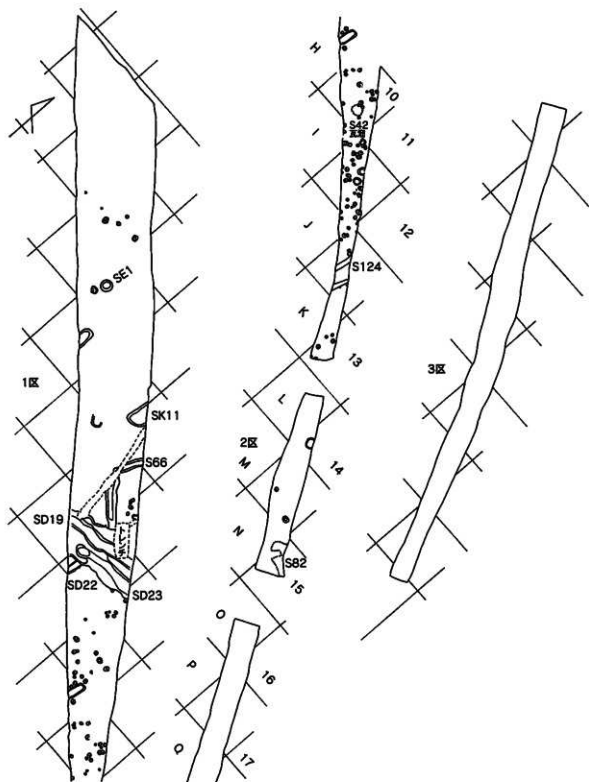
第15図 SD16・SD17・SD18遺構実測図 (S=1/40)



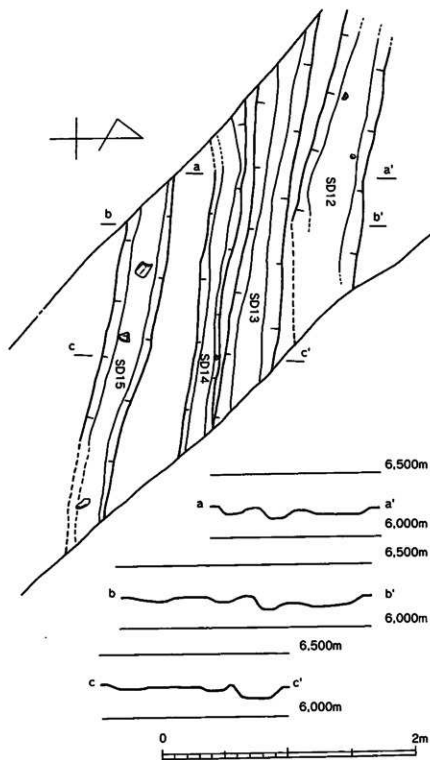
第16図 SD16-SD17-SD18出土遺物実測図 (S=1/3)



第17図 SD16-SD17-SD18出土遺物実測図 (S=1/1)



第18図 中層(新段階)遺構分布図



第19図 SD12・SD13・SD14・SD15遺構実測図 (S=1/30)

## 4. 1区中層(新)の遺構と遺物

## (1) 分布状態 掘乱を除去して最初に検出した遺構である。

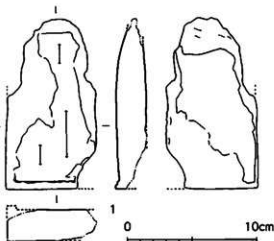
SP20(第90図) C5区にあり、周辺に京都系土師器が散布するので、この時期か。検出標高は6.07m。平面は58cm×49cmで小さい穴が二つある。埋土は灰色粘質土で、マンガンを多く含む。SP20の検出面と同じ高さで外側に溝状遺構SD11を検出した。出土遺物はない。

## SD12~SD15(第19図)

I2区にある東西方向に走る4条の溝状遺構である。それぞれの規模はSD12が幅40cm、深さ8cm、SD13が幅30cm~40cm、SD14が幅20cm~25cm、SD15が幅28cm~35cmである。あり方から見てほとんど同時期か連続的に使われた溝であろう。検出標高は6.25m前後である。SD3・4・7・8の延長部と南側の調査区外で直交して接続するような関係にあり、近世初め頃の可能性があるが北側土層を比較した場合、二枚ある水田床土の下部よりも下に位置すること、出土遺物は少ないが新しいものが見られないことから別の時期のものとする。

SD15からすずり(第20図1)が出土しただけで、時期を示す遺物は見られなかったが、検出順序から16世紀後葉位と推定する。

出土遺物(第20図1)黒褐色の石製の実器である。水を溜める海の方が欠失している。現存長は13.3cm、幅も不明で7.1cm以上、厚さは陸部分で2.4cmである。



第20図 SD15出土遺物実測図

## SK11(第21図)

SD9の北部を切って掘り込まれた浅い土坑である。SD9を切ることを確認した段階で把握した。検出標高は南部で5.93m、北部で5.95mである。埋土は黒色土で、規模は長さ4.3m、幅2.5m、深さ10cm。SK11は出土遺物からみて16世紀後葉に属す。

## 出土遺物(第22図1~4)

1~3は手捏ねによる京都系土師器皿(埴地編年3期)で、三点共同寸大である。分布図に示すように同時に捨てられた状況で出土した。2は一方所口縁部内面に煤が付着し、灯明皿として使われたことが分かる。3は口径9.0cm。6は土縄。

## SD19-旧番号S55-(第24図)

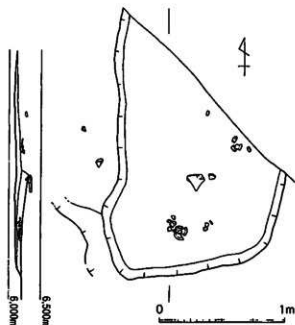
SD19は掘り下げ当初は焼土混じりの溝状遺構と認識して進めたが、焼土除去後も溝の痕が現れなかった。最終的な掘り下げの結果、遺構上面の幅は当初よりも東側に拡大し、下底では溝が二条に分かれてしまったので、下部で検出した東南部の溝上部をSD23(旧番号S94)とした。

以上の調査経過でもSD19の方が新しいとわかるが、土層の検討結果も、SD23の方が古いことを示す。第23図の西側層序にある第4層が焼土混じりの部分で、当初これを溝状遺構として調査した。SD19は上部の焼土混じりの部分とその下層とは遺物面で時間差が相当認められるので、上下は別個の遺構とすべきだった。

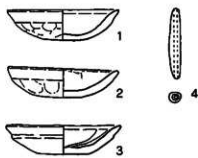
SD19(S55)とSD23(S94)の遺物は両者を区別して採り上げる事ができず、ただ、SD19の遺物出土状態図に示すもの(漆器類の全てとその他若干)、焼土混じりの層がなくなった後から出土したもの(採上げ時にS55とした-第25図9・27・28・30、第28図6)、最終的に東部下部の溝状遺構から出土した(採上げ時にS94とした)ものと区別した。

以下一部の報告内容には遺構を混同している可能性がある。SD19は出土遺物、遺構の重複





第21図 SK11出土遺構実測図(S=1/30)



第22図 SK11出土遺物実測図(S=1/3)



- 1: 最近の芥土。膠凝り黄褐色土。
- 2: 剥皮土。水田跡。
- 3: 上部は水田跡土で酸化、茶褐色土。
- 3': 炭褐色土。
- 4: 土上と炭化物を多量含む茶褐色土。
- 4': 炭化物少量を含む茶褐色土。
- 5: 樹物質(木屑)を多量含む灰褐色粘質土。
- 6: 砂質土中で粘質土を含む。

第23図 SD19-SD23付近南壁実測図

は外湾する。

口径7.2cm。29は板状圧痕があり、体部は内湾する。口径8.0cm。30は底面に板状圧痕がある。口径13.2cm。完全な形の1/5程度の破片であり、古い遺物の混入であろう。31は瓦質土器火鉢で、外面には帯状に器表面の残りの良い部分がある。竹製のたかか何かを巻いていたのだろう。最大径32.6cm。32は瓦質土器の鉢である。

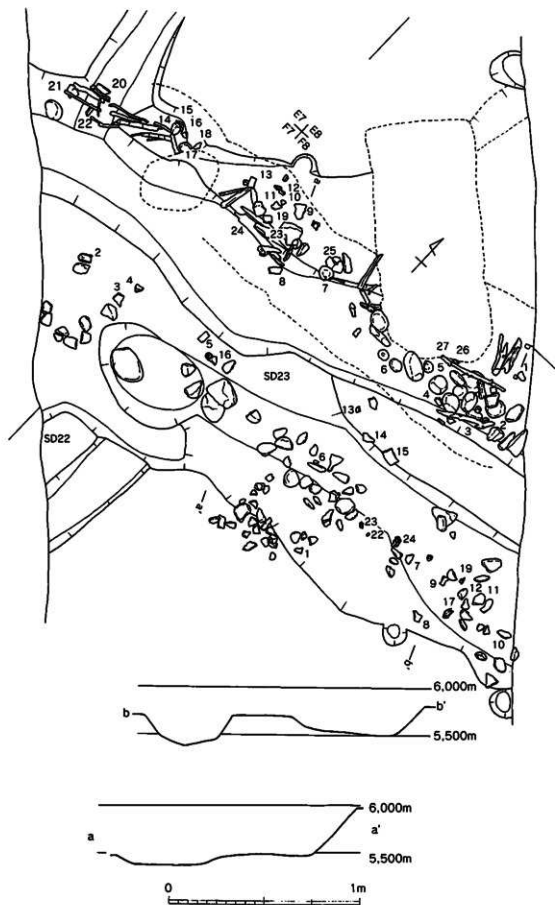
第26図1は中国景德鎮窯系青花皿である。外面に唐草紋を描く。小野分類のB1群。16世紀代の製品である。2は青花碗である。3~9は青磁。3は口径11.8cm、外面に沈線で蓮弁紋を描

関係から16世紀後半と思われる。

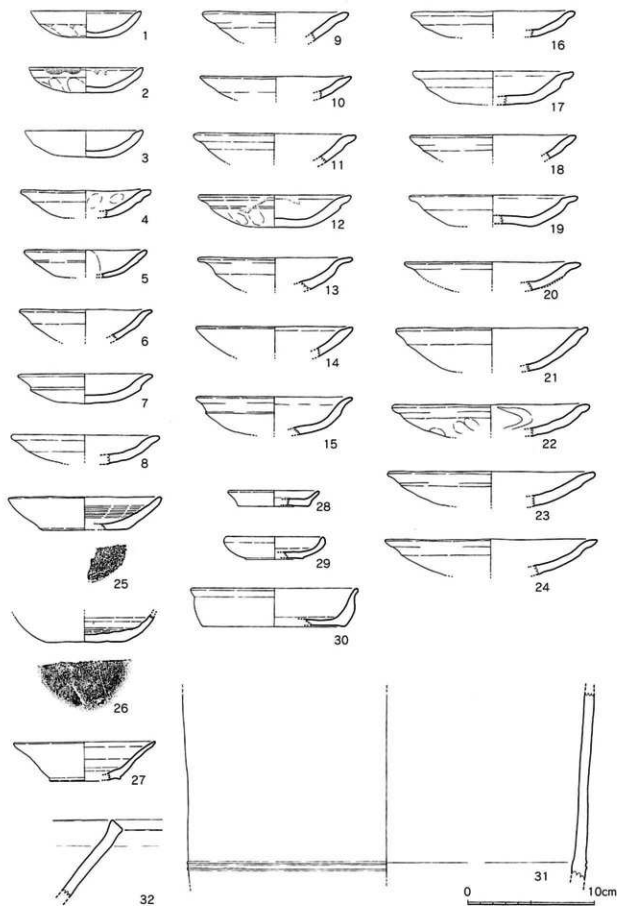
第24図に示すSD19遺物出土状態は、上部の焼土混じりの層中の状況である。焼けた木材・壁土・礫とともに漆器碗や下駄・京都系土師器・陶磁器類が出土した。火事場の後片付けの廃棄場所として、当時埋まりきらなかった状態のこの溝状遺構が利用されたい。

出土遺物(第25図1~32・第26図1~26・第27図1~5・第28図1~11・第29図1~7・第30図1~8)

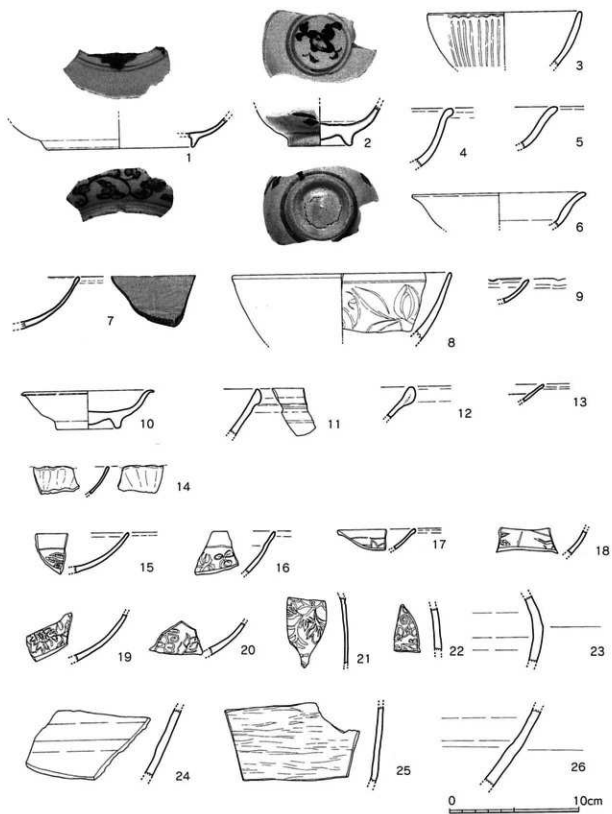
第25図1~30は土師器皿及び小皿である。1~24は京都系土師器である。4は口径10.2cm。5は外面上部から内面を横線で調整し、口径9.6cm。6は口径10.4cm。9は上部の焼土層より下で出土し、下層として採り上げた。口径11.6cm。10は外面下1/3以外を横線で調整している。口径12.0cm。13は口径12.3cm。14は外面を一様にならべており、口縁部と体部を区別しない。口径12.4cm。15は口径12.4cm。16は口径12.8cm。18は5と同様で口径13.0cm。20も5等と同様で口径13.8cm。21は口径15.0cm。22は切り離した粘土板の接合痕が残り、口径15.4cm。23は口径16.2cm。24は口径16.5cm。25~30は在地系土師器である。そのうち27・28・30は焼土混じりの上層ではなく、その下から出土しており、明らかに上層の焼土混じりの層と下層の遺構との間には時間的隔りがある。25・26は未切り底で内面に段状のなで調整痕を残す16世紀初頭前後のもの。25は口径11.9cm。27は淡黄褐色で長く薄い体部が外湾する。口径11.0cm。28は底面が厚く、体部



第24図 SD19・SD23遺構実測図 (S1/40)



第25図 SD19出土遺物実測図 (S=1/3)

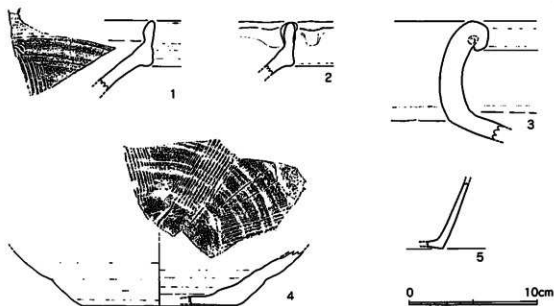


第26図 SD19出土遺物実測図 (S=1/3)

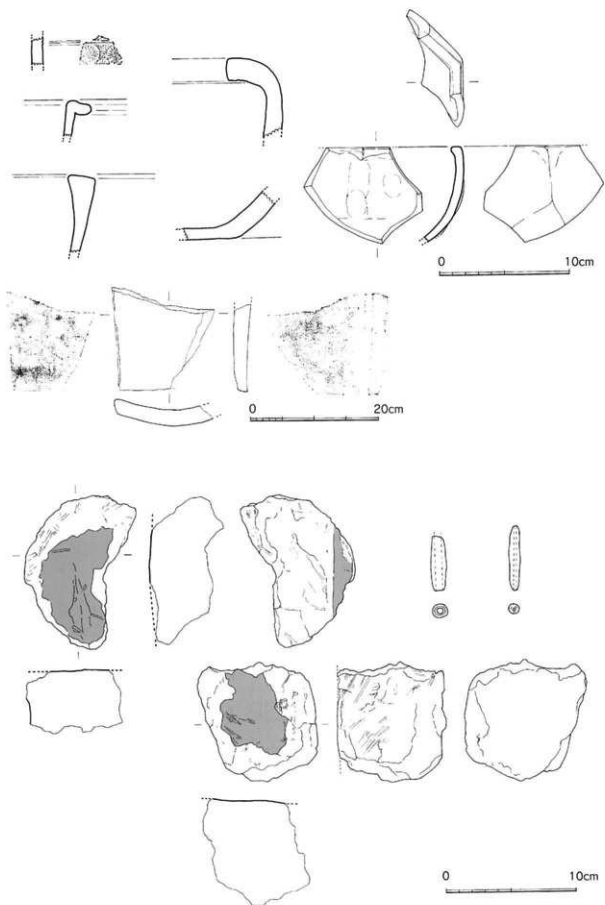
く小野分類の青磁蓮弁紋碗C群で、16世紀前半。4は中国龍泉窯系青磁碗。灰青色の釉がかかっている。5は皿。6は口径13.2cmの皿。8の外は無紋で、内面に片肉彫りによる紋様をもつ12世紀中頃から後半の龍泉窯系青磁碗。9は青磁蓮花皿。10は中国製の白磁皿で端反り口縁部で、16世紀。11・12は口縁部上端外面が玉縁状をなす11世紀後半から12世紀後半の白磁碗である。14は中国製白磁で菊花紋をもつ。15～22は外面無紋で、内面には型押しによる浮き出た紋様をもつ13世紀中頃から14世紀初頭前後の白磁碗である。薄手の作りで、口縁部は2.5mm、体部下で3～4mmである。23～26は褐釉陶器の壺で、16世紀中国南部製である。

第27図1～4は備前焼で、1・2・3は摺鉢、4は玉縁口縁の大甕である。玉縁の形状、頸部が垂直に立つ点から13世紀中頃(伊藤晃他2004)に比定できる。5は朝鮮陶器の舟形利底部である。第28図1～6は瓦質土器で、1は火鉢で、二条の沈線が巡らされた下位に菊花紋の刻印が並ぶ。2は土鍋。3～5は風炉である。表面は磨かれて光沢がある。7は平瓦、8・9は壺土である。片面に壁の表の面が残り、藁・竹の圧痕がある。10・11は土鍾である。

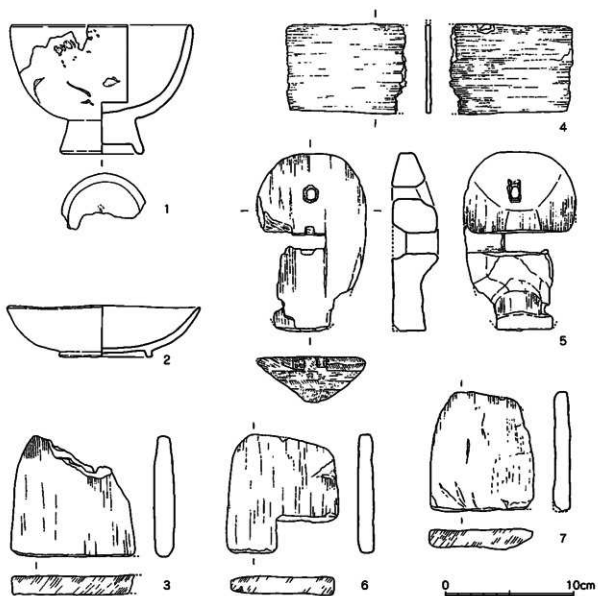
第29図1～7は木製品である。1は漆器碗で高台部が厚く、内外面とも黒漆地で外面と外底面には赤色の紋様があるが、剥離が著しく紋様は不詳。2は漆器皿で、内外面とも黒漆である。口縁部最大径は15.0cm、器高4.0cm、高台の最大径は7.7cm。3は折敷か。4～7は下駄である。4は踵部分が欠けており、全長は不明である。現状で長さ14.0cm、幅8.7cm、高さ3.5cmである。差し込み式の足を二つ必要とする型である。先端部は丸みを帯び、山状に盛り上がる。先端側の斜面に鼻緒を通す一孔があく。前方の足の差し込み部はほぼ残る(幅1.5cm差し込みの深さ2.4cm)が、後方の差し込み部は片面(前方側の面)しか残っていない。足と足の中間にも彫り込み加工を施しており、この部分で前方から来た鼻緒紐を結ぶようにしている。5～7は差し込み用の足部である。下底は真っ直ぐで、設置部は丸みを帯びる。5の場合、厚さ1.4cm、高さ9.5cm、幅9.6cm。6は厚さ1.2cm、高さ9.3cm、幅8.6cm。7は厚さ1.3cm、高さ9.4cm、幅8.0(+α)cm。足部はすり減っているが、現状の高さ9.5cmのものを差し込むとすると、下駄本来の高さは10.5cmである。



第27図 SD19出土備前焼他実測図 (S=1/30)



第28図 SD19出土遺物実測図 (S=1/3 瓦 S=1/6)



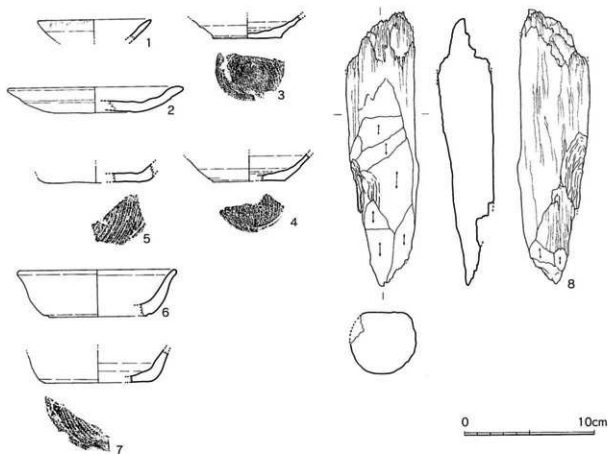
第29図 SD19出土木製品(漆器椀・折敷・下駄)実測図(S=1/3)

## SD23 (第24図)

初め、SD19を下部で焼土混じりの溝として掘り下げた結果、遺構の規模が拡大し、下部において二条に分かれたため、東南部をSD23として区別したものである。SD19を加え、下部で確認した溝状遺構の幅は約3.2m、深さは最大4.5cmである。

## 出土遺物 (第30図1~7)

1・2とも京都系土師器で、2の口縁部外面のなでは板状具を用いている。3~5は内面に段状のなで整形痕を残す在地系土師器皿。4は口径12.4cm、6・7は在地系土師器皿で、体部下部は厚く口縁部先端に向かって薄くなるもの。内面は段状のなで調整を残す。8は焼け残った杭である。下端は斧によってか尖らされ、上部は燃えている。長さ21.4cm、径5.2cm。



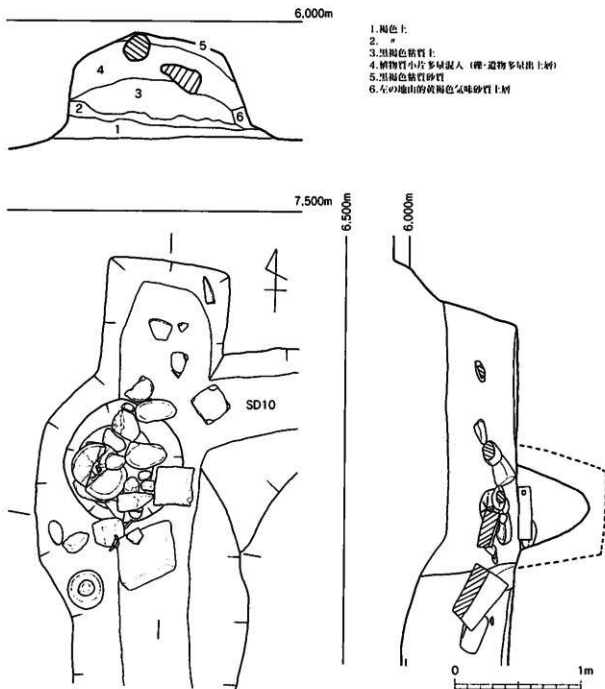
第30図 SD23出土遺物実測図 (S=1/3)



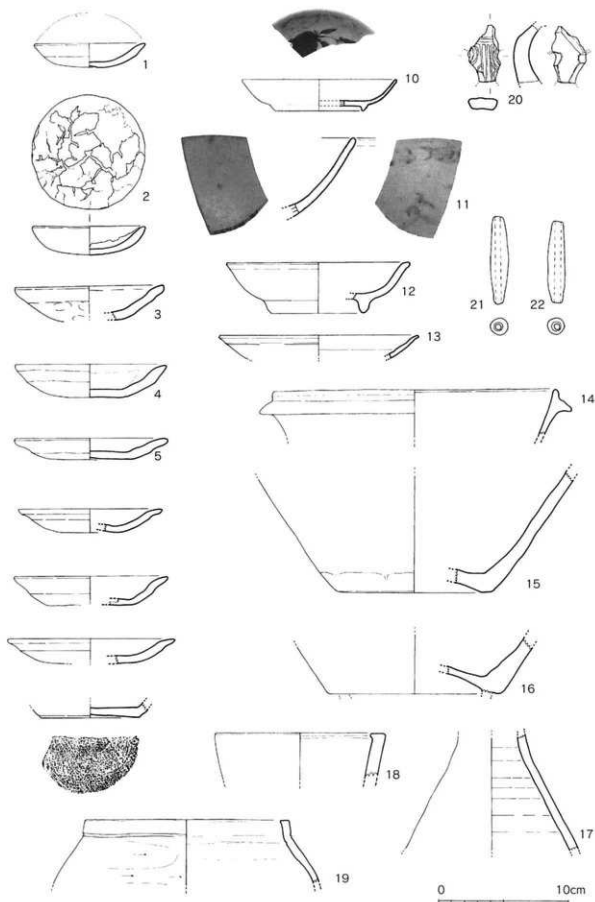
## SE1 (第31図)

4C区と5C区の境界に位置し、SD10・SD11を切って掘り込まれた井戸である。出土遺物から16世紀後半に位置づけられる。床面は砂削で湧水層(標高4.95m)となっており、調査の際も水中ポンプで排出しながら掘り下げた。井戸枠等は存在しない。検出面の平面形は不明だが、SD10・SD11に切り込んだ形は円形である。土層断面図(第31図)を作成した位置は中心から外れていたが、埋土に焼土はなかった。南北方向の断面図でも分かるとおり、最終段階には井戸底面よりも上面は広がっていたようで、多量の遺物が投げ込まれた状態で出土した。

出土遺物(第32図1~22・第33図1~5・第34図1~13・第35図1~5・第36図1・第37図1~6)



第31図 SE1遺構実測図 (S=1/30)



第32図 SE1出土遺物実測図 (S=1/3)

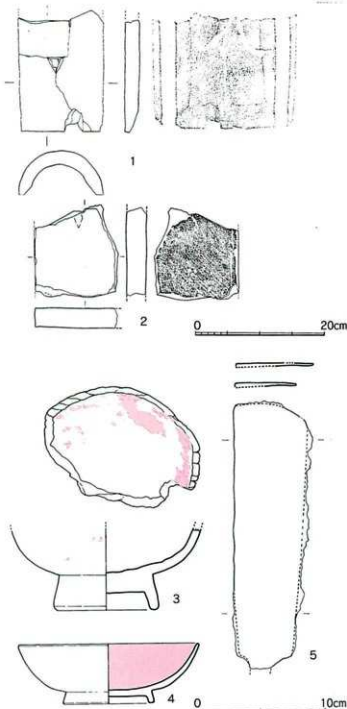
第32図1~8は京都系土師器皿である。1の口縁部内面には煤が附着し灯明皿として使われたことが分かる。2の内部には褐色の糊状の固着物が貼り付いている。3は口径11.6cm。5~8は京都系土師器皿で2期の特徴を示す。9は在地系土師器皿で外底面に糸切り後の板状圧痕を残す。10はE群の京徳鎮室系青花で16世紀後葉。11は漳州窯青花。12は龍泉窯系青磁碗。口径14.2cm。13は白磁皿で口径15.5cm、厚さは4mm未満と薄い。12世紀代のものか。14は暗褐色の瓦質土器鍋。突帯の最大径は24.1cm。器面調整はすべて横方向のなである。15・16は褐釉陶器壺。17は備前焼陶器壺である。表面は茶色を呈する。18・19は瓦質土器。18

青磁器台

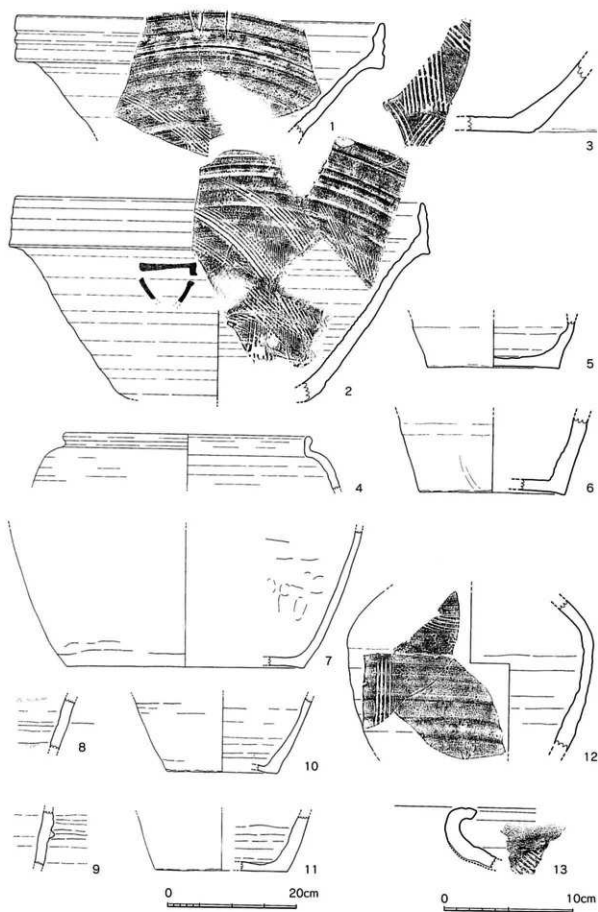
は口径13.3cm、体部は直線的に開き、口縁部内面上端は内側に突出している。灰色を呈する。19は鉢で、口縁部内外面及び胴部内面は横方向のなで調整、胴部外面は横方向のへら削り調整している。器体は淡橙褐色を呈する。20は元代の青磁器台である。四足の上にこの破片に該当する門飾りが付く。透かし状の窪みが二つ側面につく。外面には凸線による如意紋が描かれている。胎土は灰白色。全面に緑灰色の釉がかかる。類例が中国青田縣鶴白鎮の穴蔵から出土している(P128写真参照)。21・22は土鏝である。

第33図1は丸瓦、2は埴瓦。3は漆器椀で、内面には黒漆の上に部分的に赤漆が残存している。外面には黒漆の上に赤漆で何かを描いているが不詳。現状の最大径は14.8cm、高台上部の径は7.4cm、高台最大径は8.2cm、高台の高さは2.8cmである。4は漆器皿で、外面はすべて黒漆塗りで内面は赤漆塗りで、口縁部最大径は14.1cmである。5は鉄製板状製品である。図の下端に柄状の部分があり、包丁の可能性がある。

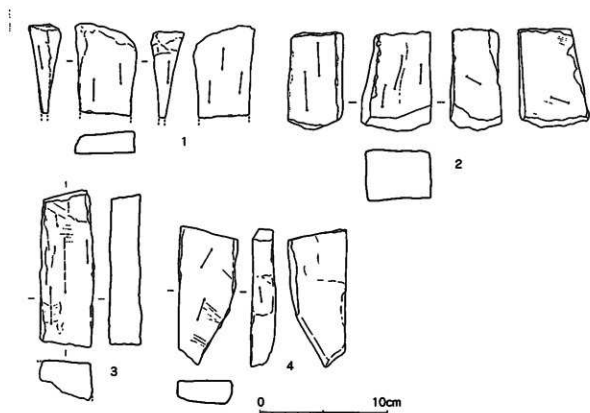
第34図1~12は備前焼である。3は播鉢の体部下から底部の破片で、10本からなる櫛状工具をつかってカキ目を入れている。4は復元口径38.8cmの甕で、頸部は短く、口縁部はやや丸みをもつ。7は甕の胴下部から底部である。5・6・10~12は焼締陶器壺。12は櫛状工具に



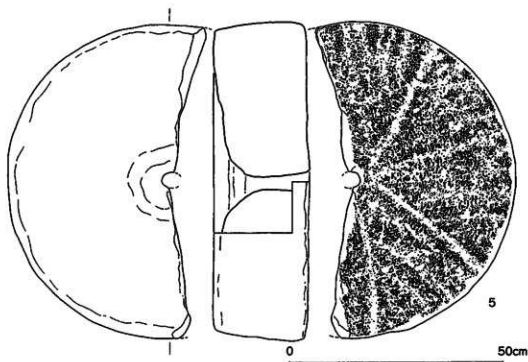
第33図 SE1出土遺物実測図 (S=1/3 瓦S=1/6)



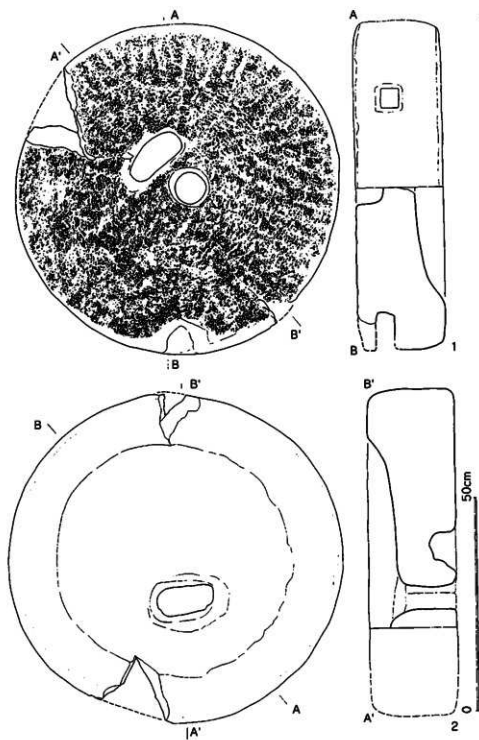
第34図 SE1出土備前焼他実測図 (S=1/3 4,7~11 S=1/6)



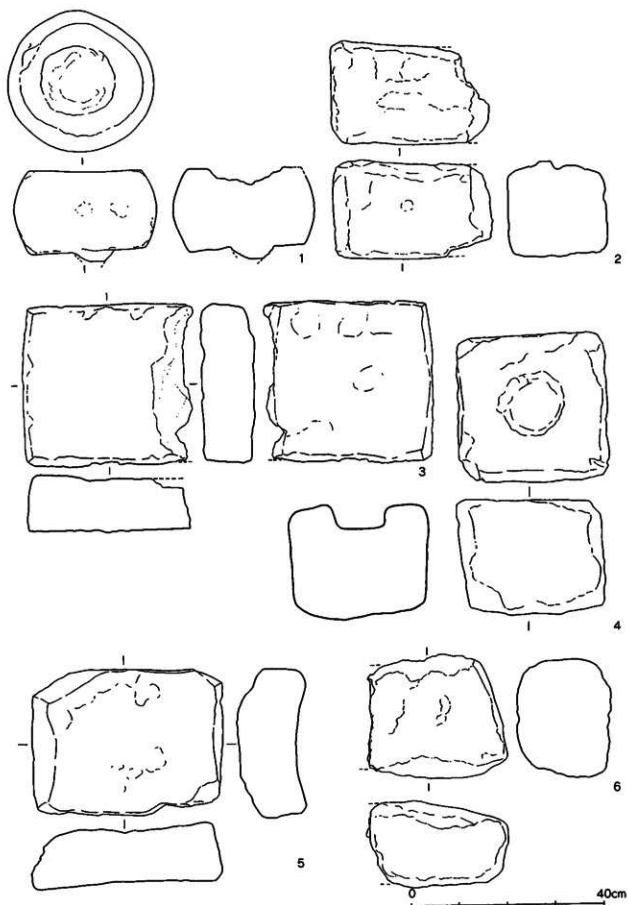
第35図 SE1出土石臼実測図 (礫石S=1/3 石臼S=1/9)



第35図 SE1出土石臼実測図 (S=1/9)



第36図 SE1出土石白夷刺圖 (S=1/9)



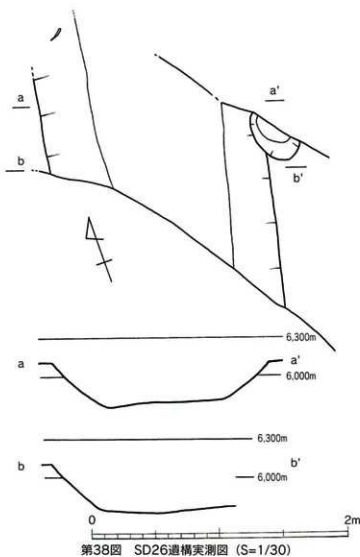
第37図 SE1出土五輪塔部材実測図 (S=1/8)

ハンネラ

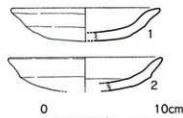
より波状紋を肩部に、胴部に縦方向の紋様をいれている。13はタイ製土器ハンネラで、口縁部上面に一段、沈線が廻り、肩部には叩き痕がある。胎土に砂粒が多い。

第35図1～4は砥石で、1は立方体の四面を使用するが、半切している。2も四面を使用するもので、両端を欠失する。3は大型の砥石らしく、割れのため研磨面が直角関係の二面しか残らない。4は扁平な砥石である。5は石臼。

第36図1・2は同一個体である石臼の上下両面の実測図である。直径は38.8cm。  
第37図1～6は五輪塔部材。すべて凝灰岩製。



第38図 SD26遺構実測図 (S=1/30)



第39図 SD26出土遺物実測図 (S=1/3)

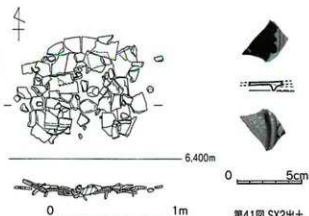


SD26 (第38図)

J12区にあり、北北東から南南西に走る溝状遺構か。遺構を確認したのは地山面であったが、埋土上部がレンズ状に堆積しているので掘込み面は土層図によればやや上位のようである。幅1.7m、深さは最大35cmである。京都系土師器が出土している。

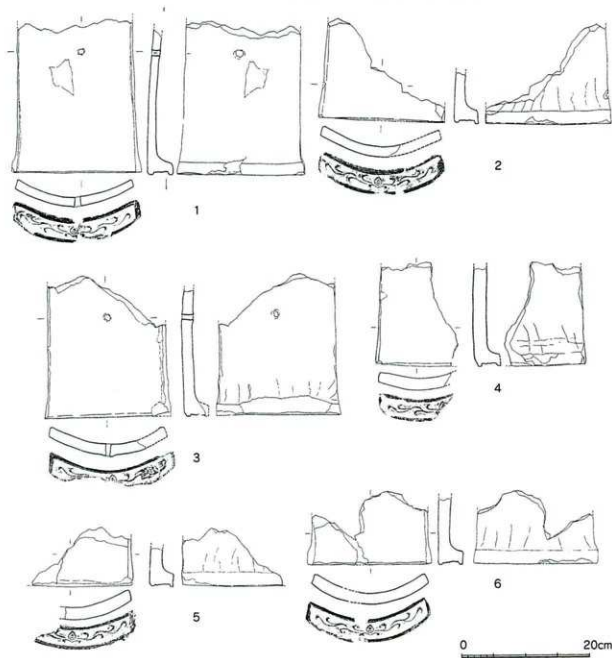
出土遺物 (第39図1・2)

1・2とも京都系土師器で、16世紀後半頃か。



第40図 SX2遺構実測図 (S=1/30)

第41図 SX2出土青花実測図(S=1/3)



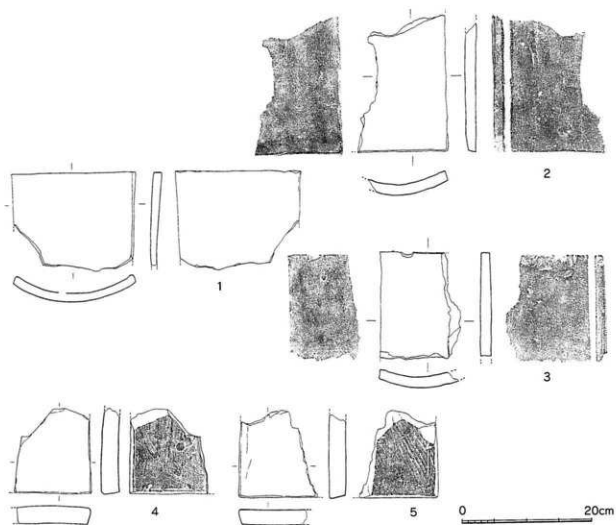
第42図 SX2出土瓦実測図 (S=1/6)

## SX2 (第40図)

1区東部の10H区東部で検出した瓦溜まりである。平面円形状態で薄く散布していたので、浅い土坑に入っていたものか。標高約6.1m~6.2mに検出した。詳しい時期は分からないが、地山直上の包含層を下げて検出したので、ここで紹介しておく。

## 出土遺物 (第41図1・第42図1~6・第43図1~5)

瓦礫以外の遺物は青花皿1点(第41図1)だけである。SX2の瓦は6点の軒先瓦と他にも平瓦はあるが平瓦3点、埴瓦2点を図示した。紋様は中心飾りに向かって右側に上向き唐草が二つ、下向き唐草が三つある。左端二つの唐草が接近しているのに対し、右端の二つは離れている。また、中心脇の上向き唐草と外側の下向き唐草の関係に差がある。すなわち右の方は接触しているのに、左のは相互に離れている。これらの点から見ると、SX2から出土した軒平瓦は全て同一の型を用いて制作されていることが分かる。



第43図 SX2出土瓦・埴瓦測図 (S=1/6)

## 5. 1区中層(古)の遺構と遺物

(1) 分布状態 16世紀前葉前後のもの。1区では浅い溝状遺構(SD10)とそれに重複する溝状遺構(SD11)、土坑(SK12・SK14・SK17)を検出した。多数の柱穴を1区東部で検出したが、所収時期不詳のため、第85図に一括したことを付記しておく。

## (2) 遺構と遺物

## SK14 (第46図)

近世の溝状遺構SD32に切られ、SK12を切る形で9F区に位置する土坑である。検出標高は6.0mで床面は5.8mである。調査区外に延びており全体の形は不明。出土遺物には若干時期差が認められるので、あるいは上層に含めるべきかも知れない。

## 出土遺物(第47図1~10)

1~4は京都系土師器の小皿と杯である。5は在地系土師器皿で、体部は上に向かって尖り、「S」字に屈曲する。糸切り底である。体部下部が厚く、口縁端部に向かって細くなり、14世紀中葉から後半の特徴をもつ。6は中国南部製の褐釉陶器である。胴部最大径は14.0cm。表面採集した7は同一個体である。登付きから外面に褐色の釉がかけられている。8は瓦質の火鉢である。三角突帯の間に双頭麻手流雲紋を連続的に押捺するもので、暗灰色を呈する。器面は丁寧にへら磨きしている。9は青花碗である。10は糸切りの底部から直線的に体部が開くもので、15世紀後葉から16世紀前葉のもの。

## SD10 (第48図)

1区西部の4C区から5C区に東西方向に走る幅2.6mから3m強の溝状遺構である。深さは西部で30cm、東部では別の溝状遺構と重複している。SD10との新旧関係を平面的につかむことはできなかった。4C区と5C区との境界に北側に下がる段差があるが、これはSD10上部の自然崩壊過程で上部が広がったものであろう。

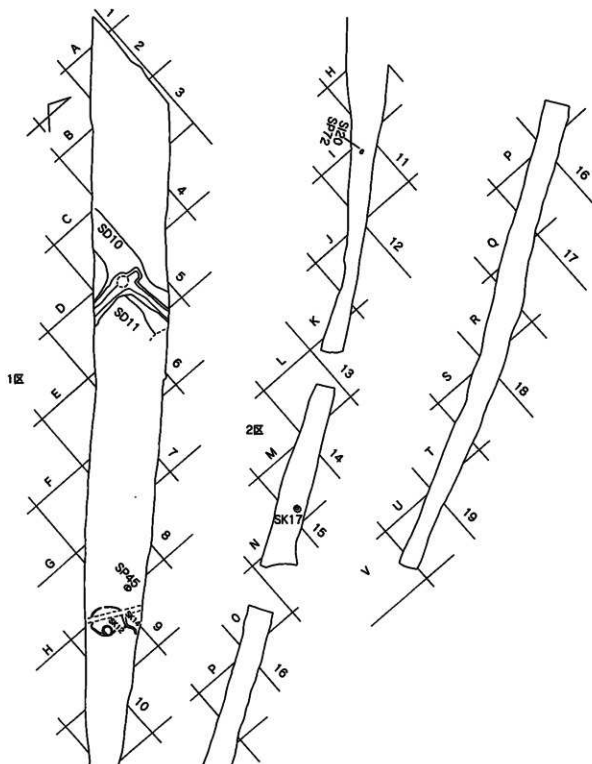
## 出土遺物(第49図1~13・第50図1~25)

第49図1~4は磚瓦である。5・6は京都系土師器、7~12は在地系土師器である。11は内面に段状のなで調整痕が残り、胎土に石英を含む。12は糸切り13は灰白色の色調で底部は3mm、体部で4mm以下と薄手である。外面には糸切り後の板状瓦痕が付く。大内系土師器の搬入品であろう。

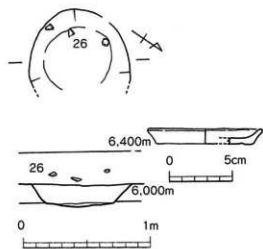
第50図1~4は青花。1は鉢。2はいわゆる靨頭心碗で、16世紀後葉。5・6・8・9は青磁。5は菊蓮弁紋の龍泉窯の碗、6は樹樞き紋のある同安窯系碗。7・10~12は白磁。7は内面に雷紋と葉紋を型押しし、口縁部上端を削ぎした後、茶色に施紋している。厚さ3mm弱の薄作りである。類例がSE1で出土しているが、茶色施紋の有無で相違点がある。13は瓦質土器。突帯を貼り付けた下位に菊花紋を連続的に刻印している。17は朝鮮陶器の舟徳利。18は備前焼壺。19は大型の葉紋を刻印した瓦質土器の火鉢。22~25は瓦。

## SD11 (第51図)

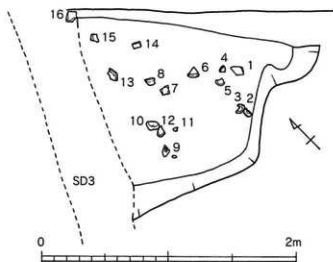
1区の西部、C5区・D5区に位置し、SD10とSE1と重複した状態で検出した。検出面で前後関係は把握できなかったが、出土遺物の年代観からみてSD10を切るらしい。SE1に切られていることはその内部に投げ込まれた遺物の状態から判断できる。SD11は平面的には南北方向の溝が東西方向の溝の交点よりも飛び出ており、二つの遺構が重複した結果とも思える。交差する部分にSE1が張り込まれているため、前後関係及びその有無を確認できなかった。



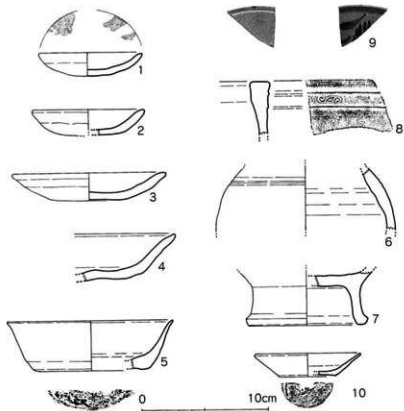
第44図 中層(古)分布図



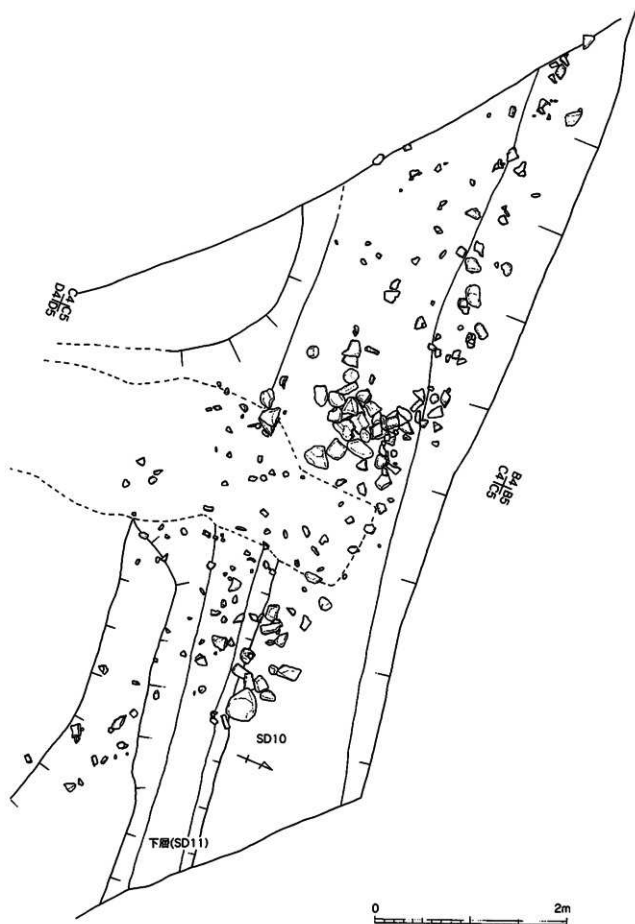
第45図 SP69遺構出土遺物実測図 (遺構S=1/30,遺物S=1/3)



第46図 SK14遺構実測図 (S=1/30)



第47図 SK14出土遺物実測図 (S=1/3)

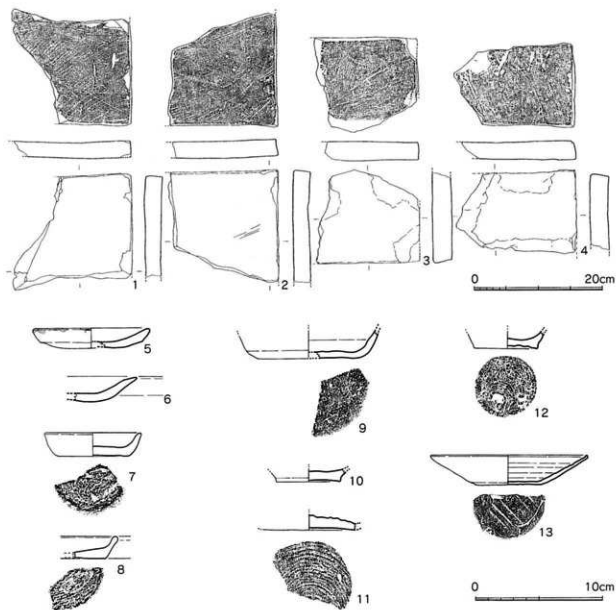


第48図 SD10遺構実測図 (S=1/40)

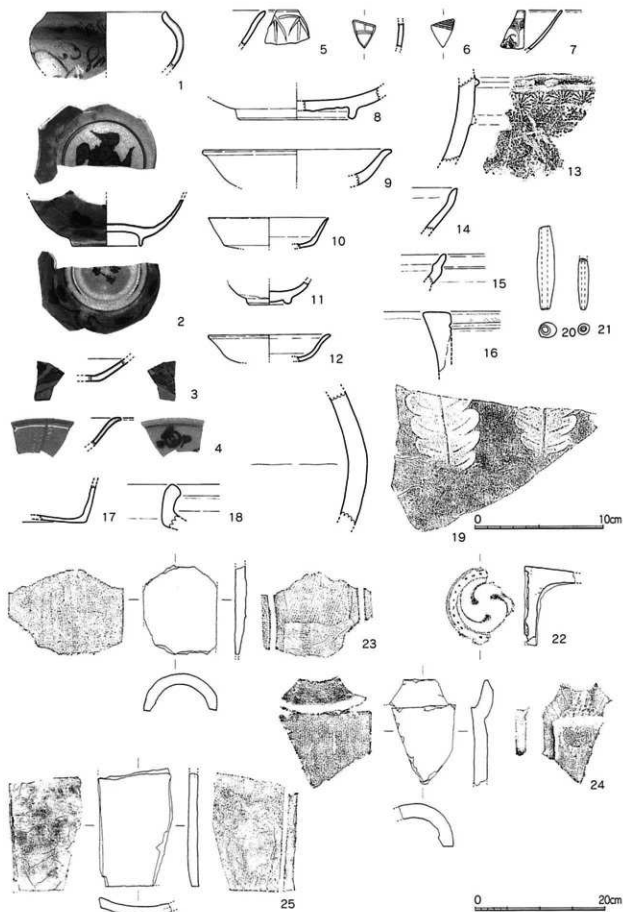
## 出土遺物(第52図1~16)

1~7は土師器皿で、1は内面に段状のなで調整があり、糸切り離し底部であろう。口径8,6cm。2は糸切り離しの底部で、口唇部に煤が付着しており、灯明皿として利用したものである。口径7,5cm。3~7は京都系土師器。4は内外面に部分的に煤が付着しており、灯明皿として使用されている。5は口径15,8cm。6は側面に羊歯の圧痕が付く。口径16,2cm。7は部分的に煤が付着しており、灯明皿として使われている。口径12,3cm。8・9は青花碗で、どちらも口縁部内面上部に紋様帯をもつ。9の内面には四方禪紋、外面には草花紋を描く。10は龍泉窯系青磁碗で外面に沈線紋をもつ。二次的に焼かれたのか、内面に煤が付着し外面に気泡が認められる。11は中国製褐釉陶器で、両面全体に釉薬がかかる。12は土製の盃。13は両端を欠損した砥石で両面と側面の一つに研ぎ面がある。14は埴瓦で、右図に示す裏面には紐を利用した切り離し痕跡(コビキ痕)がある。その後、板状具によって不定方向になで調整を加えている。15は備前焼甕。16は黄褐色の石材で、一部に自然面を残す礎石である。土化木か。

礎石

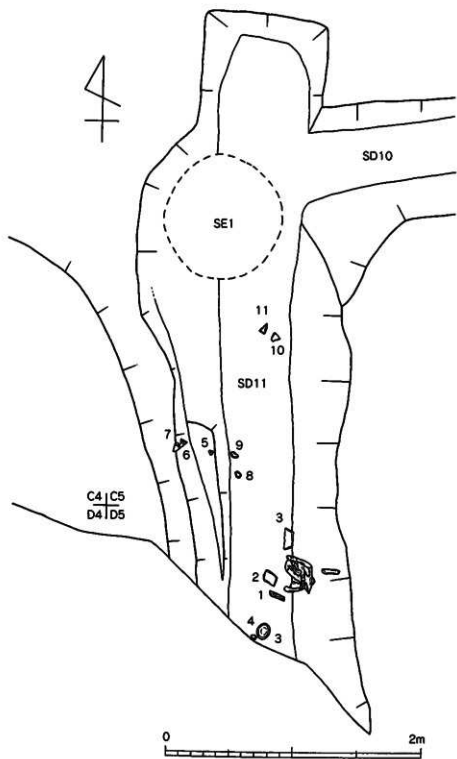


第49図 SD10出土遺物実測図(S=1/3 互S=1/6)

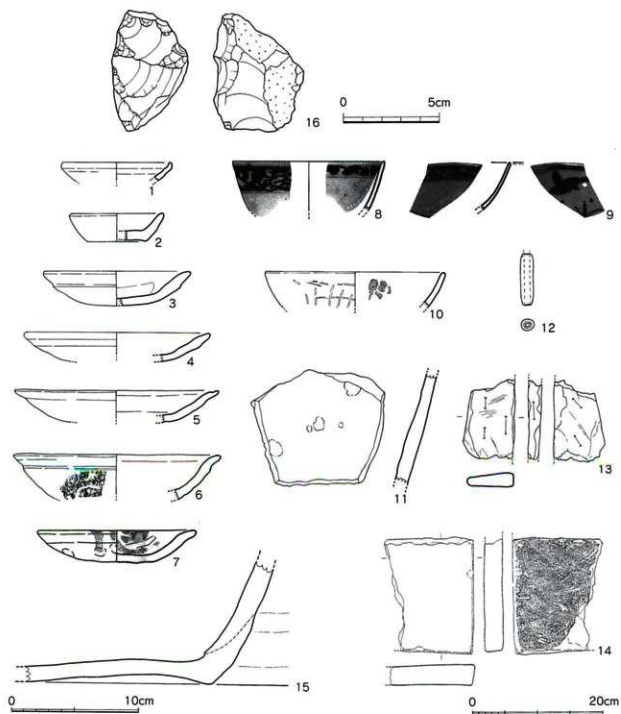


第50図 SD10出土遺物実測図 (S=1/3 瓦S=1/6)

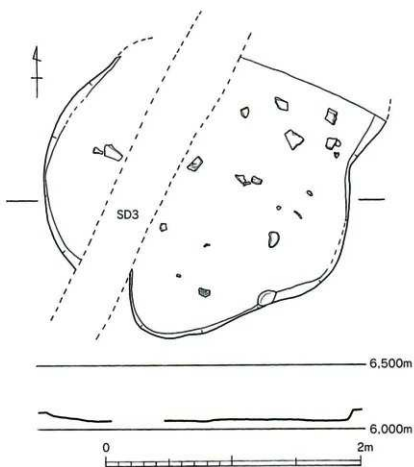




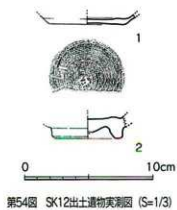
第51図 SD11遺構実測図 (S=1/30)



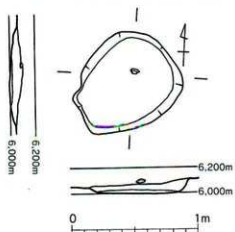
第52図 SD11出土遺物実測図 (S=1/3 塙S=1/6)



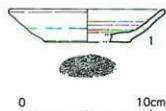
第53図 SK12遺構実測図 (S=1/30)



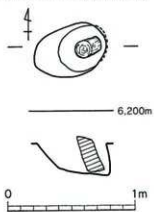
第54図 SK12出土遺物実測図 (S=1/3)



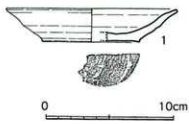
第55図 SK17遺構実測図 (S=1/30)



第56図 SK17出土遺物実測図 (S=1/3)



第57図 SP45実測図 (S=1/30)



第58図 SP45出土遺物実測図(S=1/3)

## SK12 (第53図)

1区のF9区・G9区に位置する浅い土坑である。SK12を壊して掘り込まれ、SD3が後から重複している。

## 出土遺物 (第54図1・2)

1は底部糸切り難しで、灰白色を呈する大内系土師器皿である。底部形、1cm。2は中国型泉窯青磁碗で、内面のみ施釉している。

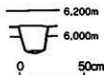


## SK17 (第55図)

9G区に位置しSK12の下で確認した。検出標高は6,11mである。

## 出土遺物 (第56図1)

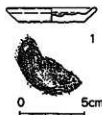
1は内面に段状のなで調整痕を残す在地系土師器である。底部はやや厚く、体部は直線的に外反する。底径6,7cm、口径12,3cm、器高6cmで焼成は堅い。2は和泉型瓦器椀。外面は横方向のなで調整。口唇部から内面は横方向のへら磨きが主体。この他小片だが和泉型瓦器椀の破片が2点出土している。



第59図 SP78  
遺構実測図(S=1/30)

## SP45 (第57図)

F8区に位置し、SD8の下で検出した柱穴で、直径10cm強の柱が残っていた。検出面の標高は6,11mである。



第60図 SP78  
出土遺物実測図(S=1/3)

## 出土遺物 (第58図1)

1は糸切り底で体部が強く外反する在地系土師器皿である。口径13,4cm、底径7,8cm、器高2,6cmを計る。15世紀後葉に比定する。

## SP78 (第59図)

1区東部の111区にあり、SD24の東南外に位置する。周辺は多数の柱穴が密集する場所である。

## 出土遺物 (第60図1)

1は内面に段状のなで調整痕をもつ在地系土師器皿である。

## 6. 1区下層の遺構と遺物

(1) 分布状態 ほぼ15世紀後葉以前をまとめて掲載する。

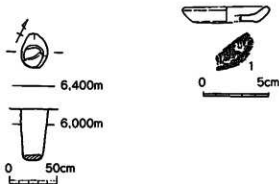
## (2) 遺構と遺物

## SP35 (第61図)

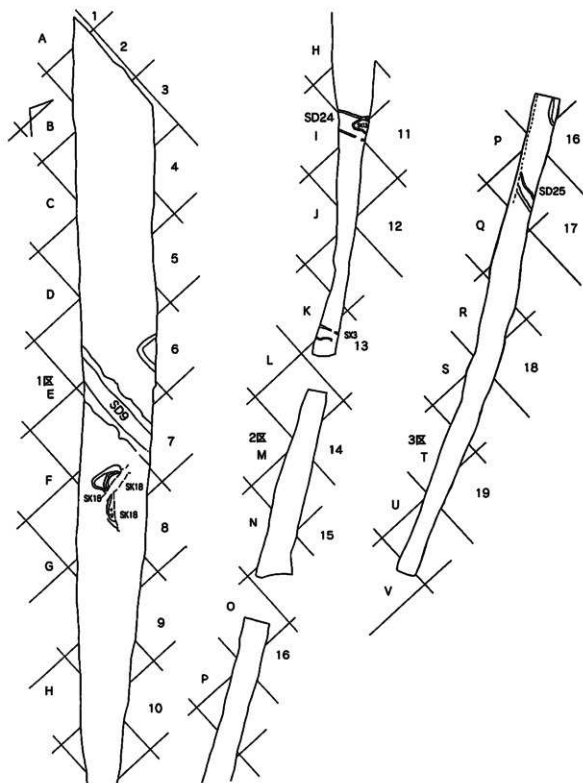
111区の柱穴である。土師器皿が1点出土された。(第61図)

## SD9 (第63図)

D6区を中心に東西方向に走る溝状遺構で、平面的な検出標高は南部で6,15m、北部で5,98m前後である。東北側の壁土層では6,2m付近から下



第61図 SP35出土遺物実測図(S=1/3)



第62図 下層遺構分布図

に確認できる。確認面の幅は約2.6mで、北東部をSK11とSD20・SD21に切られていた。

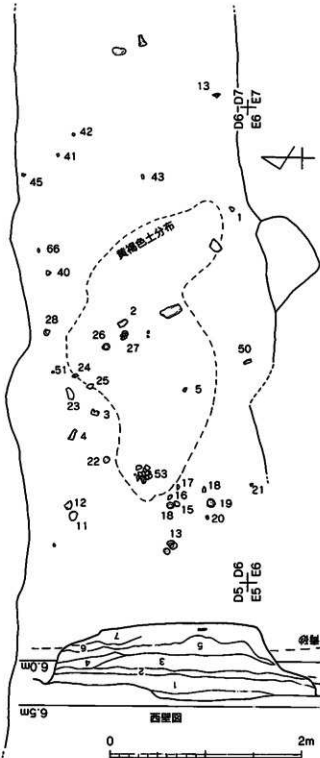
層序は東北側壁土層では、1層：黄褐色粘土層・2層：黒褐色土層・3層：褐色凝じりの土層・4層：1層に類似・5層：2層に類似・6層：木製品を含む黒色土層・7層：青灰色細砂凝じりの土層・8層：黒褐色砂質土層・9層：砂層・10層：黒色粘質土層である。遺構外は上半部が黄褐色砂質土層、下半部が青褐色砂質土層である。南部壁土層では、1層：黄褐色粘土層・2層：硬く黄味をもつ褐色土層・3層：茶褐色土層であり、黄褐色の硬い砂の塊状を含む・4層：黒褐色土層・5層：砂質土層である。地山の青色砂を含む・6層：青色砂層・7層：やや土を含む砂層。遺構外は東北側壁にはなかった下層である青砂層も現れている。南北壁とも上半部は土層（北は1～5層、南は1～4層）、下半部は砂層である。下層には常に水が湧き出ており、土師器類の他に下部の砂層から板や自然木、背骨が一葉がりになったクロマグロの骨が出土した。食膳具と食器と食料が揃って出土したわけである。

第63図はSD9を検出した段階の遺物分布状態である。また、第67図は埋土下部で出土した主な遺物の分布状況である。東北側壁土層の7層上面にクロマグロの背骨が連結した状態で二列出土し、付近にも尾節の部分の骨が出土した（第58図）。背骨が連なった状態からみて、個体を長さ40cm位に分断していたものと思われる。SD9最下層は14世紀初頭である。下層の主な遺物の分布状態を第70図に示す。

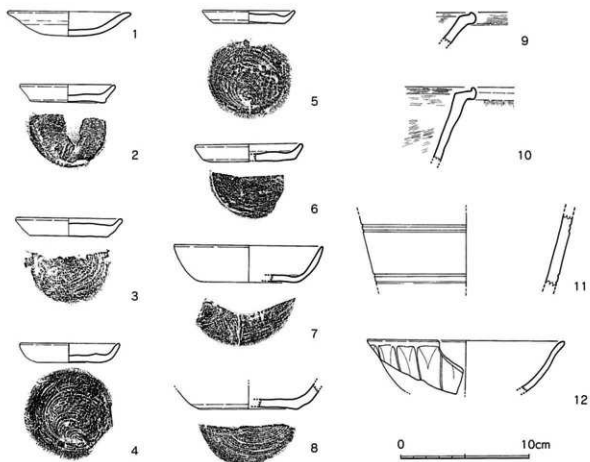
出土遺物（第64図1～12・第65図1～7・第66図1・第68図1～22・第69図1～23・第71図1～6・第72図1～4・第73図1～6・第74図1～3）

第64図1～8は土師器で、1だけが京部系土師器。1・2は検出面で出土した最上層の遺物であり、3～12は下層よりも上の中間の層から出土した。6は口径8.6cm、底部が厚く短く薄い体部が外反する。7は口径12.8cm。9・10は瓦質土層の類である（山本哲也氏2004では鍋B類-14世紀前半）。11は備前焼鉢。

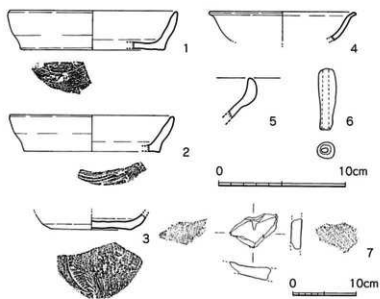
クロマグロ



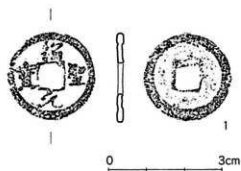
第63図 SD9検出面遺物分布図



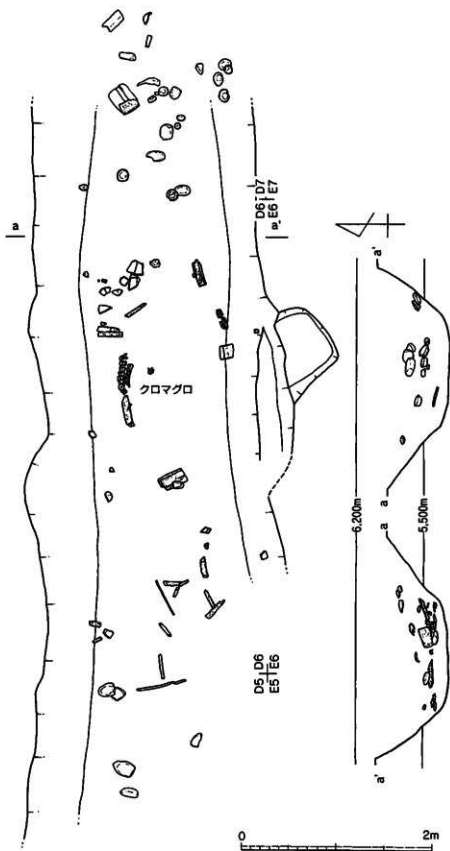
第64図 SD9上部・5層出土遺物実測図 (S=1/3)



第65図 SD9出土遺物実測図 (S=1/3 瓦S=1/6)

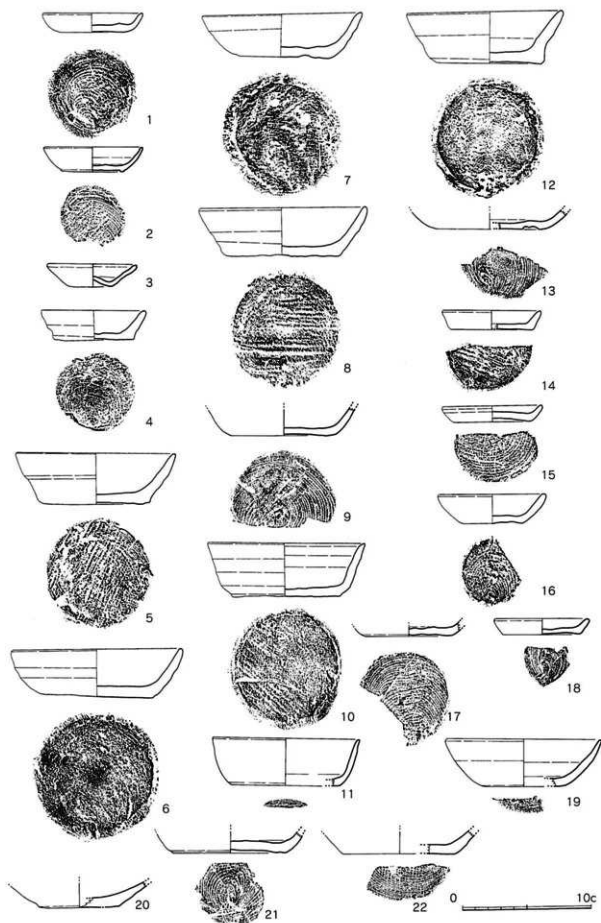


第66図 SD9出土銭実測図 (S=1/1)

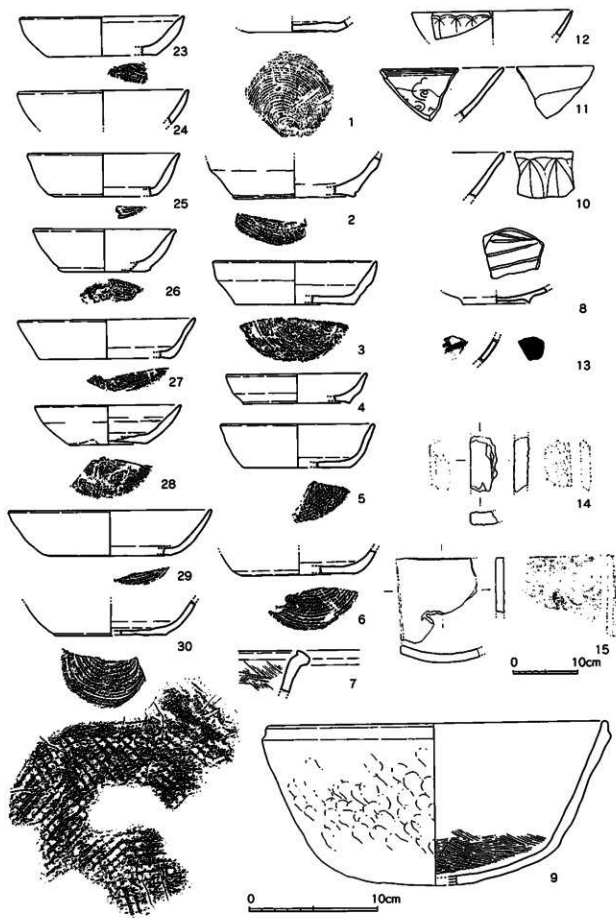


第67図 SD9下層遺物出土状況実測図 (S=1/40)





第68図 SD9出土遺物実測図 (S=1/3)



第69図 SD9出土遺物実測図 (S=1/3) (瓦S=1/6)

## ヘソ皿

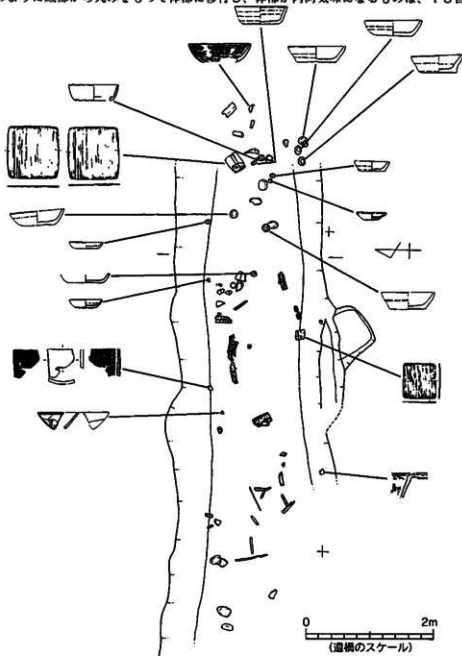
12は13世紀中頃から14世紀初頭の龍泉窯系青磁。

第65図1～3は土師器である。1は14世紀初頭。4は中国製白磁碗で口径11.6cm。5は瓦質土器の鉢。6は土鉢。7は格子目印きのある古代平瓦。

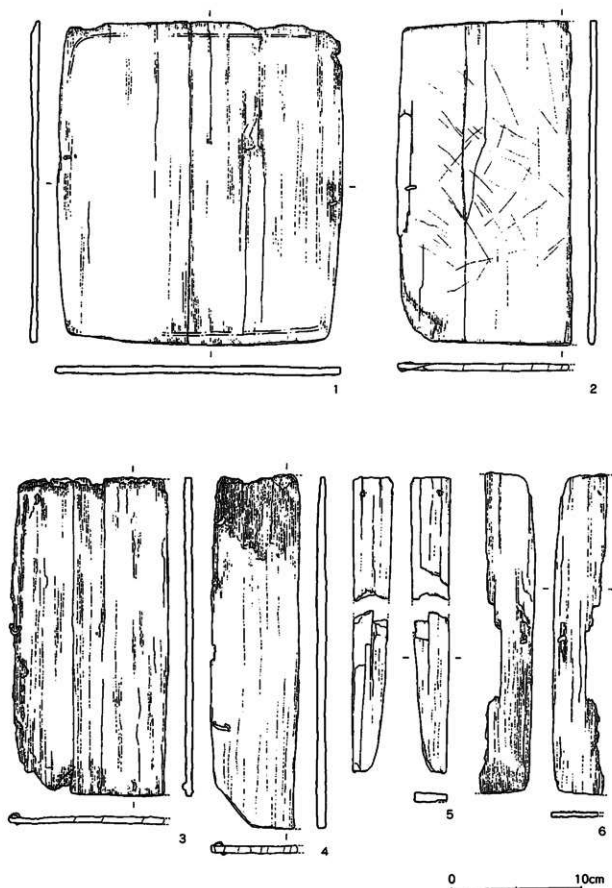
第66図1は北宋銭の紹聖元宝。

第68図1～22は下層（主に6層）から出土した土師器皿である。2・12・17・19は胎土に金色の雲母を含む。2は口径7.7cm。3は京都系土師器の甕入品である。口径7.0cm、高さ1.8cm。ヘソ皿と呼ばれる京都系土師器である。底面は底から押し上げられて上に突き出ている。2・5・8・9・10・14・19・22は外底面に板状圧痕のついたものである。11は口径11.6cm。18は口径7.5cm。19は口径12.2cm。

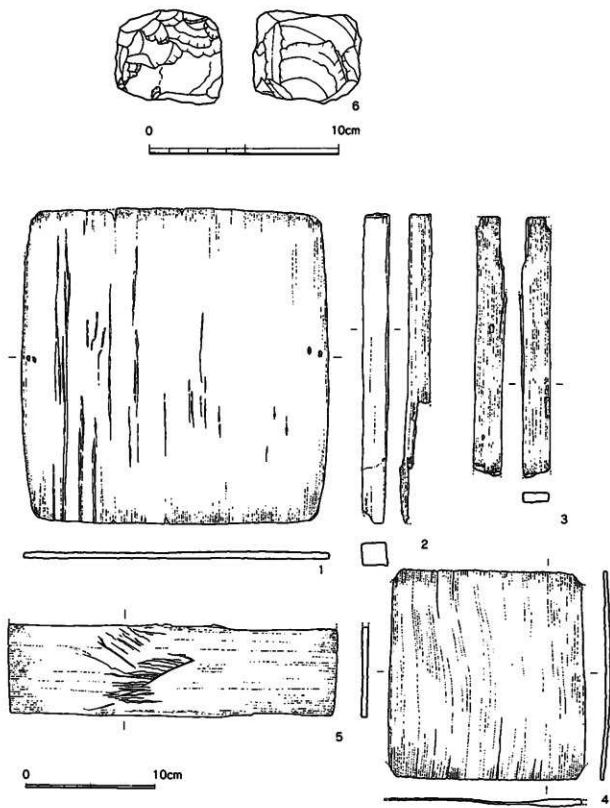
第69図1～23は下層出土で、1～14は土師器で、3・4・6・7・12～14は胎土に金色の雲母を含む。3は口径11.8cm。4は口径11.3cm。6・14には板状圧痕がつく。6・7のように底部から丸みをもって体部に移行し、体部が内湾気味になるものは、13世紀後葉頃。



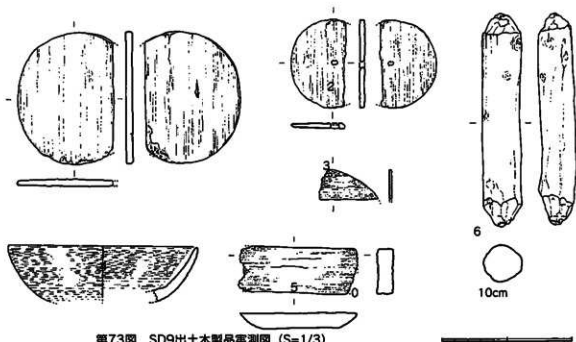
第70図 SD9下層遺物分布図



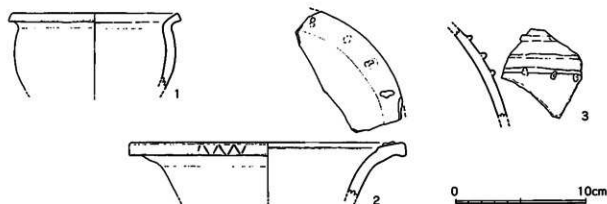
第71図 SD9下層出土木製品実測図 (S=1/3)



第72図 SD9下層出土木製品・燧石尖刺図 (S=1/3)



第73図 SD9出土木製品実測図 (S=1/3)



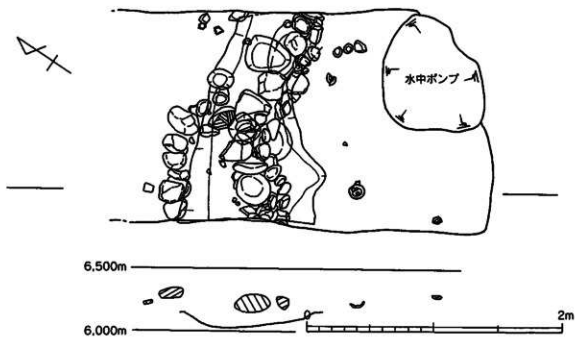
第74図 SD9出土弥生式土器実測図 (S=1/3)

7は口径15.8cm、胎土に金色の雲母を含む。12は体下部で屈折し口径11.0cm。14のように体部の中位が厚いものは14世紀前半の特徴である。15・17は瓦質土器。15は内面を刷毛目調整し、外面はなで調整した鍋である。胎土に石英を含む。17は突帯が退化し、口縁部上端が厚く、少し下が厚くなったもので14世紀代の鍋である。底部と体部は屈曲点で区別できるが、外底面は格子目叩きである。16は内面に幅2mm程度の緯状の磨きを紋線として加え、断面三角の高台を貼り付けた12世紀後半の和泉型瓦器碗である。外面はなで調整のままで灰黒色、内面は灰色を呈する。この溝からは和泉型瓦器碗は他にも破片が5層から1点、最下層から2点出土している。18は13世紀前半の、19は12世紀中頃から後半の、20は14世紀の龍泉窯系青磁碗である。22は古代の平瓦。

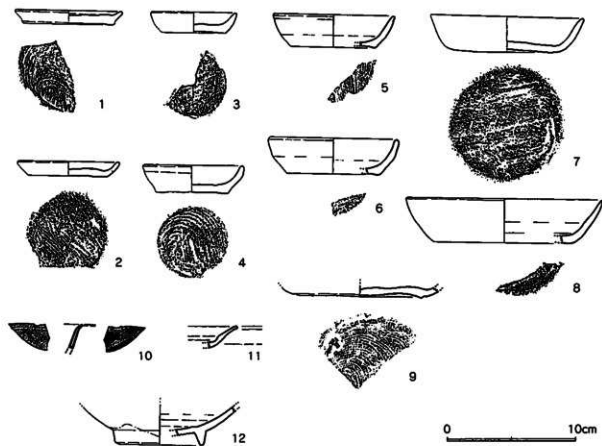
瓦器類

木製品

第71～73図は下層出土の木製品である。第71図1～6・第72図1～5は折敷である。一見、杉材らしい。1は長さ25.1cm、幅22.2cmで正方形に近い。出土時には二側面の部材が残っていた。表面に痕跡が認められるが、外周よりやや内側に側面痕がある。胴部は屈曲しており、折り曲げたらしい。両端の二カ所に板の皮が巻き付けられており、これで側面を固定したらしい。



第75図 SX3遺構実測図 (S=1/30)



第76図 SX3出土遺物実測図 (S=1/3)

板の皮については第71図2・4・6、第72図1にも認められる。2には切り傷が外周以外にままとって存在する。第73図1～3は円形の水製品で用途は蓋か。2は中央部に穿孔がある。4は容器、5は板材である。6は両端を尖らせた棒。第74図1～3は弥生式土器で、中期後葉の2世紀ころのもの。

第72図6は燧石である。28.2g。長さ2.9cm、幅2.6cm、厚さ2.2cm。図の左面右下に自然面を残し、六面体に打ち欠けている。白色部と褐色部がまだらなチャートのような石材で、大分県杵築市山香の六太郎産と思われる。

### SX3 (第75図)

1区東端で調査区幅一杯に幅1.70cmにわたり検出した円礫の石列である。南西部では「く」の字状に石列が分岐している。湧水のためにはっきりしないが地山面の上に乗っている状態のようであった。石積みというには高さが無く、ほとんどの部分は一段である。石のなかには石臼のかけらもあったが、再利用であろう。土師器類が石列の前面、東側から出土した。石を撤去した下から石列と同一方向でほぼ同じ位置に溝状遺構を検出した。遺物は出土しなかった。東側で礫の詰まった柱穴一個を検出した。この直上で遺物第76図9が出土しており、9は穴の中にあっただ。

### 出土遺物 (第76図1～12・第77図1)

1～4は土師器小皿。1は底部に比して薄く短い口縁部が直線的に外反するもの。2はやや薄手の体部が内湾気味に立つ。3は体部と底部との境が厚く、口縁部上端は尖る。4・6は体部上位で内側に屈折する。口径は4と6が10.2cm。5・7の体部は丸く立ち上がるが、5は糸切り底で口径9.6cm。1～4・7には板状圧痕がある。8は口径15.3cm。9は7に類似する。10は泉徳鎮窯の青花碗。口縁部は外側に草花紋がある。11は同安窯の青磁皿。全面に施釉している。12は白磁碗。見込みは蛇の目軸刺ぎ、高台周辺は無軸で高台径は6.9cm。11世紀から12世紀のものか。第77図1は石臼。

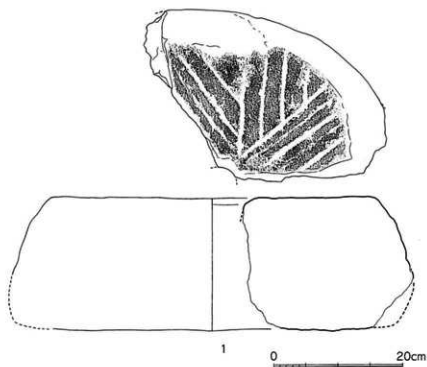
### SK13 (第78図)

H10区・H11区にあり、SD27と重複する浅い土坑である。

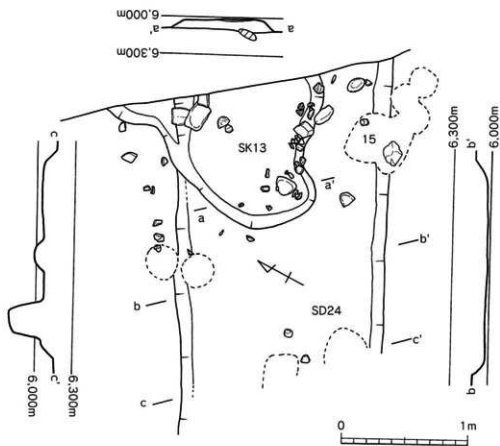
### 出土遺物 (第79図1～16)

1～3・11は土師器小皿。2は反転復元しているため底部がくびれているように見えるが、糸切りの糸が絡んだ片側だけの状態である。4～9は土師器皿。4・5はやや厚手で体部上位で屈折する。6～9は4・5よりも薄手で体部中位が窪むように横方向にならされている。4～6の外底面には糸切り離し後に板状の圧痕がつく。10は内面に段状のなで痕跡をもつ土師器耳皿である。12は瓦質土器鍋。口縁部が厚く表面は横方向のなで調整である。13は土壘。14は瓦質土器の火鉢。体部には蓮弁状凹凸がある。菊花紋の刻印が二箇所ある。15は平瓦の上半部分で、窪んだ面の端部を削って薄くしている。16は鬼瓦。目の部分らしい。

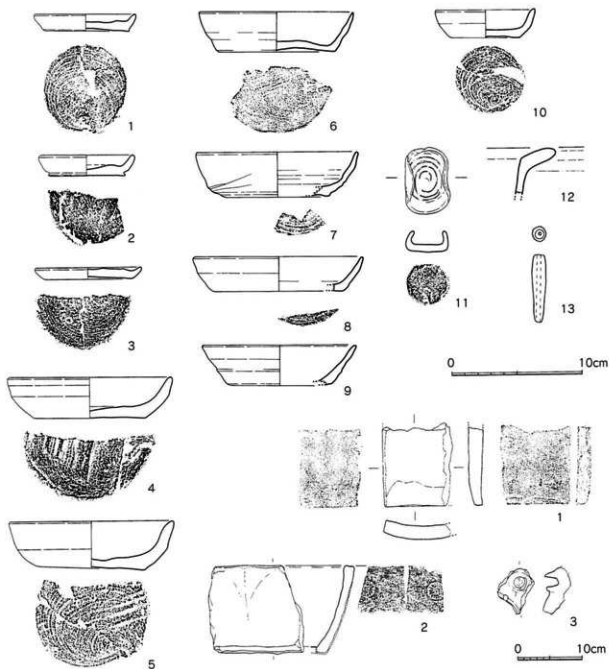




第77図 SX3出土石臼実測図 (S=1/6)



第78図 SK13・SD24遺構実測図 (S=1/30)



第79図 SK13出土遺物実測図 (S=1/3 瓦S=1/6)

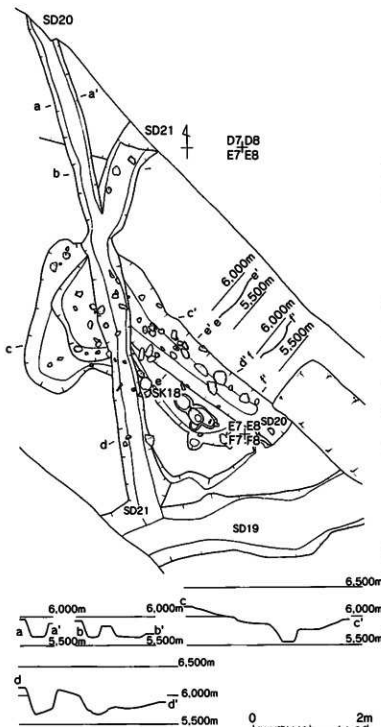
SD20・SD21・SK17・SK18等のE7区付近の遺構については、すでに述べたが遺構の重複関係の認定・遺構毎の遺物の採上げに一部混乱があった。確実にどの遺構に属すか分かるのは第81図に示した遺物だけである。

## SD20 (第80図)

7D区から7F区に続く直線的な溝状遺構である。南端で溝状遺構SD19とぶつかる。SD19上部の焼土層がSD20には見られないので、SD19のほうが新しい。

## 出土遺物 (第82図1~8・10)

1は瓦器碗で口径18.6cm。2は在地系土師器で体部が直線的に外反し、口径14.3cm。胎土に金色の雲母を含む。4は瓦質土器の鉢である。4は白磁碗。5は中国製天目碗。6は同安窯系青磁。



第80図 SD20・SD21・SK16・SK18遺構実測図 (S=1/60)

いる。SK16を掘り下げ終えて検出したので、SK16の床よりも下から出土した遺物だけをSK18とした。

#### 出土遺物 (第83図15・22~29)

15は中国製白磁碗で、22は底部に糸切り雫があるかどうか不明の土師器皿。体部は内湾気味に広がり、端部で外湾する。口径13,8cm、底径6,9cm、器高3,5cm。23は糸切り底土師器。胎土に石英を含む。15・24は玉縁口縁部の白磁碗。25はその底部である。の内面には段状の削りがあり、内面全体に施軸、外面には軸がない。5の期の底部である。26は瓦質土器の鍋で、口縁部内外面は横方向のなで調整。体部内面は刷毛目調整、外面は赤変して剥落している。

7は中国製白磁碗で、施軸は見込み部だけに認められる。8は巴紋と珠紋からなる中世の軒丸瓦。巴紋は中心に向かって左回転する。9は格子目叩きの古代の軒平瓦。10は木製品で、板材を円盤状に加工したもので、中心に穿孔がある。外径6,8cm、中心孔の径1,0cm、厚さ0,9cmである。

#### SK16 (第80図)

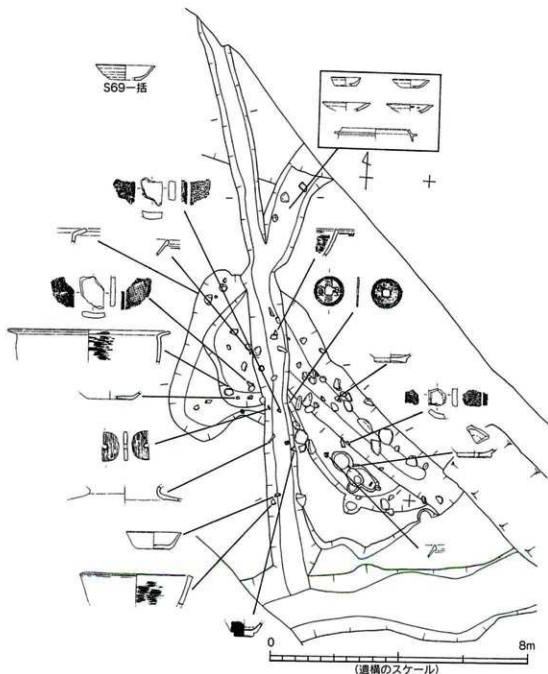
SD20と重複した状態で検出した。掘り下げの進行に伴い床面の一部が深くなったので、SK18として区別した。したがって、遺構からはSK16とSK18の新旧関係は不明である。SK16の規模は長さ4,6m、幅約2,5mである。

#### 出土遺物 (第83図16~21)

16・17は土師器皿。18は瓦器椀。器面調整は内外面ともなでの後、横方向のへら磨き。19・20は瓦質土器で、それぞれ異なる型の鍋である。21は白磁碗で、11世紀後半から12世紀前半のものである。

#### SK18 (第80図)

7E区にあり、SD20・SK16と重複して

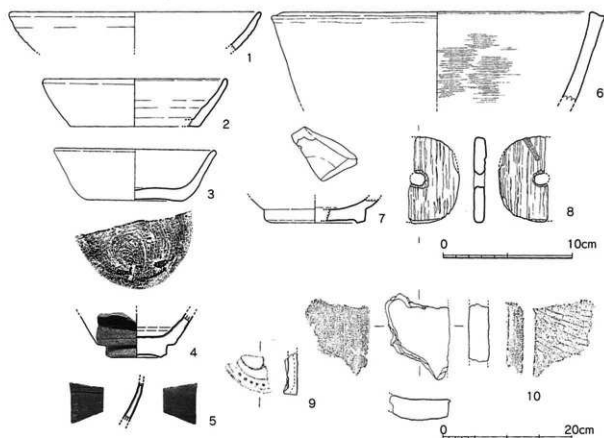


第81図 SD20・SD21・SK16・SK18遺物分布図

口径34.4cm。胎土に石英を含む。27・28は格子目叩きの古代の平瓦。29は中国銭の治平元宝（北宋：初鑄年1064年）。

#### SD21 (第80図)

大部分はD7区・E7区に位置し、一部E8区にかかる「く」の字に屈折した溝状遺構である。この付近の遺構（SD20・SD21・SK16・SK18）はSD19・SD23の溝状遺構を掘り下げた後に検出した。平面的に遺構の前後関係を把握できないまま掘り下げた結果、当初SK67と考えていた部分の一部床面に別の土坑を発見したり（SK18）、SD20は屈曲すると考えていたのに一直線だったりして、遺物の前後関係と遺構別の採上げがうまくいかなかった。SD21とした遺物の時期は二つあり、採り上げ時の混乱を反映しているらしい。別の溝状遺構2基とすべきかもしれない。SD20の下にSD9が現れた。



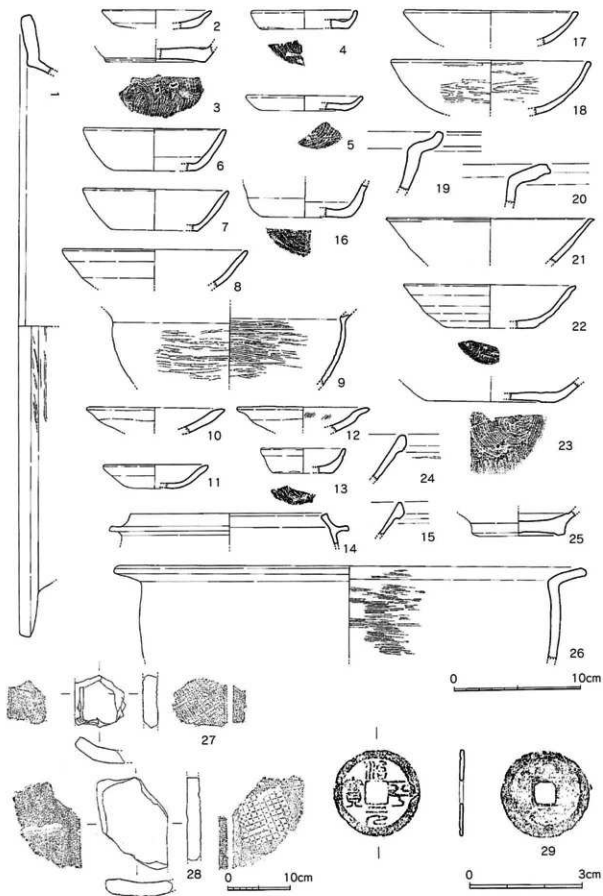
第82図 SD20・SK18出土遺物実測図 (S=1/3 瓦S=1/6)

## 出土遺物 (第83図1~14)

2~8・10~13は土師器皿。3は底部が厚く、体部との境が明瞭である。4は底部が厚く、短い体部が内湾している。口径8,6cm。5は底部から体部に掛けて緩やかに移行し、口径9,4cm。胎土に金色の雲母を多量含む。6は体部が底部から円味をもって外湾気味に立つ。胎土に金色の雲母を多量含む。7は直線的に外反する体部の中位が厚く、口径11,6cm。胎土に金色の雲母を多量含む。8は胎土に金色の雲母を含み口径14,7cm。10~12は手捏ねの京都系土師器である。12は口径10,6cm。13は底部が厚く、体部は先端にむかつて細くなる。胎土に石英を含む。口径6,9cm。1・9・14は瓦質土器の鍋である。1は体部と口縁部の角度が120度以上あり、外面は斜め方向のへら磨き、他はなで調整している。口径49,2cm。12世紀に属するものである。9は外面頸部と内面屈折部の上をなで調整し、その他を横方向にへら磨きしている。胴部最大径は18,6cm。14は外面頸部と内面の屈折部より上をなで調整、他を横方向のへら磨きしている。外面には煤が付着する。口縁部最大径は15,7cm、胴径は19,0cm。10~13はSD20との重複部の東側、東北部の壁際部分の溝から出土した。

## SD24 (第78図)

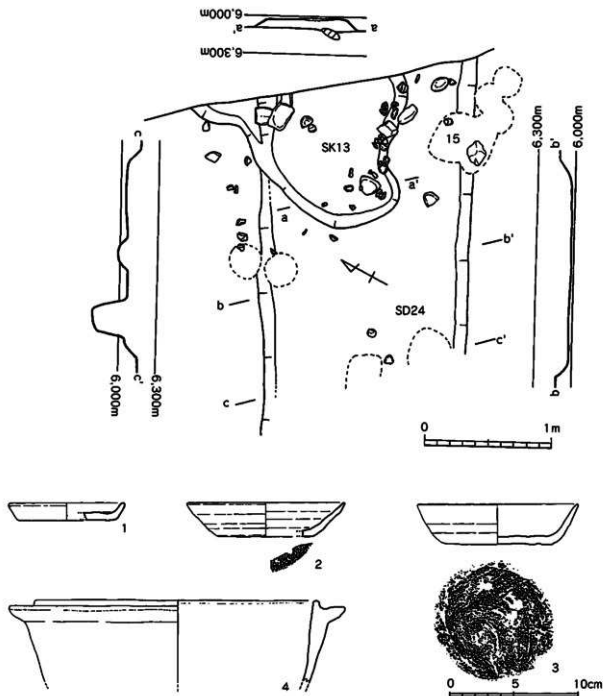
1区の東部、H11区に位置し、南北方向に走る溝状遺構である。検出した標高は6,23m~5,89mである。上面幅65cm、深さは24cm程度あり全長142cmを検出したが、北部は土坑SK13が重複しており消滅している。時期の分かる遺物は13世紀である。



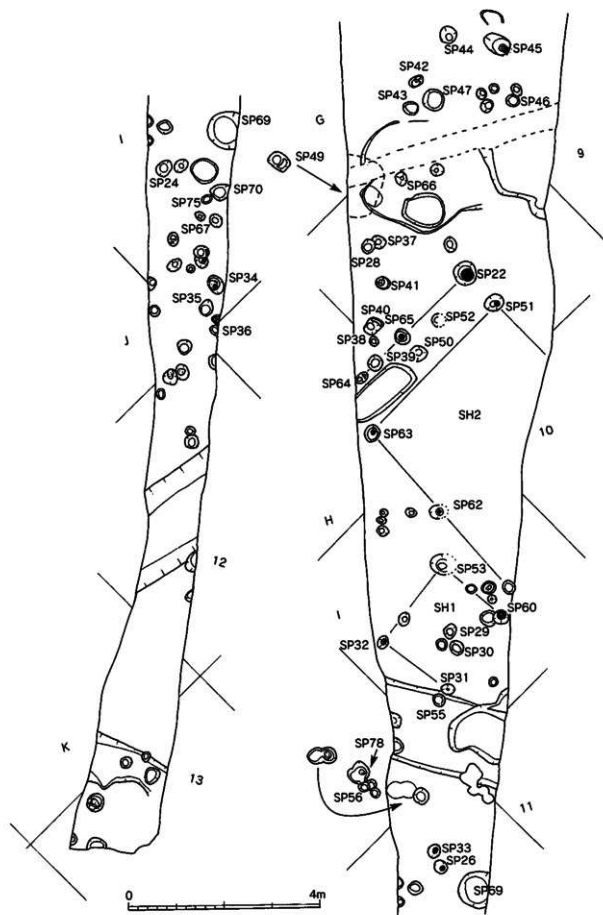
第83圖 SD20・SD21・SK16・SK18出土遺物実測図 (S=1/3 瓦S=1/6 銭S=1/1)

## 出土遺物（第84図1～4）

1～3は土師器である。1は底部が厚く、短い体部が直線的に開く。口径9.0cm、提携7.7cm。  
 2は口径12.4cm、底径7.8cmで、体部が大きく外湾し、体部の中位が内側に窪む。3は外底部に板状圧痕をもつ。4は瓦質土器の鍋で、口縁上部に鈎状の突帯を廻らす。これらは13世紀に属す。



第84図 SD24の位置と出土遺物実測図 (S=1/3)



第85図 1区独立柱建物跡・柱穴群位圖



## 7. 1区の独立柱建物跡

1区中央部から少し東、SD23から東側には多数の柱穴が存在した。調査中、排水ポンプが不可欠だったように水気の多い場所であることを反映し、木の柱基部を残す柱穴が少なからずあった。調査区の幅が狭かったため、調査中には独立柱建物跡を復元できなかったが、整理段階で2基を想定することができた（SH1・SH2）。柱穴（一部土坑を含む）の断面図を第90図に掲載する。

## SH1（第85図・第86図）

H10区に位置する独立柱建物跡で、長軸はやや南に傾いている。4個の柱穴がある。3個に柱が残っていた。すべて円柱である。柱の間隔はSP60とSP53が2,20m、SP53とSP68が2,63m、SP63と東側の柱穴が2,23mである。

## SH2（第88図）

G9区・H9区・G10区・H10区に位置するほぼ東西方向に長軸をもつ独立柱建物跡である。判明した範囲では4個の柱穴からなり、3個に柱が残っていた。どれも円柱である。外側にはこの建物の短辺に平行に並ぶ柱列が認められる。柱の間隔はSP60とSP53が2,20m、SP53とSP32が2,63m、SP32と東側の柱穴が2,23mである。

## 柱（第87図1・2・第89図）

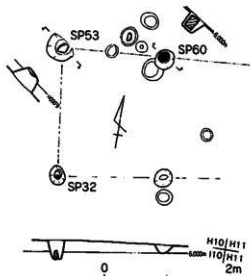
1は基部を水平に鋸引きし、断面形は歪な木の状態をそのまま利用している。直径は2は鉤状のもので下部を整形しただけで、側面は木をそのまま使っているようである。直径10,4cm～11,4cm、長さ22,0cmである。第89図はSP68の柱である。皮がないだけの円柱で、下部はおそらく鋸で切断整形している。直径10,8cm～12,2cm、長さ21,8cmである。

## 8. 1区包含層の遺物

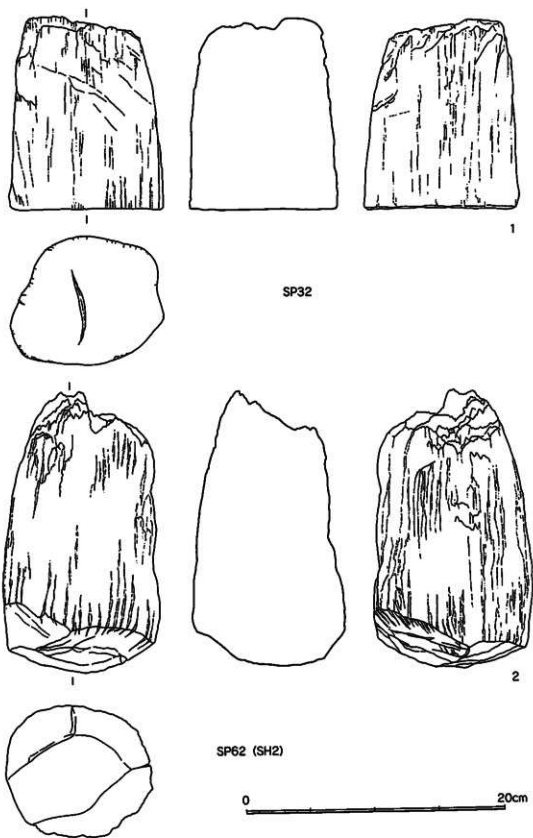
遺構外の包含層から出土した遺物をここで説明する。

第91図1～28は京部系土師器皿で、器壁が厚い1～6、9・11・14等は埴地編年の第3期に該当し、器壁が薄い8・24・26等は2期に比定される。口径は9cm～10cm、10cm～11cm、12、13cmが主体で、少量15cm以上がある。

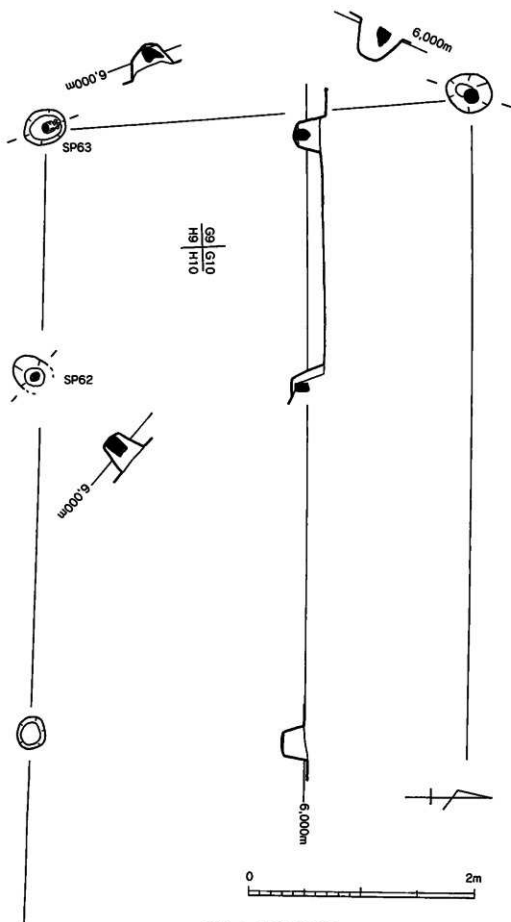
第92図1～25は在地系土師器皿で、すべて糸切り産しの痕跡を残す。3・20・23・25



第86図 SH1遺構実測図 (S=1/30)



第87図 1区柱穴出土の木柱 (S=1/3)



第88図 SH2遺構実測図

の外底面には板状圧痕がつく。1・2は底面から体部への移行に丸みを帯び、4は長めの体部が内湾気味に立つ。14世紀初頭前後に比定する。3・5・6・8は体部断面が三角形をなす短いもの。底部の厚さと体部の厚さに差が無く、14世紀前葉から中葉に比定する。7・9・12・15は短い体部が外湾するもの、10・12は直線的に外反するものでどちらも14世紀前葉に比定する。21・24は板状圧痕をもつ。25は灰白色を呈する薄手の皿で、底部外面に板状圧痕がつく。大内系土師器の搬入品である。16世紀前葉に比定する。16・17は直線的に体部が外反し、内面に段状のなで調整を残す。

第93図1～11は在地系土師器で、2の底部には板状圧痕がつく。これらは14世紀から15世紀前葉に比定されるものである。12・14～21は中国景德鎮窯系内花碗である。13は中国漳州窯系青花皿で、内外面の上下に直線を入れ、中間に唐草紋がみられる。19は16世紀後半の盤頭心型の碗である。22・23は荇苳底型の中国漳州窯系青花皿である。

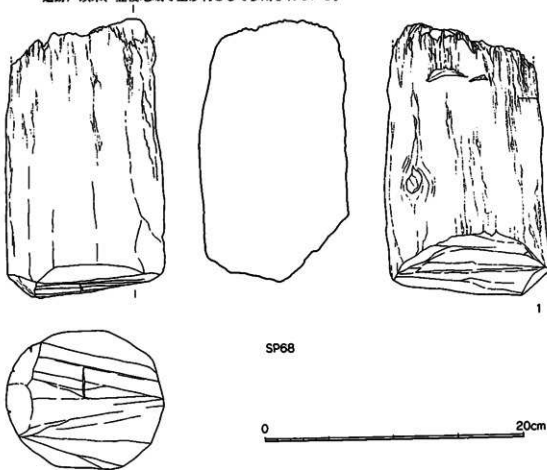
第94図9は中国漳州窯系青花皿で内面に直線紋、外面に直線紋の上に列点紋を描く。

#### 第97図1～18

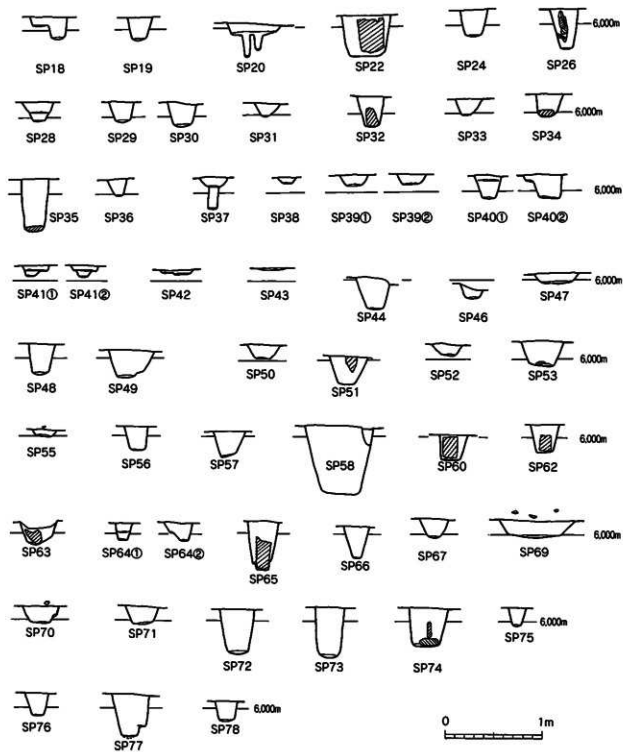
11～16は備前焼で、11は14世紀後半、12は13は厚く折り返した口縁部外面に3、4条の凹線をいれたもので、1570年代以降とされるもの。14は14世紀後半。15は16世紀後半。

玉砂利

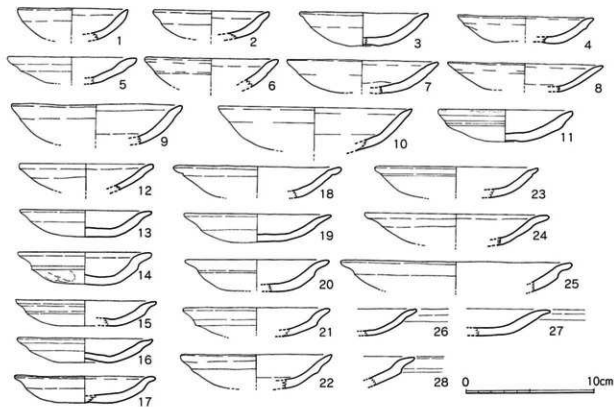
その他、遺構や包含層から玉砂利が少なからず出土した（巻末写真）。石材は佐賀県半島先端部の海岸線で採集できる蛇紋岩及び佐賀県周辺で採集できる石英である。この両者は古代（竜王畑遺跡）以来、豊後地域で玉砂利として多用されている。



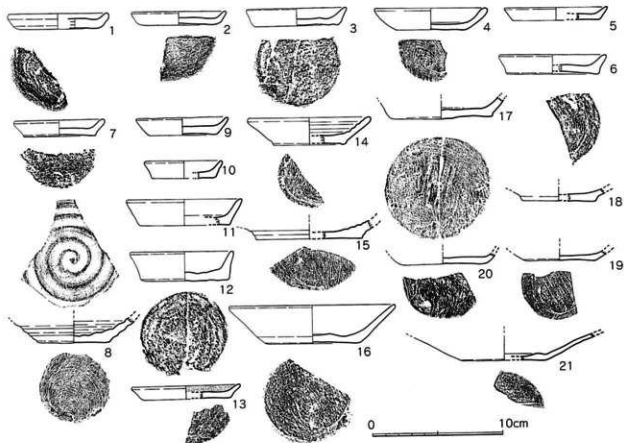
第89図 1区柱穴出土の木柱 (S=1/3)



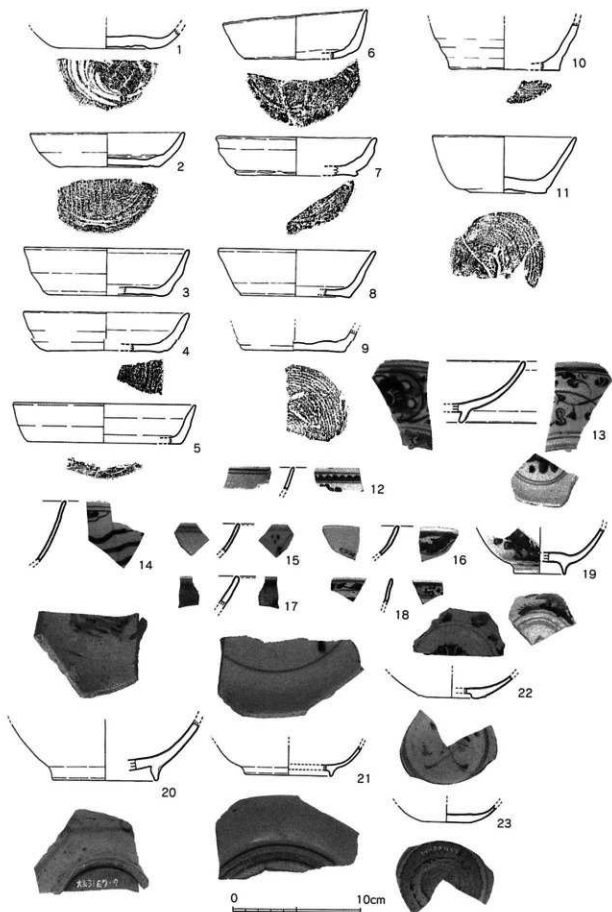
第90图 1区柱穴断面実測图集成 (S=1/40)



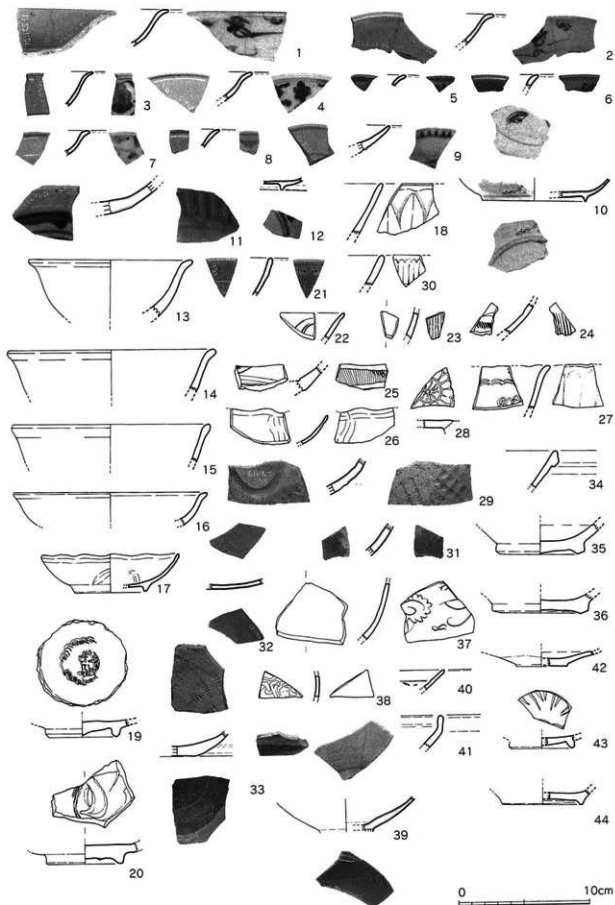
第91図 1区包含層出土遺物実測図 (S=1/3)



第92図 1区包含層出土遺物実測図 (S=1/3)

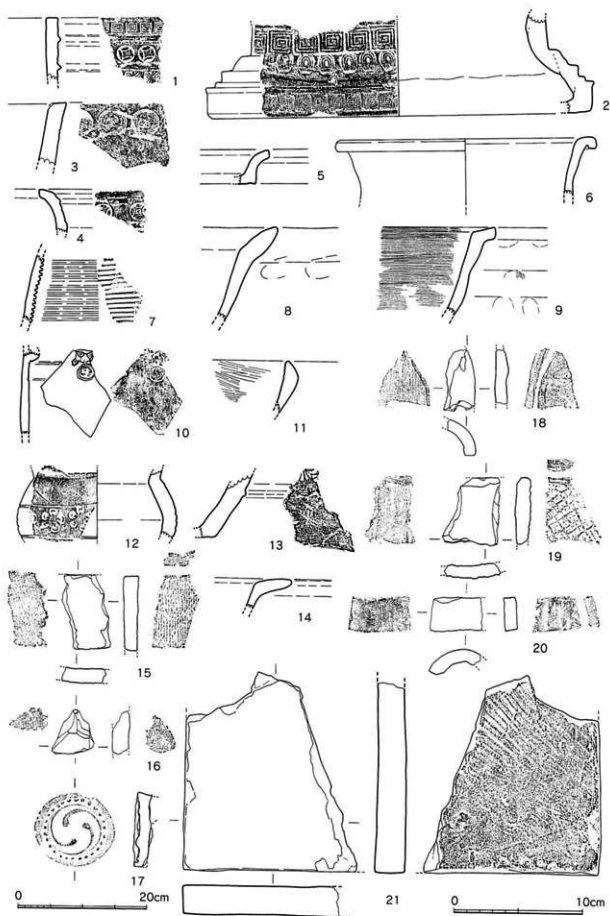


第93図 1区包含層出土遺物実測図 (S=1/3)

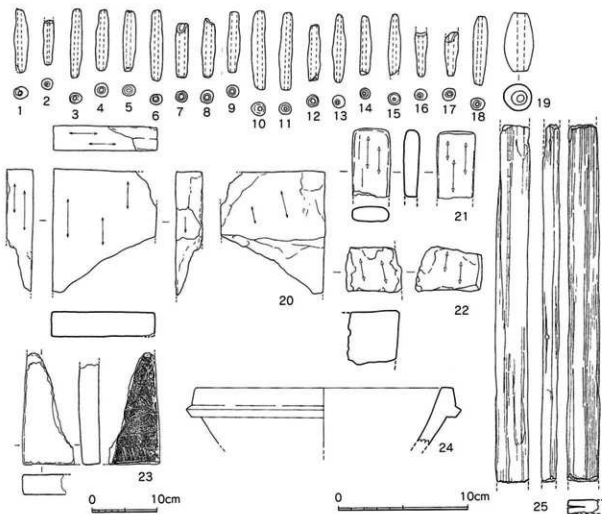


第94図 1区包含層出土遺物実測図 (S=1/3)





第95図 1区包含層出土遺物実測図 (S=1/3 瓦S=1/6)



第96図 1区包含層出土遺物実測図 (S=1/3 瓦S=1/6)

## 9. 1区その他の遺構

時期の明らかな遺物が出土せず、所属時期の不明確な遺構をここで扱う。

## SK20 (第98図)

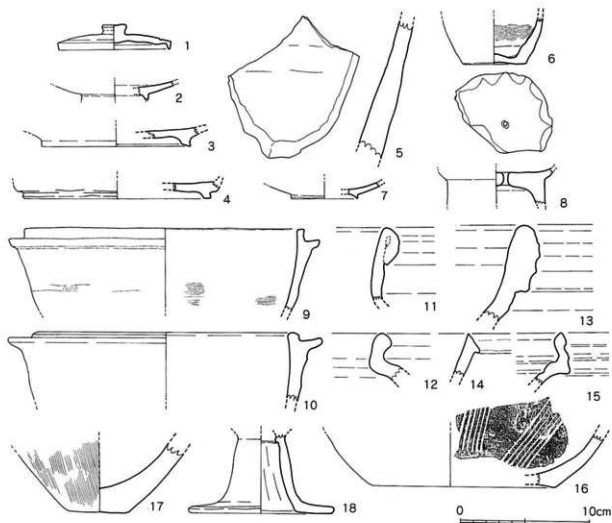
C6区に位置し、半分くらいは調査区外に出ていると思われる平面方形の土坑である。SD10の溝本体部分とは重複関係にないが、溝上部の広がった部分の掘り上げ終了後に確認したので、それよりも古い遺構だと考えられるが、遺物がほとんど全くなき、時期は分からない。1区東北壁のこの部分の層序図を再掲する。埋土は細かな砂層を主体としていた。

## SK15 (第99図)

D5区にある。検出面の標高は6.25mで、SD11南部と同じ面で検出した幅86cmの土坑である。長楕円形の平面形をし、長軸は南北方向にあり、床面は平坦で深さは約40cmある。SD11と同じ面で検出したことから、16世紀代の遺構だと考える。

## SD22 (第100図)

F8区に位置し、南側は調査区外に延び、北側はSD20と重複している幅60cm、深さ22cmの溝状遺構である。SD20との重複部分にSD22を確認できていないが、この付近に16世紀末以降の同様の溝状遺構が多いことから、SD22も同様のものである可能性がある。



第97図 1区包含層出土遺物実測図 (S=1/3)

## SK21 (第101図)

大部分はH9区に、一部分がG区にあり、現状で長さ1.6m、幅0.7m、深さ20cmの楕円形の土坑である。検出標高は6,197mで、周辺の柱穴類と変わらない。長軸は南北方向である。

## 出土遺物 (第102図6)

中国製白磁壺で、頭上部が外側に屈曲した後、短い口縁部が上方に屈折する。乳白色の厚めの釉が内外面全体にかかる。口縁部最大径は8.7cm。

## SP25 (SD11のうち、SE1よりも北側部分)

SE1がSD11の屈折部分に重なっていたので、南北方向の溝と東西方向の溝の時間的關係が不明である。床面の高さは同じなのでおそらく同一の遺構と思われるが、南北方向の溝が屈折部から飛び出ているのが疑問である。当初この突出部を区別するため別番号を付けたので、ここで遺物を報告する。

## 出土遺物 (第102図1・7)

2は埴瓦で、3片が接合した(SP25+SE1+SD11南部)。胎土に石英を含む。コピキ痕を板状具でなで消した部分がある。7は朝鮮通宝で、メッキされてるのか表面が金色に輝く。

## SP26 (第90図)

111区にある柱穴である。

## 出土遺物 (第102図1)

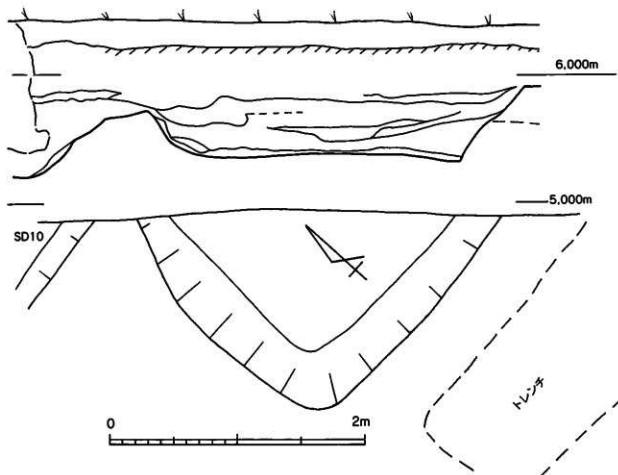
埴瓦である。裏面はコビキ痕を部分的に板状具でなで消す。胎土に石英を含む。

## SP51 (第90図)

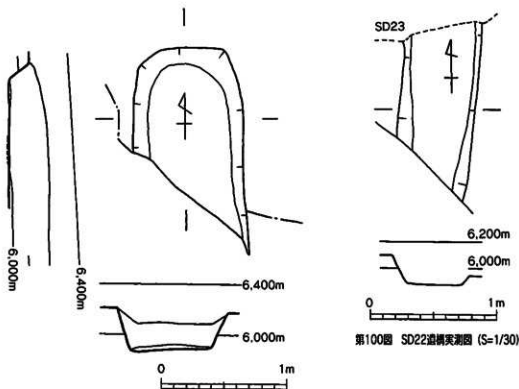
G9区にある柱穴である。検出標高は6,046m。

## 出土遺物 (第102図4)

中国製白磁皿で、口縁端部は釉剥ぎし茶色の上葉を掛けている。



第98図 SK20遺構実測図 (S=1/30)



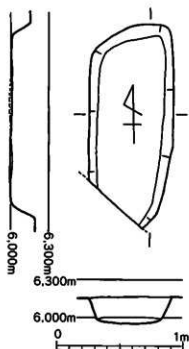
第99図 SK15遺構実測図 (S=1/30)

## 10. 2区の調査

## 最上層の攪乱・遺構

## (1) 分布状態

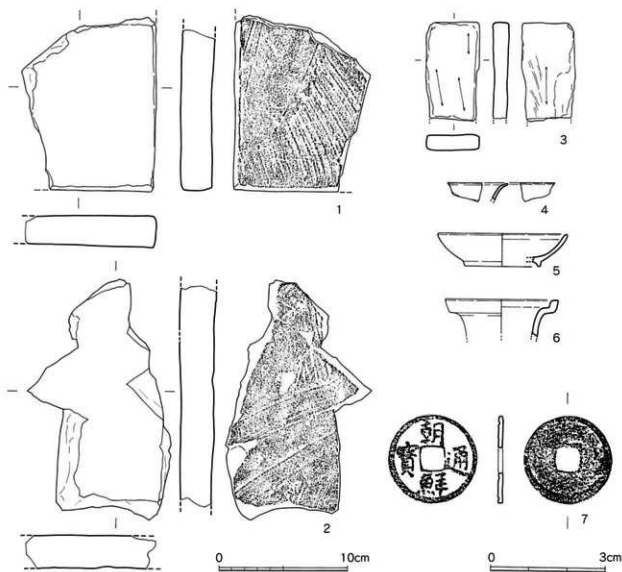
試掘時のトレンチがL14区からM14区に一方所ある他、M14区、N14区に攪乱の穴がある。L13区には南西から北東に向かって土管が埋設されていた。この土管は大正9年に鉄道が開設された際、南西側の水田から線路敷きを潜って配水するために埋設したものである。土管は接合部がやや開くもので、端部には連結のための溝が廻らされている。採り上げたが個別の実測図は作成していない。攪乱層を除去し、初めに検出したのが溝状遺構二条 (SD27・SD28) である。石以外に出土物がないため遺構の時期は不明だが、検出標高が高く、1区の近世の溝状遺構に類似するのでこれも近世の所産としておきたい。

第101図 SK49  
遺構実測図

## 11. 2区上層の遺構と遺物

## (1) 分布状態

掘下げを行い攪乱・トレンチを除去した段階で土坑・柱穴・礎の集中箇所・瓦の集中箇所を検出した。時期を遺物からは1区の上層と比較できない。



第102図 1区時期不詳遺構出土遺物実測図 (S=1/3 銭S=1/1)

## (2) 遺構と遺物

## SX4 (第105図)

2区南東部では瓦を含んだ焼土が縦3m×横1.6mの範囲に平面的に廃棄された状態で出土した。これをSX4とする。分布は調査区外に広がっており、厚いところで標高6.5mから6.2mまでの厚さ30cm堆積していた。2区の東壁でみると水田床土上面付近から掘り込まれている。

## 出土遺物 (第106図1～6・第107図1～6・第108図1～14・第109図1～4・第110図1～3)

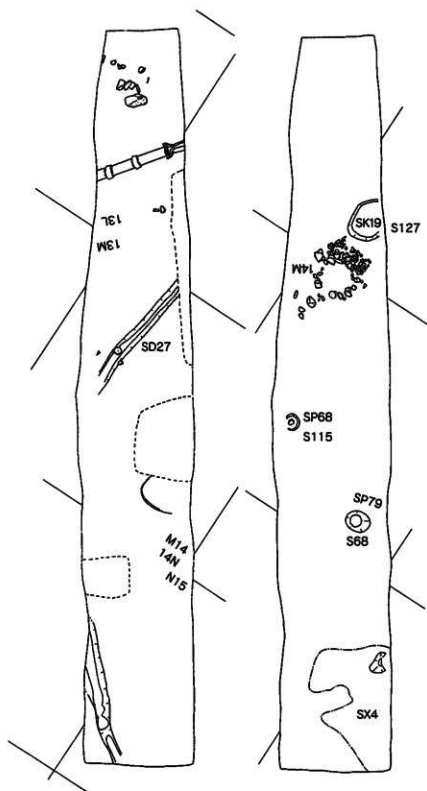
大部分は瓦類である。

壁土

第106図1は在地系土師器皿で、口径7.8cm、底径5.4cm。回転糸切り。2は古代の土師器皿で、高台径8.3cm。器面はなで調整。3は土鏝で、下端一部欠。4～6は壁土。4右面に竹圧痕があり藁縄を斜めに掛けた泥の圧痕がある。反対面は壁表面。厚さ3cm。5は左面が表面で、その直角面および裏面に竹圧痕がある。6の左面が表面。裏側には藁圧痕。

第108図1～12は平瓦。13・14は埴瓦。13は本遺跡で唯一縦横の規模が判明した埴

瓦であり、横27.0cm、縦26.7cmとほぼ正方形である。表面はなで調整しているが、裏面は紐で粘土塊から切り離しており（コビキ痕）、側面は裏面に向かって斜めに削れているので、断面形状は台形気味になる。



第103図 2区遺構全体図

第109図も磚瓦で、2・3の裏面は一部をへらでんで消す。

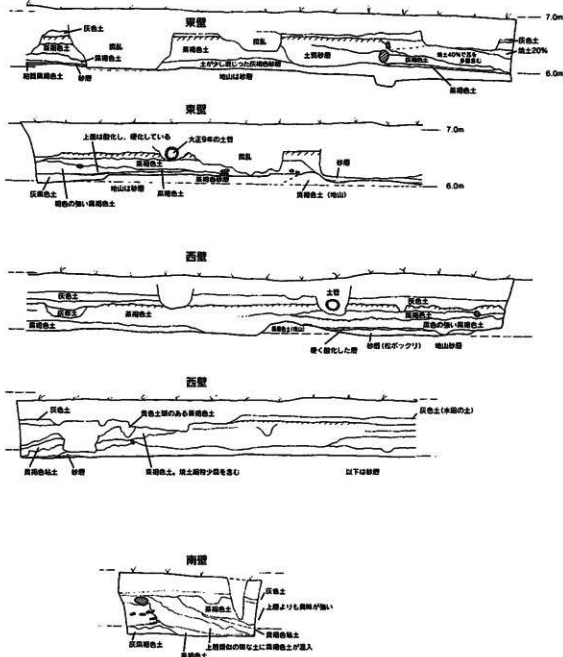
第112図1・2も磚瓦。3は鬼瓦の口の部分である。喉と口の左端、備の左右の一部に表面が残るが、大部分は表面が剥落している。焼成は悪く、黄褐色を呈する。横14.4cm、高さ8.5cm。

### SK19 (第103圖)

2区の北東部に位置し、検出標高は6,186mであり、地山直上に堆積する茶褐色砂層中から掘り込まれている。規模は平面形が88cm×約70cmの楕円形で、深さは最大12cmである。南側に小礫の集中する部分があったが、遺物の混入はみられず、自然にできた風倒木痕の可能性はある。

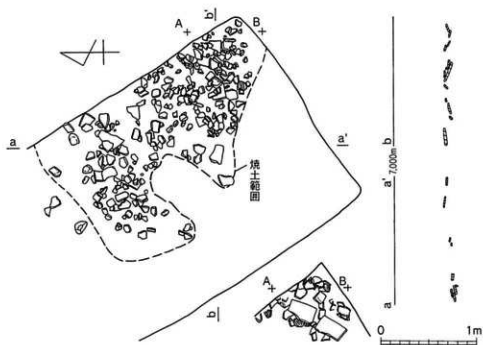
### SP68 (第103圖)

G9区に直径10cmの断面の円い柱痕が残る。検出標高は6,086m。地山直上の黒褐色土中から掘り込まれている。

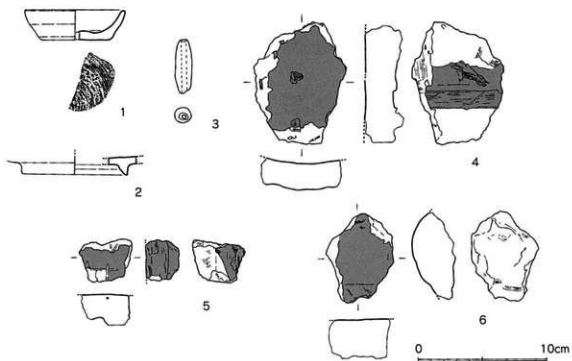


第104図 2区層序実測図

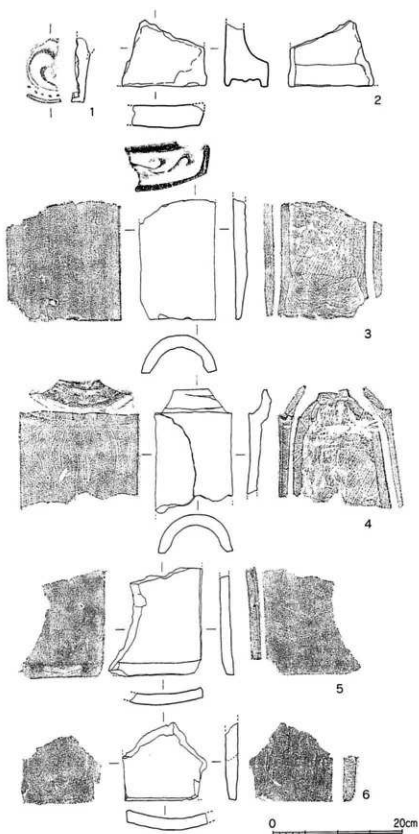




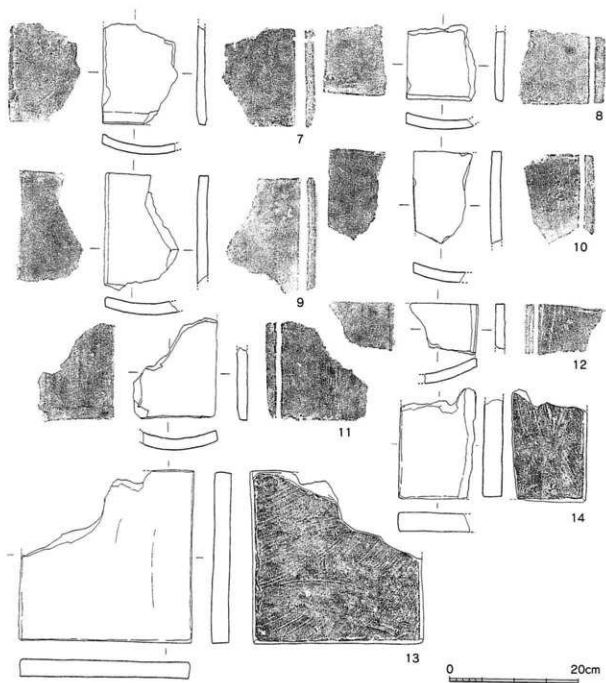
第105図 SX4遺構実測図 (S=1/40)



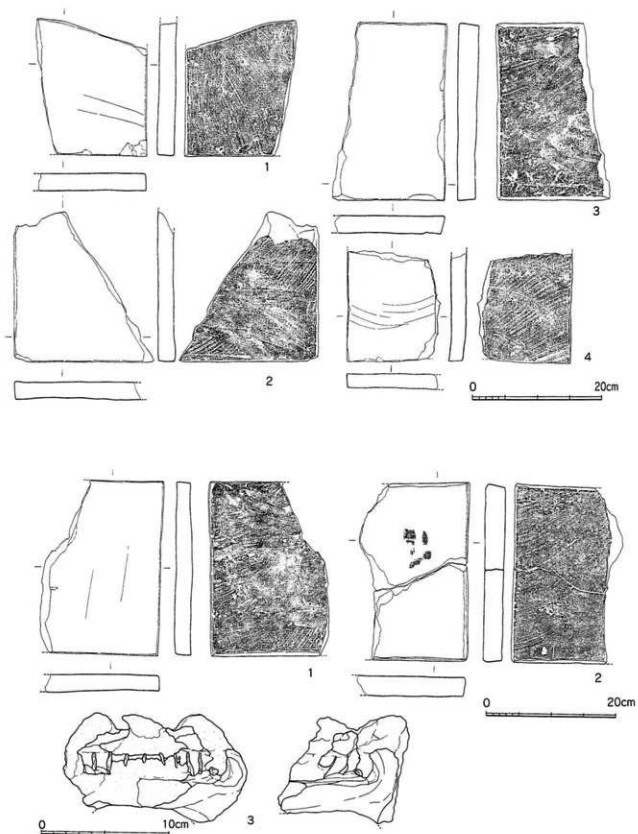
第106図 SX4出土遺物実測図 (S=1/3)



第107図 SX4出土瓦実測図 (S=1/6)



第108図 SX4出土埴瓦・瓦実測図 (S=1/6)



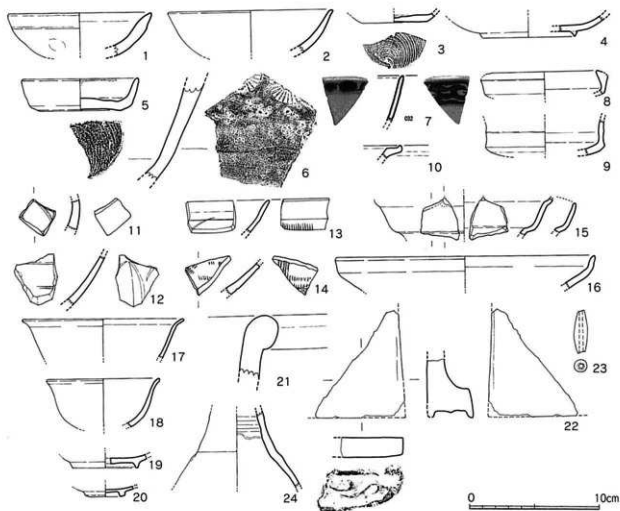
第110図 SX4出土埴瓦・鬼瓦実測図 (S=1/6 鬼瓦S=1/3)

## 12. 2区包含層の遺物

遺構外の包含層から出土した遺物をここで示す。

## 出土遺物 (第111図1~24)

1は京都系土師器皿で口径11.2cm、厚さ0.9cmと厚手。2は土師器皿。金色の雲母を含む。3は大内系土師器皿で灰白色。底径5.0cm。4は瓦器椀で高台径7.1cm。5は在地系土師器皿で口径12.9cm。6は瓦質土器火鉢で灰色を呈す。菊花紋を刻印している。7は中国龍泉窯系青花碗。8・9は青磁香炉。8は暗緑灰色、9は灰緑色を呈する。10は龍泉窯系青磁坏で13世紀中頃から14世紀初頭前後のもの。11は同安窯系青磁で両目施軸、外面に沈線紋。12は龍泉窯青磁碗で銅蓮弁紋を外面にめぐらすもの。13は同安窯系青磁皿で柳描き紋をもち全面に緑灰袖がかかる。14は同安窯系青磁碗で両面に柳描き紋をもち、12世紀前半頃のもの。15は淡褐色を呈する白磁。16は白磁で口径20.0cmとやや大きく、口縁部が内湾している。16世紀?の盤か。17は口径12.5cmの白磁碗。18は白磁碗。内外面に貫入が入る。19は白磁碗。畳付き以外は灰色の軸葉がかかる。20は白磁。底部最大径は3cm、内面に灰緑色の軸葉がかかる。鋭く削りだした高台は12世紀頃の特徴か。21は備前焼甕。22は軒平瓦。唐草紋がある。23は土鐘。24は朝鮮陶器の舟徳利。



第111図 2区包含層出土遺物実測図 (S=1/3)

### 13. 3区の調査

#### (1) 層序

3区も最近の客土によりかさ上げされていた。特に東部では厚さ1,5mほどあり、その下層に旧表土が西部の9mくらいを除いて広がっていた。この層の下には水田床土が分布し、3区中央から東部には水田があったことが分かる。水田の分布する部分では、下層から近世の遺物を含みつつ中世の遺物が出土した。これは水気の多い土層で、湿地に堆積した土層であった。この範囲が古くは池とされていた場所と考えられた。池の床まで遺構検出面は認められなかった。池の西側にあたると考えられる場所では少し標高の低い位置に水田層なのか酸化した赤茶色に変色硬化した層が分布した。

#### (2) 遺構と遺物

##### SD25 (第112図)

3区西部で検出した4,8mほどの溝状遺構である。調査区の幅が狭いのではっきりしないが、東西方向を主軸とするようである。第113図の層序図(最下段)にあるように、SD25は3区の西端では地山に掘り込んだ状態であり、東部では地山の黄褐色土に掘り込んでいる(層序図下から二番目)。北西部の遺構検出面の高さは北西部では標高6,04m、東部で6,05m、床面は北西部で5,95m、中央部で5,9m、東部で5,74mである。時期は出土遺物から15世紀後葉以前である。幅4m程度の溝状遺構のようである。

##### 出土遺物(第112図1~3)

1・2は在地系土師器である。特徴は糸切り底であること、2点の立ち上がり角度が異なること、の特徴から14世紀から16世紀以前としか時期比定できない。3は平瓦で凸面には格子目印きを、凹面には布目痕もつ古代の瓦である。

##### 出土遺物(第114~116図)

3区の近世以降の層から出土した遺物である。

##### 出土遺物(第114図~116図)

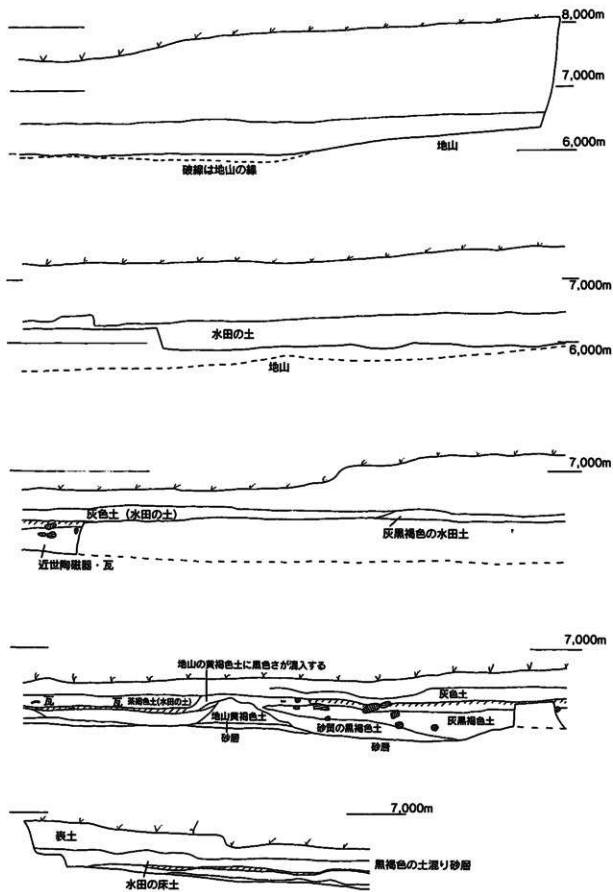
3区の近世以降の層から出土した遺物である。

##### 石列(第114図)

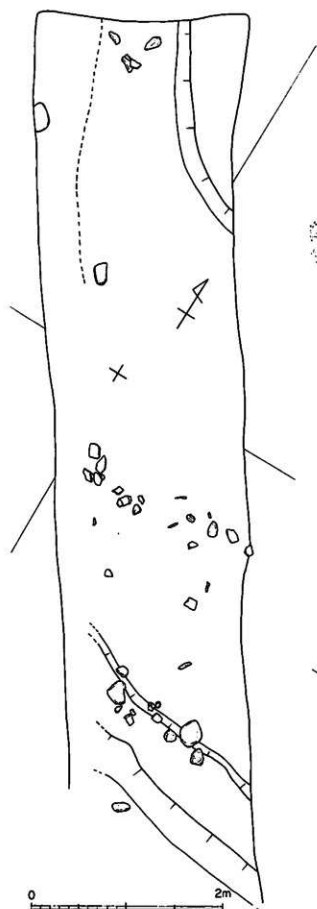
SD25の東側、SD25の東部土手より高い位置で検出した石列である。東西方向に五輪塔部材4個を並べ、端部に直角に立方体の石2個を組み合わせている。東部水田分布域にあり、近世の造成に関わるものであろう。

第115図1~5は在地系土師器で、1は底部が厚く、短い体部が直線的に外反し、15世紀末から16世紀前葉に比定する。2も底部が厚く、同じ頃であろう。3は体部が途中で屈折するもので、14世紀中葉から後葉に比定する。4は体部下端で屈折し、口縁端部が尖りつつ外反し、14世紀中葉から後葉に比定する。5は口縁と底部の径の差が少なく、体部端部が外湾するもので内面に刷毛目がある。16世紀前半に比定する。6は中国製青磁瓶。全体に施軸している。7は中国製褐釉陶器の壺である。8は中国製白磁碗。見込みに蛇の目状輪割ぎがあり、中心部は施軸している。9は中国龍泉窯系青磁碗である。内面に片切り彫りの紋様がある。10は白磁で外面は体部上部だけ施軸、内面に一条沈線がある。11は瓦質土器の鉢で、口縁端部が少し厚い段状をなす。内面の器面調整は刷毛目である。12は瓦質土器で、内面は刷毛目状の調整、外面には型押しのススキのような紋様をもつ。13~15は軒丸瓦で、珠紋・巴紋をもつが、巴紋の方向は13だけが逆である。16~18は丸瓦。19は軒平瓦で、本調査区出土の他の瓦とは異なる。石莖を多く含む。20は鬼瓦の一部と思われるが不詳で、眉毛の可能性がある。

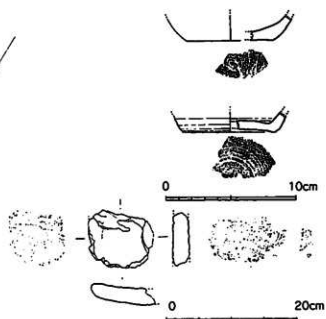
第116図1~8は丸瓦、9・10は軒平瓦である。9は軒平部分の厚さが10に比べて薄い。紋様は同じようであり、個体差であろう。これらの軒平瓦は、紋様部と直角をなす下側を向く面は横方向のなで調整、平瓦につづく屈曲部は強く縦方向になでている。



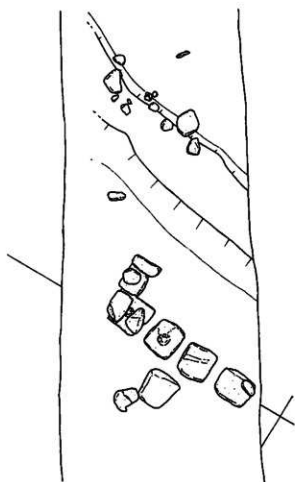
第112図 3区東北盤突測図



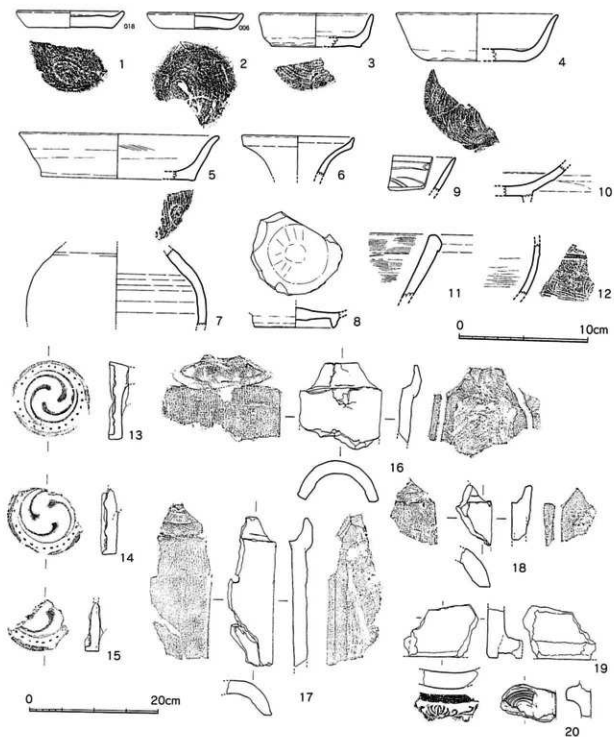
第113図 SD25遺構実測図



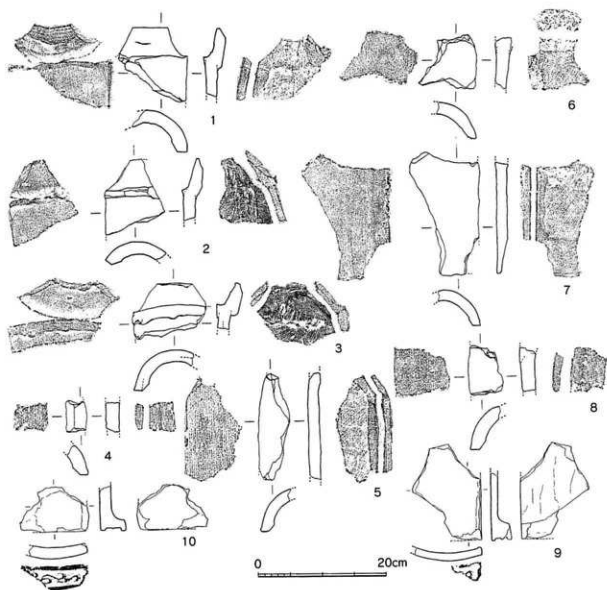
第114図 SD25出土遺物実測図







第115図 3区出土遺物実測図 (S=1/3 五S=1/6)



第116図 3区出土遺物実測図 (S=1/6)

## 第3章 中世大友府内町跡第31次調査区出土の動物遺体

西本 豊 弘

中世大友府内町跡31次調査区からマグロ・イス・シカ・ウマなどの動物骨が少量発掘された。その内容は以下の表に示したとおりである。それらについて簡単に説明する。

表 動物遺体一覧表

No	動物名	部位	出土遺跡	時期	備考
1	マグロ類	下半部	SD9	14世紀	
2	シカ	左側肩甲骨	SD19	16世紀後葉	イスがかじった跡
3	イノシシ	左側大腿骨	SD23	16世紀前葉	
4	イス	右側寛骨	SD9	14世紀	解体痕
5	ウマ	中手骨	SD9副下層	14世紀	

### 1. マグロ類

大きなマグロの椎骨が15点出土している。すべてが同一個体かどうか分らないが、それらが連結して一括して出土している部分があること、中央部から尾椎まであり、大ききの矛盾がないので、同一個体の下半部が一括して捨てられていたのであろう。おそらく、長さ40cm前後の切り身にして選ばれていたものと思われる。椎骨の大きさから見て、体長3メートル近くの大きなクロマグロである。

### 2. シカ

左側肩甲骨の関節部分の破片が1点のみである。成獣個体であり、ニホンジカとしては小柄である。写真に示したように、関節部分にイスがかじったと思われる傷跡が多数見られた。

### 3. イノシシ

左側大腿骨が1点出土している。中間部分と遠位部の二片に分かれているが接合する。成獣個体であり、解体痕は見られなかった。

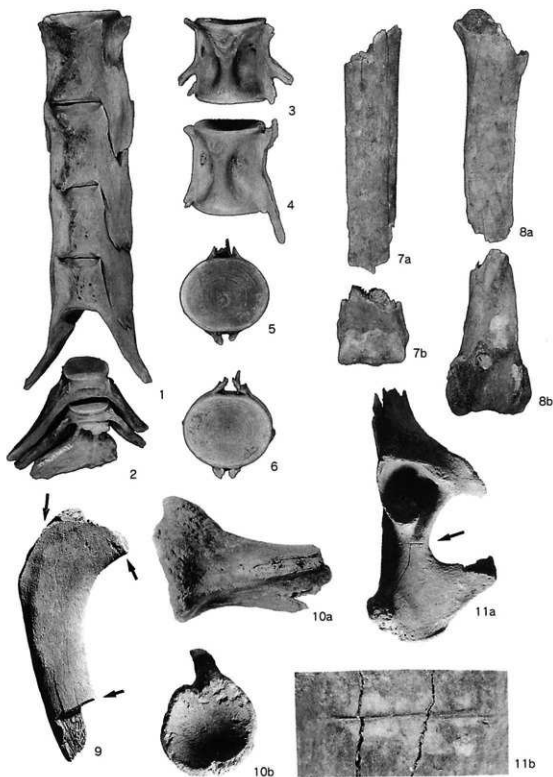
### 4. イス

右側寛骨1点のみ見られた。恥骨と腸骨の一部を欠くが、寛骨臼部分から座骨部分がよく残っている。大ききは現生のスピッツと同じくらいの小型犬であろう。Y字状軟骨が骨化していることから成獣である。寛骨臼のすぐ上と下の部分に切痕と思われる傷がある。寛骨臼の下の切り傷を拡大した写真で示したが、おそらく解体痕であろう。

### 5. ウマ

中手骨の破片が2点見られた。それらは中間部と遠位部であり、接合すると思われる。左右は不明である。破片の大きさからみると小型のウマである。この他にウマと思われる肋骨が1点採集されていた。この肋骨には三ヶ所に鋭利な切断痕が見られた。

以上、動物骨の内容を紹介したが、大きなクロマグロと野生動物のシカ・イノシシがあり、さらに家畜のイスとウマがあるなど、内容は多様であった。また、解体痕やイスの噛み痕などが明瞭に残っており、中世中頃の食料を推測するよい材料と言える。



## 写真図版

1～6. マグロ椎骨 7. ウマ中手骨 8. イノシシ左側大腿骨 9. ウマ? 肋骨

10. シカ左側肩甲骨 (イヌの噛み痕あり)

11. イヌ左側寛骨 (bは解体痕の拡大したもの)。矢印は解体痕の位置を示す。縮尺不同。

## 第4章 まとめ

今回の中世大友府内町跡第31次調査区の発掘調査では弥生時代や古代（平安時代）の遺物も出土したが、出土遺物の量的な主体は中世に属するものであった。特に14世紀中頃から16世紀末までの遺構が1区・2区に集中的に分布していることが分かった。事前の確認調査で1区の西側には遺跡が存在しないと把握したわけだが、本調査でも調査区西端部（1区の西端部）に低台地の端を確認し、その外側は居住に不適な湿度の多い沖積層であった。同様に、東端部の3区でも低台地と沖積地との境が現れた。

### 瑞光寺について

31次調査区で最も古い遺構は古代末期のものであるが、量的に主体となる遺構は中世14世紀以降のものである。西部調査区である1区には東西方向に走る溝状遺構（SD9・SD10）、直交する南北方向の溝状遺構（SD11）や1区中央部から東部に柱穴が多い傾向が認められた。調査区の幅が狭かったこともあり、細長い調査区だったため建物の規模を確認することはできなかったが、溝状遺構に平行に建つ2基の獨立柱建物跡を復元することができた。柱痕の残るものもあり、確実に建物がこの付近に建っていたはずである。また、中世大友府内町跡としては比較的多数の瓦が出土した。埴の出土量が顕著である点も東北側に位置した万寿寺と似ており、出土遺物から考えて本調査区（31次調査区）には中世寺院があった可能性がある。

中世寺院

現在、3区とは市道を隔てて北側に小さい池がある。草に埋もれて水面があるのかわからない状態だが、かつてこの付近にあった白蓮池の痕跡である。3区の途中から東・北側に広がる低地部分はかつての白蓮池の一部であろう。ただ、それを埋めていた水分の多い土層からは近世の遺物も混在しており、現在のように池が小さくなったのは比較的新しい時期であろう。

今回の調査区付近の地籍図を現地と照らし合わせたのが、第117図である。西部調査区（1区）を包んで東西方向に細長い一面（幅約40m、長さ約140m）が存在し、北側の宅地や南側の耕作地の区画と同一の方向性をもっている。東部では全長約40mにわたって南部に幅狭くなっている。

瑞光寺

今回調査した中世大友府内町跡第31次調査区付近は中世段階に瑞光寺が存在したと考えられる場所である。瑞光寺について史料では以下のことが判明する。

「豊府聞書」及び「豊府雑誌」の伝えるところによれば、開基は貞治年中（1362～1367）不肖正受禪師（貞治5年没）であって、同禪師は初め府内万寿寺の開山直義（仏印）禪師に学び、のち京都の東福寺に往して学徳世に高かったのを、大友親世が迎えて禅法の師とし、万寿寺の西境に精舎を営んで若干の食邑を寄せ始祖したという。ところが「豊後国志」は、開山は同じ不肖正受禪師としているが、大友氏時（親世の父）の創建としている。また、「豊府紀聞」は妙観寺（東大分牧）、吉祥寺（大分村三吉）の二寺とともに歴応4（1341）年の創建としている（「大分市史」下巻 1956年発行による）。

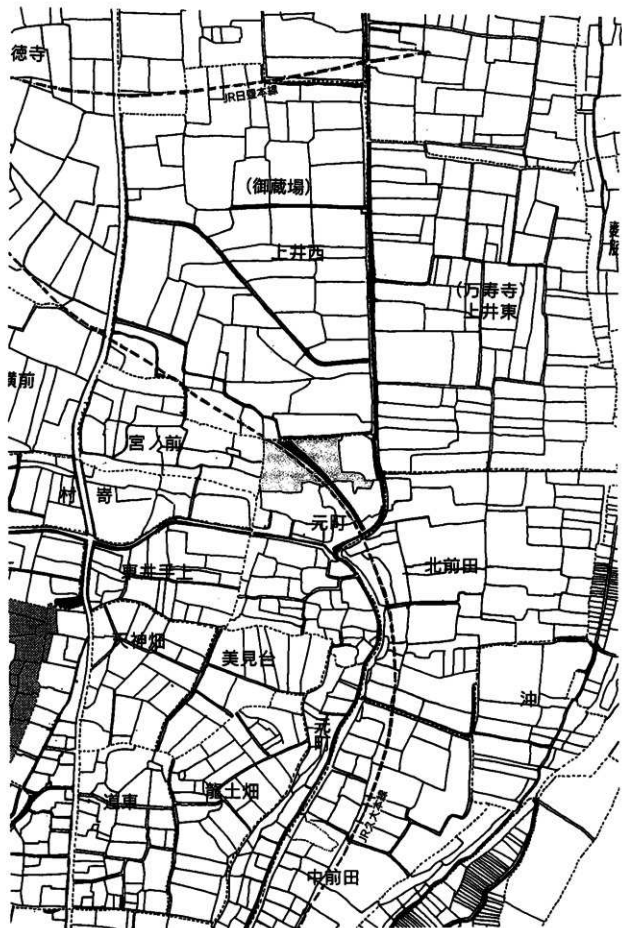
このように創建年代は一致しないが、不肖正受禪師を開山とする点では一致している。

一瀬上人

時宗の一瀬上人は伊予の生まれで、1276年別府の上人ヶ浜から豊後に上陸し、そこに地名を残している。「一瀬上人年譜略」によると上人が豊後に来た頃、瑞光寺に真教上人という人が住んでいて専ら浄土教を説いていた。一瀬の来遊を知ると彼を訪ねた。宗派の異なる二人の問答は七日七夜に及んだ。しかし、ついに真教が「閉口」し、一瀬に帰依した。弟子になった真教は他阿弥陀仏と号したが、これが時宗第二の祖であると記している。真教は嘉禎3（1237）年、京都の生まれで、姓は古河、父は藤原左大臣頼実卿、母は藤原前大納言之原娘と伝える。経歴等についても初め浄土宗鎮西派の奔西に学び、豊後瑞光寺の高僧であったという外ははっきりしない（安田元久編『鎌倉・室町人名事典』1985）。この時、豊後守護の大友頼春も一瀬上人に帰依している。

13世紀後半

以上の諸記録から、13世紀後半に既に瑞光寺が存在したことは確かであろう。同じ場所であったかどうかはともかく。兵庫県尼崎市の長遠寺に現存する雲版に「豊後州瑞光寺□德住山明室置之の陽鑄銘があるが、年代は室町中期以降である。天正14（1586）年の島津軍豊後侵入の際、兵火に罹ったらしいが、「豊府聞書」によれば慶長7（1602）年には旧地に草屋ながら再興された。その後、1671（寛文十一）年朔日触書中に「新報山瑞光寺」という言葉が残されている。



第117図 調査区周辺の地籍図

『雑城雑言志』では、瑞光寺は万寿寺住僧の退体の地となり、境内の弁財天を安置した白蓮池は万寿寺中十景の随一に数えられ、盛夏池中に開く白蓮は府民の眼を喜ばせたという。しかし、今は一堂も留めず僅かに住宅地と国道10号とに挟まれた狭い場所に草むした小池とその一角に立つ大友親世の墓碑（近世建造の五輪塔）が残っているだけである。

文字史料から瑞光寺は13世紀後葉から17世紀まで存続した寺であったことがわかる。江戸初期に中世末の府内を描いた「府内古図」には、万寿寺の西南側に南北道路（第2南北街道と呼ばれるもの）を挟んで南北に四つの寺院（北から瑞光寺、真光寺、比丘尼寺、極楽寺）が並んで描かれている（第3図参照）。瑞光寺は一番北に位置し、西側には「若宮」すなわち若宮八幡が描かれているが、現実には若宮と瑞光寺との間には相当の空間がある。地図が簡略すぎておよその位置関係しか想像できない。本調査区では明確に13世紀に遡る遺構は少ないが、14世紀中頃から後葉になると比較的大規模な溝状遺構が現れており、この時点では瑞光寺がここに存在したと考えられる。地籍図で示されるものが寺域の総てか否かは不明である。3区の途中から始まる白蓮池の一部らしい低地の存在を寺域との関連でどう解釈できるのか、現時点では判断できないが地籍図にみられる東南部の細長い部分は出入口部であろう。

四つの寺院

### 遺物について

主体となる遺構は14世紀代からのものであるが、さらに遡ると思われるものが存在する。後藤一重氏は大分県北東部の国東半島を中心とした地域における平安時代から江戸時代初期までの土器編年を行っている。その中で、煮炊き具である土鍋について分析し、11世紀から16世紀の土鍋を次のように形態分類し、それぞれ時期を細分している。今回調査した31次調査区出土の土鍋の時期を考える上で参考にしたい。

土鍋A：口縁がくの字状に折れ、底部は丸底状を呈する一群。古代の甕の系譜に連なる。時間的変化の傾向としては、①口縁部の短小化、②折れが強くなる、③体部調整がなでから刷毛目へ、④長胴から半球形へ、などである。14世紀中頃前後で消えるという。第31次調査区のSK18例（第83図26）がそれで、口縁部がし字形に強く折れた特徴は12世紀に比定される八坂本庄例と類似する。共伴した遺物は底部から体部へ丸く移行し体部が広がる土師器皿1・2も本調査区の中では古い特徴を示す。中世大友府内城下町跡近くでは、大分市下郡遊跡群31次の遺構SE01に類似がある（坪根1999）。土鍋Aは他にもSD21（第83図1・9）、SD8（第14図1）、1区包含層（第96図9）やSK13（第79図12）等でも出土している。SD21例は口縁部が長く、体部から強く折れ曲がること、共伴したの（第83図14）が土鍋B（口縁部外面に鈎状の突起が付され、基本的に脚をもつ。古代からあり、14世紀中頃から後半に消滅する。①鈎の低平化、②鈎の位置の上昇、③なで調整から刷毛目調整へ、④長胴から半球形へ、などの変化をみせる。）の中でも古い特徴をもつと思われるが、他の遺物に京都系土師器が少なからずあり、古い遺物が混入したのであろうか。1区包含層（第96図9）は口縁部が短く、折れ方が弱く、13世紀か14世紀のものである。SD9（第95図）はさらに新しく14世紀の特徴をもつ。土鍋BはSD21の他、SE1（第32図14）、SD9（第69図17）、SD24（第84図4）で出土した。

土鍋Bで最も古い特徴をもつSD21（第83図14）である。体部が内傾し、長い鈎が低い位置に付く。S101-3は鈎の位置が上昇し、体部は鈎付近から下位が厚くなっている。S101の場合、共伴した土師器皿2は強く外に開く体部をもち、3はやや新しいがこれも12世紀に遡る特徴がある。S40（第60図9）は土鍋Bである。破片は揃っていないが脚の存在は疑わしい。体部下半は叩き調整、鈎は痕跡的に変化し、鈎から下位はやや厚い。

クロマグロ

14世紀代の溝状遺構SD9からは、クロマグロが出土した。尾を含む部分の骨格が連続的に出土しており（すぐ近くにも散乱していたが）、廃棄された時にブツ切り状態だったことを示すものだった。西本豊弘氏によれば、推定長2m以上、200kg以上の個体である。一匹のままでは流通・運搬に不便であるため寸断して持ち込まれたのであろうか、あるいは料理の際に解体したものであろうか。同時、あるいは近い時期に捨てられたと考えられる折敷は白木のもので、火事によって使用不能になったものを使いつけてするように憎しげもなく廃棄したものかもしれない。

1586年に府内の町は島津の侵襲によって焼かれてしまう。瑞光寺も焼かれたようであり、そう

## 青磁器台

であれば、焼土、炭化物、焼けた木材等で上部が埋まった溝状遺構S55があり、この時のものである可能性がある。井戸SE1も同様である。S61からは焼けた漆器椀、五輪塔、石臼等の火事場の後片付け品と共に中国製青磁器台のかげら（第27図20）が出土した。時代的にはこの時点より二、三百年古い年代の製品であり、国内の類例を捜すのが簡単でない製品である。仏前に飾った花瓶の器台、瑞光寺の貴重品であったものであろう（写真は中国の龍泉博物館蔵品。第31次調査区ではこの器台の透かし部分が出土した）。青磁器台の寺院跡出土例としては津久見市門前遺跡がある。15世紀前半を中心とする寺院跡（朝日寺）であるが、無紋の青磁器台が出土している。SE1からは11～12世紀に作られた中国製白磁も出土した。これも貴重品として16世紀後葉まで伝わってきたものであろう。溝状遺構SD9埋土下部の黒色土層からは他の土師器皿類とともに地元製ではない土師器皿が一点出土した（第68図3）。薄手の作りで、器表面は白色系である。口縁部最大径は7.0cm、器高は1.8cm、手づくねで作られており、外底面を底から押し上げられ、内面に向かって突出している。おそらく、京都で作られ大分に持ち込まれた土師器である。府内での出土例は2点あり、現在、府内町跡第30次調査区S109遺構のものが報告済みである。S109は大型の土坑で、中位に一括廃棄された遺物群中に混じっていた。口径7.3cm、器高1.5cmである。この手の遺物は小森俊寛・村上憲章によれば、14世紀中頃に定型化し、15世紀末まで見られる白色系得手のヘソ皿である。外底面の押し上げに爪痕のこるものは15世紀初頭前後（福期新）からみられるというが、今回の第31次例は爪痕らしきものが認められるようだが、確実ではない。

土師器皿・坏類を在地系と京都系に分類したが、在地系の中には胎土に石英を含むものとしてでないものがみられた。生産地の相違を反映していると思うが、準備もないことから指摘するに留める。

## おわりに

近世初頭に描かれた府内古岡の隅に出ている瑞光寺は発掘調査が行われたことがなかったが、今回の中世大友城下町跡第31次調査区で初めて確かに寺院らしきものが存在した事が分かった。埴互・瓦が少なからずみられること、珍しい元青磁器台は仏前に供える花瓶のためと考えられること、比較的大きな溝状遺構が存在し内部に建物が存在したこと、等である。寺院名を特定するような遺物は出土していないものの、史料に出てくる13世紀中頃に創建されたという記録と出土遺物の年代は一致する。トレンチ状の調査区だったため、不明の部分が多かったが、16世紀後葉までは存続し、その後は小規模の溝状遺構が繰り返し作られているので、水田化したようである。



## 引用・参考文献

- 坂本嘉弘 「中世大友城下町跡出土の土師質土器編年」『豊後府内2』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第2集 2005
- 小柳和宏編 「大分の中世城館」第四巻総論編 大分県教育委員会 2004
- 坪根伸也・塩地潤一 「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』大友土器研究会 2000
- 後藤一重 「八坂久保田遺跡・八坂本庄遺跡・八坂中遺跡の出土土器について」『八坂の遺跡』Ⅲ大分県文化財調査報告書第150輯大分県教育委員会 2003
- 鷗柄俊夫 「各地の瓦質土器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世時研究会 真陽社 1995
- 小森俊寛・村上憲章 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996
- 小野正敏 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易当時研究』No.2 日本貿易当時研究会 1982
- 小柳和宏 「津久見門前遺跡」『津久見門前遺跡 瀬戸遺跡 佐伯門前遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第3集 2005
- 伊藤晃・乗岡実・石井啓・重根弘和・上西高登 「中世陶器の物流—備前焼を中心にして—」『日本考古学協会2004年度広島大会研究発表資料集』 2004
- 山本哲也 「大分県における中世前期の煮炊具の様相について」九州古文化研究会第132回例会資料 2004.11.14
- 山本信夫 「陶磁器分類」『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』大宰府市教育委員会 2000

# 觀 察 表

第1表 遺構一覧表①

本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	遺物・特記事項
SK 1	S1	土坑	A3・B3	20世紀	掘乱
SK 2	S2	土坑	C4	20世紀	掘乱・検出標高6, 18m
SK 3	S3	土坑	C4	20世紀	掘乱・検出標高6, 135m
SK 4	S4	土坑	B4	20世紀	掘乱
SK 5	S5	土坑	C4	20世紀	掘乱・検出標高6, 13m
SK 6	S6	土坑	C4・C5	20世紀	掘乱・検出標高6, 175m
SK 7	S7	土坑	C4	20世紀	掘乱・検出標高6, 115m
SP 1	S8	ピット	C5	20世紀	掘乱・検出標高6, 20m
SP 2	S9	ピット	C5	20世紀	掘乱
SP 3	S10	ピット	C5	20世紀	掘乱・ここから北側に配水管が延びる
SP 4	S11	ピット	C5・D5	20世紀	掘乱・検出標高6, 189m
SP 5	S12	ピット	D6	20世紀	掘乱・検出標高6, 219m
SP 6	S13	ピット	D6	20世紀	掘乱・検出標高6, 229m
SP 7	S14	ピット	D6	20世紀	掘乱・検出標高6, 109m
SK 8	S15	土坑	D7・E7	20世紀	掘乱・検出標高6, 198m
SP 8	S16	ピット	E7	20世紀	掘乱・検出標高6, 268m
SP 9	S17	ピット	F7・F8	20世紀	掘乱・検出標高6, 252m
SP10	S18	ピット	E7	20世紀	掘乱・検出標高6, 235m
SP11	S19	ピット	F7	20世紀	掘乱・検出標高6, 196m
SP12	S20	ピット	F7・F8	20世紀	掘乱・検出標高6, 192m
SP13	S21	ピット	E6	20世紀	掘乱・検出標高6, 067m
SP14	S22	ピット	E6・E7	20世紀	掘乱・検出標高6, 075m
SP15	S23	ピット	D6	20世紀	掘乱・検出標高6, 034m
SP16	S24	ピット	E7・E8	20世紀	掘乱・検出標高6, 171m・ビニール
SK 9	S25	土坑	D7・E7	20世紀	掘乱・検出標高6, 205m
SP17	S26	ピット	G8・G9	20世紀	検出標高6, 249m
SK 9	S27	土坑	G8・G9	20世紀	掘乱・検出標高6, 248m
SK10	S28	土坑	G8G9F9	20世紀	掘乱
SD 1	S29	溝状遺構	B3・B4	近世	検出標高6, 130m
SX 1	S30	段状遺構	A4・B4	近世	水田の端部?
SD 2	S31	溝状遺構	B3・B4	近世	
SD 3	S32	溝状遺構	G8G9F9		
SD 4	S33	溝状遺構	F7・F8	近世	S35に分岐?
SD 5	S34	溝状遺構	E8	近世	S36の延長部
SD 6	S35	溝状遺構	E8	近世	S33と接続?
SD 7	S36	溝状遺構	F8	近世	検出標高6, 197m
SD 8	S37	溝状遺構	F8・G8		検出標高6, 236m
SP18	S38	ピット	B4		検出標高6, 156m
SP19	S39	ピット	B4		検出標高6, 136m
SD 9	S40	溝状遺構	D6	14~15世紀	クロマガロ
SD10	S41	溝状遺構	C5	16世紀前半	
SX 2	S42	瓦葺まり	H10	16世紀後半	浅い土坑に構築した状態で出土
SP20	S43	ピット	C5		検出標高6, 028m
SD11	S44	溝状遺構	H9	16世紀中葉~後半	
SD12	S45	溝状遺構	I11		土師器溜まり・検出標高6, 227m
SD13	S46	溝状遺構	I11		
SD14	S47	溝状遺構	I11		
SD15	S48	溝状遺構	I11・I12		
SK11	S49	土坑	D6・D7	16世紀末葉?	浅い長方形気味の土坑
SD16	S50	溝状遺構		16世紀末葉?	割草器伊片・玉縄白磁片
SD17	S51	溝状遺構		16世紀前半?	S51・52下層NO.5は段々土師器
SD18	S52	溝状遺構			S5・152元祐通宝あり
SK21	S53	土坑	D6	14世紀?	土俵リ穴?
SK12	S54	土坑	G9	16世紀前半	検出標高6, 194m
SD19	S55	溝状遺構		16世紀末葉	灰土廃棄・下駄・漆器椀
SX 3	S56	石積み		14世紀中葉~後半	
SK13	S57	土坑	H10H11	14世紀中葉~15世紀末	標高6, 1m~6, 2m
SP22	S58	ピット	G9	16世紀前半?	木柱あり
SP23	S59	ピット?			
SP24	S60	ピット	I11	14世紀・15世紀?	検出標高6, 181m
SE 1	S61	井戸		16世紀後半	朝鮮通宝・漆器椀・ビルマ土器
SP25	S62	ピット?			
SK14	S63	土坑	F9・G9	16世紀後半~末葉?	S54と重複

第2表 遺構一覧表②

本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	遺物・特記事項
SK15	S64	土坑	D5		検出標高6.226m
SD20	S65	溝状遺構	E7・E8		古代の平瓦・軒瓦
SD21	S66	溝状遺構	D7・E7	14世紀～16世紀中葉	南北方向に走る
SK16	S67	土坑	E7	14世紀中葉?	S69・S65場と重複する
SK17	S68	土坑	G9	16世紀前半?	検出標高5.953m・埋土は新しそうな砂利・黒瀝
SK18	S69	土坑	E7	14世紀	S65・S67と重複。二つの土坑?
SP26	S70	ピット	I11	14世紀・15世紀?	検出標高6.157m
SP28	S71	ピット	G9	16世紀前半?	検出標高6.169m・柱の抜き取り跡
SK21	S72	土坑	G9H9		検出標高6.197m
SP29	S73	ピット	H10		検出標高6.171m
SP30	S74	ピット	H10		検出標高6.159m
SP31	S75	ピット	H10		検出標高6.136m
SP32	S76	ピット	H10		検出標高6.188m
SP33	S77	ピット	I11	14世紀・15世紀?	検出標高6.165m・木柱あり
SP34	S78	ピット	I11		検出標高6.190m
SP35	S79	ピット	I12	14世紀・15世紀?	検出標高6.190m
SP36	S80	ピット	G9	14世紀・15世紀?	検出標高6.176m
SP37	S81	ピット	G9		検出標高6.175m
SP38	S82	瓦葺まり	N20		軒瓦・軒平瓦・軒瓦
SP38	S83	ピット	G9H9		検出標高6.149m
SP39	S84	ピット	H9		検出標高6.174m
SP40	S85	ピット	G9	16世紀前半?	検出標高6.157m
SP41	S86	ピット	G9		検出標高6.178m・木柱あり
SD22	S87	溝状遺構	F8		検出標高6.176m
SP42	S88	ピット	G8		検出標高6.233m・S55に壊される
SP43	S89	ピット	G8		検出標高6.147m
SP44	S90	ピット	G8		検出標高6.158m
SP45	S91	ピット	F8	16世紀前半	検出標高6.11m・夜地系土師器
SP46	S92	ピット	F9		
SP47	S93	ピット	G8		検出標高6.101m
SD23	S94	溝状遺構		16世紀前半	S55の下部で検出
SP48	S95	ピット	I11		検出標高6.156m
SP49	S96	ピット	G9		検出標高6.069m
SP50	S97	ピット	G9		
SP51	S98	ピット	G9	16世紀前半?	検出標高6.046m・木柱あり
SP52	S99	ピット	G9		検出標高6.160m
SP53	S100	ピット			
SP54	S101A	ピット	H10	14世紀初頭	青磁調染赤鉄燻染片・別に溝あり(I11)
SD24	S101B	溝状遺構	I11		
SP55	S102	ピット	H10		
SP56	S103	ピット	I11		検出標高6.10m
SP57	S104	ピット	I10		
SP58	S105	ピット			
SP59	S106	ピット			
SP60	S107	ピット	H10		検出標高6.012m・木柱あり
SP61	S108	ピット	H10		検出標高6.156m
SP62	S109	ピット	H10		検出標高6.146m・木柱あり
SP63	S110	ピット	H9	16世紀前半?	検出標高6.181m・木柱あり
SP64	S111	ピット	H9		検出標高6.125m
SP65	S112	ピット	G9	16世紀前半?	検出標高6.122m・木柱あり
SP66	S113	ピット	G9		検出標高6.073m
SP67	S114	ピット	I11	14世紀・15世紀?	検出標高6.161m
SP68	S115	ピット	M14		木柱あり。検出標高6.086m
SD25	S116	溝状遺構	O15周辺		古代の平瓦
SP69	S117	ピット	I11	14世紀	検出標高6.161m
SP70	S118	ピット	I11	14世紀・15世紀?	検出標高6.151m
SP71	S119	ピット	I10・I11		検出標高6.143m
SP72	S120	ピット	I11		検出標高6.121m
SP73	S121	ピット	I11		検出標高6.155m
SP74	S122	ピット	I11	14世紀・15世紀?	検出標高6.134m
SP75	S123	ピット	I11	14世紀・15世紀?	検出標高6.149m
SD26	S124	溝状遺構		16世紀末葉?	
SP76	S125	ピット?			
SP77	S126	ピット?			
SK19	S127	土坑	L14		検出標高6.203m
SP78	S128	ピット	I11	14世紀	検出標高6.066m
SK20	S129	土坑	C6	14世紀	検出標高m
SD27		溝状遺構	L13	近世	検出標高6.265m
SP79		ピット	M14		検出標高6.255m
SD28		溝状遺構	N14・N15	近世	検出標高5.953m。埋土は砂。
SH 1	-	独立柱遺物	L14	14世紀?	
SH 2	-	独立柱遺物	L14	14世紀?	

### 31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器①）

押附 No.	器 種	生産地	法量（単位cm）			遺構名	備考
			口徑	底徑	器高		
第12層1	瓦質土器	口縁部	日本	-	-	SD1	NO.29
第12層2	印花	碗	中国	-	-	SD1	
第12層3	印花	皿	中国	-	-	SD2	
第12層4	陶磁	筒鉢	朝鮮	-	-	SD2	NO.2
第13層2	陶磁	碗	朝鮮	-	-	SD3	
第13層3	陶磁	碗	中国	-	-	SD3	層部
第13層4	瓦質土器	火鉢	各地	-	-	SD3	
第14層1	陶磁	碗	中国(蘇州産)	-	(7.2)	SD7	
第14層2	土師器	瓶	在地	-	-	SD8	
第14層3	瓦質土器	鉢	在地	-	-	SD8	
第14層4	須弥陶磁	瓮	中国産部	-	-	SD8	
第16層1	印花	碗	中国	-	-	-	
第16層2	白磁	碗	中国	-	-	-	
第16層3	陶磁	皿	-	-	-	-	
第16層4	土師器	皿	在地	-	-	-	
第16層5	京範系土師器	皿	在地	-	-	-	
第16層6	京範系土師器	皿	在地	-	-	-	
第16層7	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	
第22層1	京範系土師器	皿	在地	-	-	SK11	
第22層2	京範系土師器	皿	在地	-	-	SK11	
第22層3	京範系土師器	皿	在地	-	-	SK11	
第25層1	京範系土師器	皿	在地	(10.2)	-	SD19	
第25層2	京範系土師器	皿	在地	(10.2)	-	SD19	
第25層3	京範系土師器	皿	在地	(10.2)	-	SD19	
第25層4	京範系土師器	皿	在地	(10.2)	-	SD19	
第25層5	京範系土師器	皿	在地	(9.6)	-	SD19	
第25層6	京範系土師器	皿	在地	(10.4)	-	SD19	
第25層7	京範系土師器	皿	在地	-	-	SD19	
第25層8	京範系土師器	皿	在地	(11.6)	-	SD19	
第25層9	京範系土師器	皿	在地	-	-	SD19	
第25層10	京範系土師器	皿	在地	(12.0)	-	SD19	
第25層11	京範系土師器	皿	在地	-	-	SD19	
第25層12	京範系土師器	皿	在地	-	-	SD19	
第25層13	京範系土師器	皿	在地	(12.3)	-	SD19	
第25層14	京範系土師器	皿	在地	(12.4)	-	SD19	
第25層15	京範系土師器	碗	在地	(12.4)	-	SD19	
第25層16	京範系土師器	皿	在地	(12.8)	-	SD19	
第25層17	京範系土師器	皿	在地	-	-	SD19	
第25層18	京範系土師器	皿	在地	(13.0)	-	SD19	
第25層19	京範系土師器	皿	在地	-	-	SD19	
第25層20	京範系土師器	皿	在地	-	-	SD19	
第25層21	京範系土師器	皿	在地	(14.0)	-	SD19	
第25層22	京範系土師器	皿	在地	(14.4)	-	SD19	
第25層23	京範系土師器	皿	在地	(16.2)	-	SD19	
第25層24	京範系土師器	皿	在地	(16.4)	-	SD19	
第25層25	土師器土器	皿	在地	(11.9)	(6.9)	2.6	SD19
第25層26	土師器土器	皿	在地	-	(6.4)	-	SD19
第25層27	土師器土器	皿	在地	(11.0)	(5.6)	3.0	SD19
第25層28	土師器土器	皿	在地	(7.2)	(5.7)	1.2	SD19
第25層29	土師器土器	皿	在地	(8.0)	(4.6)	2.8	SD19
第25層30	土師器土器	皿	在地	(13.2)	(11.5)	3.0	SD19
第25層31	瓦質土器	火鉢	在地	(32.6)	-	-	SD19
第25層32	瓦質土器	鉢	日本	-	-	-	SD19
第26層1	印花	碗	中国(京産部)	-	-	-	層大径。外面中央部に環状に本糸の地肌が残る
第26層2	印花	碗	中国(京産部)	-	-	-	石炭を含む
第26層3	陶磁	碗	中国(龍泉産)	(11.8)	-	-	SD19
第26層4	陶磁	碗	中国(龍泉産)	-	-	-	SD19
第26層5	陶磁	碗	中国(龍泉産)	-	-	-	SD19
第26層6	陶磁	碗	中国(龍泉産)	(13.2)	-	-	SD19
第26層7	白磁	碗	中国(京産部)	-	-	-	SD19
第26層8	陶磁	碗	中国(龍泉産)	-	-	-	SD19
第26層9	白磁	皿	中国(龍泉産)	-	-	-	SD19
第26層10	白磁	皿	中国(龍泉産)	-	-	-	SD19
第26層11	白磁	皿	中国	10.4	5.1	3.0	SD19
第26層12	白磁	碗	中国	-	-	-	NO.5
第26層13	白磁	皿	中国	-	-	-	玉縁
第26層14	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19
第26層15	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19
第26層16	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19
第26層17	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19
第26層18	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19
第26層19	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19

31次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器②)

探回 No.	種 類		生産地	法量 (単位cm)			遺物名	備考
				口径	高さ	器高		
Ⅱ 26820	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19	
Ⅱ 26821	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19	
Ⅱ 26822	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19	
Ⅱ 26823	褐釉陶器	甗	中国南部	-	-	-	SD19	
Ⅱ 26824	褐釉陶器	甗	中国南部	-	-	-	SD19	
Ⅱ 26825	褐釉陶器	甗	中国南部	-	-	-	SD19	
Ⅱ 26826	褐釉陶器	甗	中国南部	-	-	-	SD19	
Ⅱ 278 1	陶器	甗鉢	備前	-	-	-	SD19	
Ⅱ 278 2	陶器	甗鉢	備前	-	-	-	SD19	
Ⅱ 278 3	陶器	甗鉢	備前	-	(12.0)	-	SD19	
Ⅱ 278 4	陶器	甗	備前	-	-	-	SD19	
Ⅱ 278 5	陶器	舟形煎	備前?	-	-	-	SD19	
Ⅱ 288 1	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD19	
Ⅱ 288 2	瓦質土器	鉢	備前	-	-	-	SD19	
Ⅱ 288 3	瓦質土器	鉢	備前	-	-	-	SD19	
Ⅱ 288 4	瓦質土器	不明	在地	-	-	-	SD19	
Ⅱ 288 5	瓦質土器		在地	-	-	-	SD19	
Ⅱ 288 6	瓦質土器		在地	-	-	-	SD19	外蓋はへら煎き
Ⅱ 308 1	京阪系土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
Ⅱ 308 2	京阪系土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
Ⅱ 308 3	土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
Ⅱ 308 4	土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
Ⅱ 308 5	土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
Ⅱ 308 6	土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
Ⅱ 308 7	土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
Ⅱ 328 1	京阪系土師器	皿	花埜	-	-	-	SD23	
Ⅱ 328 2	京阪系土師器	皿	花埜	-	-	-	SD23	
Ⅱ 328 3	土師器	皿	在地	-	(5.4)	-	SD23	NO.13
Ⅱ 328 4	土師器	皿	在地	-	(5.6)	-	SD23	
Ⅱ 328 5	土師器	皿	在地	-	(8.0)	-	SD23	
Ⅱ 328 6	土師器	皿	在地	(12.4)	(7.6)	3.6	SD23	
Ⅱ 328 7	土師器	皿	在地	-	(8.3)	-	SD23	
Ⅱ 308 1	京阪系土師器	皿	在地	-	-	-	SE1	
Ⅱ 308 2	京阪系土師器	皿	在地	8.6	-	2.2	SE1	内面に厚く付着物あり
Ⅱ 308 3	京阪系土師器	皿	在地	(11.6)	-	2.7	SE1	
Ⅱ 328 4	京阪系土師器	皿	在地	-	-	-	SE1	
Ⅱ 328 5	京阪系土師器	皿	在地	-	-	-	SE1	
Ⅱ 328 6	京阪系土師器	皿	在地	-	-	-	SE1	
Ⅱ 328 7	京阪系土師器	皿	在地	-	-	-	SE1	
Ⅱ 328 8	京阪系土師器	皿	在地	-	-	-	SE1	
Ⅱ 328 9	土師器	皿	在地	-	7.6	-	SE1	外底面に着付痕
Ⅱ 30810	百花	皿	中国 (福建)	(12.2)	(6.9)	2.5	SE1	
Ⅱ 30811	瓦質土器	火鉢	中国 (湖南)	-	-	-	SE1	
Ⅱ 30812	青磁	皿	中国	(14.2)	(7.2)	4.0	SE1	
Ⅱ 30813	白磁	皿	中国	(15.5)	-	1.8	SE1	
Ⅱ 30814	瓦質土器	鉢	在地	(22.2)	-	-	SE1	
Ⅱ 30815	褐釉陶器	甗	中国南部	-	12.0	-	SE1	
Ⅱ 30816	褐釉陶器	甗	中国南部	-	13.2	-	SE1	
Ⅱ 30817	褐釉陶器	甗	中国	-	-	-	SE1	茶色釉
Ⅱ 30818	陶器	鉢	備前	(13.3)	-	-	SE1	
Ⅱ 30819	瓦質土器	鉢	在地	(15.6)	-	-	SE1	
Ⅱ 30820	白磁	鉢台	中国 (福建)	-	-	-	SE1	
Ⅱ 348 1	陶器	甗鉢	備前	(26.8)	-	-	SE1	
Ⅱ 348 2	陶器	甗鉢	備前	(31.8)	-	-	SE1	罎口あり。器高15.6 + α
Ⅱ 348 3	陶器	甗鉢	備前	-	-	-	SE1	
Ⅱ 348 4	陶器	甗	備前	38.8	-	-	SE1	D5-No.1, C5-No.18と適合
Ⅱ 348 5	陶器	甗	備前	-	10.2	-	SE1	
Ⅱ 348 6	陶器	甗	備前	-	(11.2)	-	SE1	
Ⅱ 348 7	陶器	甗	備前	-	37.2	-	SE1	
Ⅱ 348 8	陶器	甗	備前	-	-	-	SE1	
Ⅱ 348 9	陶器	甗	備前	-	-	-	SE1	
Ⅱ 34810	陶器	甗	備前	-	17.2	-	SE1	
Ⅱ 34811	陶器	甗	備前	-	20.6	-	SE1	
Ⅱ 34812	陶器	外	備前	-	-	-	SE1	
Ⅱ 34813	土器	夕イ	-	-	-	-	SE1	最大径19.0cm 底部外縁に印き痕
Ⅱ 308 1	京阪系土師器	皿	在地	(11.5)	-	-	SD26	
Ⅱ 308 2	京阪系土師器	皿	在地	(12.0)	-	-	SD26	
Ⅱ 478 1	京阪系土師器	皿	在地	-	-	-	SK14	
Ⅱ 478 2	京阪系土師器	皿	在地	-	-	-	SK14	
Ⅱ 478 3	京阪系土師器	皿	在地	-	-	-	SK14	
Ⅱ 478 4	京阪系土師器	皿	在地	-	-	-	SK14	
Ⅱ 478 5	土師器	皿	中国	13.0	8.8	3.95	SK14	
Ⅱ 478 6	褐釉陶器	甗	中国南部	14.0	-	-	SK14	第 33回 7 と同一個体・口径ほぼ最大径
Ⅱ 478 7	褐釉陶器	甗	中国南部	-	9.6	-	SK14	

### 31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器③）

押図 No.	器 種		生産地	法量（単位cm）			遺構名	備考
				口径	底径	器高		
第47R.8	瓦甎土器	火鉢	在 地	-	-	-	SK14	双蹄痕手島雲紋
第47R.9	青花	碗	中 国	-	-	-	SK14	
第47R.10	土師器	皿	在 地	-	-	-	SK14	
第49R.5	京師系土師器	皿	在 地	-	-	-	SD10	
第49R.6	京師系土師器	皿	在 地	-	-	-	SD10	
第49R.7	土師器	皿	在 地	-	-	-	SD10	
第49R.8	土師器	皿	在 地	-	-	-	SD10	
第49R.9	土師器	皿	在 地	-	(7.9)	-	SD10	下腹
第49R.10	土師器	皿	在 地	-	(5.1)	-	SD10	中腹
第49R.11	土師器	皿	在 地	-	-	-	SD10	NO.59石炭を含む
第49R.12	土師器	皿	在 地	-	5.0	-	SD10	NO.113
第49R.13	大内系土師器	皿	在 地	(12.3)	(5.2)	2.3	SD10	NO.118. 金色の裏面を含む
第50R.1	青花	皿	中国（景德鎮原）	-	-	-	SD10	
第50R.2	青花	皿	中国（景德鎮原）	-	-	-	SD10	
第50R.3	青花	皿	中国（景德鎮原）	-	-	-	SD10	
第50R.4	青花	皿	中国（景德鎮原）	-	-	-	SD10	
第50R.5	青磁	碗	中国（龍泉原）	-	-	-	SD10	
第50R.6	青磁	碗	中国（西安原）	-	-	-	SD10	
第50R.7	白磁	碗	中 国	-	-	-	SD10	内面に施彩。口唇部周辺は釉なし。
第50R.8	青磁	碗	中国（龍泉原）	-	(8.8)	-	SD10	NO.30
第50R.9	青磁	碗	中国（龍泉原）	(14.6)	-	-	SD10	NO.78
第50R.10	白磁	皿	中 国	(9.4)	-	-	SD10	
第50R.11	白磁	碗	中 国	-	(3.2)	-	SD10	NO.115
第50R.12	青磁	碗	中国（龍泉原）	-	-	-	SD10	
第50R.13	瓦甎土器	火鉢	在 地	-	-	-	SD10	NO.85
第50R.14	陶器	天目碗	中 国	-	-	-	SD10	
第50R.15	陶器	天目碗	中 国	-	-	-	SD10	
第50R.16	瓦甎土器	鉢	在 地	-	-	-	SD10	
第50R.17	陶器	船徳利	-	-	-	-	SD10	NO.37
第50R.18	陶器	壺	備前	-	-	-	SD10	NO.12
第50R.19	瓦甎土器	火鉢	在 地	-	-	-	SD10	NO.57. 石炭を含む
第36R.20	焼締陶器	甕	備前	-	-	-	SD10	
第36R.21	焼締陶器	鉢	備前	-	-	-	SD10	
第36R.22	焼締陶器	鉢	備前	-	-	-	SD10	
第36R.23	焼締陶器	鉢	備前	-	-	-	SD10	
第36R.24	瓦甎土器	摺鉢	在 地	-	-	-	SD10	
第52R.1	土師器	皿	在 地	(8.6)	-	-	SD11	
第52R.2	土師器	皿	在 地	(7.5)	(4.7)	2.2	SD11	口唇部に煤付着
第52R.3	京師系土師器	火鉢	在 地	-	-	-	SD11	
第52R.4	京師系土師器	火鉢	在 地	-	-	-	SD11	
第52R.5	京師系土師器	火鉢	在 地	-	-	-	SD11	
第52R.6	京師系土師器	火鉢	在 地	(15.8)	-	-	SD11	
第52R.7	京師系土師器	火鉢	在 地	(16.2)	-	-	SD11	NO.6
第52R.8	京師系土師器	火鉢	在 地	12.3	-	-	SD11	NO.13. 内外面とも煤付着。
第52R.9	青花	碗	中国（景德鎮原）	-	-	-	SD11	
第52R.10	青磁	碗	中国（龍泉原）	(13.8)	-	-	SD11	
第52R.11	襷輪陶器	甕	中国南部	-	-	-	SD11	
第52R.15	陶器	甕	備前	-	-	-	SD11	
第39R.16	陶器	大甕	備前	-	-	-	SD11	NO.2
第54R.1	土師器	皿	大内系土師器	-	6.1	-	SK12	NO.1. 石炭を含む
第54R.2	青磁	碗	中国（龍泉原）	-	(5.4)	-	SK12	NO.5
第56R.1	土師器	皿	在 地	-	-	-	SK17	
第58R.1	土師器	皿	在 地	-	-	-	SP45	
第41R.3	青花	碗	中国（湘原）	-	-	-	SD11	
第41R.2	白磁	碗	中 国	-	-	-	SD11	
第41R.3	陶器	鉢	備前	-	-	-	SD11	
第41R.4	土師器	皿	在 地	-	-	-	SD11	
第41R.5	京師系土師器	皿	在 地	-	-	-	SD11	
第41R.6	京師系土師器	皿	在 地	-	-	-	SD11	
第43R.1	土師器	皿	在 地	(6.9)	(4.8)	2.0	SD21	石炭を含む
第43R.2	土師器	皿	在 地	(8.6)	(7.0)	1.5	SD21	
第43R.3	土師器	皿	在 地	(9.4)	(6.5)	1.2	SD21	金色の裏面が多い
第43R.4	土師器	皿	在 地	(11.3)	(6.5)	3.4	SD21	金色の裏面が多い
第43R.5	土師器	皿	在 地	(11.6)	(6.9)	3.3	SD21	金色の裏面が多い
第43R.6	土師器	皿	在 地	(14.7)	-	-	SD21	金色の裏面が多い
第43R.7	土師器	皿	在 地	-	(8.0)	-	SD21	
第43R.8	京師系土師器	皿	在 地	-	-	-	SD21	
第43R.9	京師系土師器	皿	在 地	-	-	-	SD21	
第43R.10	京師系土師器	皿	在 地	-	-	-	SD21	
第43R.11	瓦甎土師器	皿	在 地	(10.6)	-	-	SD21	北側の落ち込み
第43R.12	瓦甎土師器	鉢	在 地	(15.7)	-	-	SD21	北側の落ち込み
第43R.13	瓦甎土師器	鉢	在 地	-	-	-	SD21	脚部最大径18.6cm・外面に煤付着
第43R.14	白磁	碗	中 国	-	-	-	SD21	
第44R.1	瓦甎土師器	鉢	在 地	49.2	-	-	SD21	
第45R.1	土師器	皿	在 地	(12.3)	(6.7)	2.6	SK17	

## 31次調査区遺物観察表(土器・陶磁器④)

押出 No.	備 考		生源地	法量(単位cm)			遺構名	備考
				口徑	底徑	器高		
488 1	土師器	皿	在池	(13,4)	(7,8)	2,6	SP45	
489 1	京都系土師器	皿	在池	-	-	-	SD26	
490 2	京都系土師器	皿	在池	-	-	-	SD26	
648 1	土師器	皿	在池	-	-	-	SP78	
648 1	京都系土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
648 2	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
648 3	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
648 4	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
648 5	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
648 6	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
648 7	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
648 8	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
648 9	瓦質土師	皿	在池	-	-	-	SD9	
648 10	瓦質土師	皿	在池	-	-	-	SD9	
648 11	陶磁	鉢	福岡	(16,3)	-	-	SD9	黒大甕
648 12	陶磁	鉢	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD9	黒大甕
850 1	土師器	皿	在池	13,2	11,1	3,1	SD9	5層
850 2	土師器	皿	在池	12,8	10,6	2,3	SD9	5層
850 3	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	東北層6・7層
850 4	白黒	皿	中国	(11,6)	-	-	SD9	一層
850 5	瓦質土師	皿	在池	-	-	-	SD9	
880 1	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
880 2	土師器	皿	在池	(7,7)	4,8	2,0	SD9	NO.24. 黄色の管母を含む
880 3	京都系土師器	皿	京都	7,0	3,2	1,8	SD9	NO.17. 砂板なし。
880 4	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
880 5	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
880 6	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
880 7	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
880 8	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
880 9	土師器	皿	在池	-	(8,3)	-	SD9	NO.26
880 10	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
880 11	土師器	皿	在池	(11,6)	(8,6)	-	SD9	NO.21. 石炭を含む
880 12	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
880 13	土師器	皿	在池	(7,5)	(6,0)	1,3	SD9	北層6・7層
880 14	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
880 15	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
880 16	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
880 17	土師器	皿	在池	-	7,2	-	SD9	層下層. 黄色の管母を含む
880 18	土師器	皿	在池	-	(8,4)	-	SD9	層下層. 黄色の管母を含む
880 19	土師器	皿	在池	(12,2)	(6,5)	3,7	SD9	砂板. 黄色の管母を含む
880 20	土師器	皿	在池	-	(8,9)	-	SD9	層下層
880 21	土師器	皿	在池	-	(8,9)	-	SD9	層下層
880 22	土師器	皿	在池	-	(8,9)	-	SD9	層下層
890 1	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
890 2	土師器	皿	在池	(13,3)	-	-	SD9	北層9層
890 3	土師器	皿	在池	(11,3)	(7,3)	3,3	SD9	層下層. 黄色の管母を含む
890 4	土師器	皿	在池	-	-	-	SD9	
890 5	土師器	皿	在池	(13,8)	(10,1)	3,1	SD9	
890 7	土師器	皿	在池	(11,4)	(6,4)	3,1	SD9	層下層. 黄色の管母を含む
890 8	土師器	皿	在池	(15,8)	(9,6)	3,5	SD9	層下層 (黒色土師のこと). 黄色の管母を含む
890 9	土師器	皿	在池	-	(8,8)	-	SD9	層下層. 黄色の管母を含む
890 10	土師器	皿	在池	-	7,0	-	SD9	層下層
890 11	土師器	皿	在池	-	(9,6)	-	SD9	層下層
890 12	土師器	皿	在池	(12,8)	(9,2)	3,4	SD9	層下層. 黄色の管母を含む
890 13	土師器	皿	在池	(11,6)	(8,4)	2,3	SD9	層下層
890 14	土師器	皿	在池	(12,0)	(8,3)	3,4	SD9	層下層. 黄色の管母を含む
890 15	瓦質土師	皿	在池	-	-	-	SD9	層下層. 和瓦質瓦器類
890 16	瓦質土師	皿	在池	-	(5,2)	-	SD9	砂板
890 17	瓦質土師	鉢	在池	-	-	-	SD9	砂板
890 18	陶磁	鉢	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD9	砂板
890 19	陶磁	鉢	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD9	砂板
890 20	陶磁	鉢	中国(龍泉窯)	(12,4)	-	-	SD9	黒砂板
890 21	陶花	鉢	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD9	黒砂板
740 1	弥生式土師	皿	在池	13,3	-	-	SD9	弥生中層末
740 2	弥生式土師	皿	在池	21,4	-	-	SD9	弥生中層末
740 3	弥生式土師	皿	在池	-	-	-	SD9	弥生中層末
410 1	陶花	鉢	中国(龍泉窯)	-	-	-	SX2	
780 1	土師器	皿	大内系土師類	-	-	-	SX3	白色で厚手. 重入品か?
780 2	土師器	皿	中国(龍泉窯)	-	-	-	SX3	
780 1	土師器	皿	在池	-	-	-	SX3	
780 2	土師器	皿	在池	-	-	-	SX3	
780 3	土師器	皿	在池	-	-	-	SX3	
780 4	土師器	皿	在池	-	-	-	SX3	
780 5	土師器	皿	在池	(9,6)	(6,8)	2,55	SX3	黄色管母
780 6	土師器	皿	在池	10,2	(7,3)	2,85	SX3	
780 7	土師器	皿	在池	-	-	-	SX3	
780 8	土師器	皿	在池	15,3	(10,8)	3,4	SX3	



## 31次調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑤)

押図 No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考
			口径	底径	器高		
第7689	土師器	皿	在地	-	10.2 (6.9)	SK3	
第76810	青花	皿	中国(景德鎮系)	-	-	SK3	
第76811	青磁	皿	-	-	-	SK3	
第76812	白磁	椀	-	-	(6.9) (2.3)	SK3	
第7981	土師器	皿	在地	-	-	SK13	
第7982	土師器	皿	在地	-	-	SK13	
第7983	土師器	皿	在地	-	-	SK13	
第7984	土師器	皿	在地	-	-	SK13	
第7985	土師器	皿	在地	-	-	SK13	
第7986	土師器	皿	在地	(12.0)	(9.2) 3.1	SK13	NO.17
第7987	土師器	皿	在地	(12.6)	(8.2) 3.5	SK13	NO.10. 金色の雲母を蓄む
第7988	土師器	皿	在地	(13.3)	(10.0) 2.7	SK13	
第7989	土師器	皿	在地	(12.0)	(8.1) 3.1	SK13	NO.23
第79810	土師器	耳皿	在地	-	-	SK13	
第79811	土師器	皿	在地	-	-	SK13	
第79814	瓦質土器	火鉢	在地	-	13.5	SK13	NO.13
第7881	土師器	皿	在地	(14.3)	(10.1) 3.7	SD20	金色の雲母多い
第7882	瓦質土器	鉢	在地	19.4	- (3.2)	SD20	
第7883	瓦質土器	鉢	在地	-	-	SD20	
第7884	青磁	碗	中国(龍泉原)	-	-	SD20	
第7885	陶器	天目碗	中国	-	-	SD20	
第7981	弥生式土器	鉢	在地	-	-	SK16	
第7982	弥生式土器	瓶形	在地	-	9.0	SK16	NO.1
第7983	弥生式土器	高坏	在地	-	-	S66-67	
第7984	瓦質土器	鉢	在地	-	-	S66-67	石英を含む
第7985	土師器	皿	在地	-	(7.2)	SK16	
第7986	瓦質土器	皿	在地	-	-	S66-67	
第7987	瓦質土器	鉢	在地	(15.9)	-	SK16	石英多い
第7988	土師器	椀	在地	(13.8)	-	SK16	
第7989	瓦質土器	鉢	在地	-	-	SK16	金色の雲母多い
第79810	白磁	碗	中国	(16.5)	-	SK16	
第8081	土師器	皿	在地	13.8	(6.9) 3.5	SK18	
第8082	土師器	皿	在地	-	(10.4)	SK18	石英を含む
第8083	土師器	皿	在地?	-	-	SK18	
第8084	瓦質土器	鉢	在地	(18.7)	-	SK18	石英を含む
第8085	白磁	碗	中国	-	-	SK18	
第8086	白磁	碗	中国	-	(6.2)	SK18	内面のみ施釉
第8087	白磁	碗	中国	-	(7.8) (1.9)	SK18	内面のみ施釉
第8089	陶器	壺	備前	-	-	SK18	NO.8. 頸部最小径16.0"
第8281	土師器	皿	在地	(6.7)	(5.2) 1.2	SP35	
第8381	土師器	皿	在地	(9.0)	(7.7) 1.3	SD24	
第8382	土師器	皿	在地	(12.4)	(7.8) 2.7	SD24	
第8383	土師器	皿	在地	-	-	SD24	
第8384	瓦質土器	鉢	在地	(26.2)	-	SD24	
第8481	土師器	皿	大内系	-	-	SP69	石英を含む。灰白色
第8681	土師器	皿	在地	(9.1)	(7.7) 1.2	SP69	
第91811	京都系土師器	皿	在地	(8.6)	-	1区包盆層	G10
第91812	京都系土師器	皿	在地	(9.1)	-	1区包盆層	
第91813	京都系土師器	皿	在地	(10.0)	-	2.6 1区包盆層	C5-NO.56
第91814	京都系土師器	皿	在地	(10.6)	-	2.1 1区包盆層	G9
第91815	京都系土師器	皿	在地	-	-	1区包盆層	
第91816	京都系土師器	皿	在地	(10.4)	-	1区包盆層	H10-NO.10
第91817	京都系土師器	皿	在地	(11.6)	-	2.55 1区包盆層	G9様出函
第91818	京都系土師器	皿	在地	(12.0)	-	2.1 1区包盆層	G9
第91819	京都系土師器	皿	在地	(13.4)	-	1区包盆層	G8
第91820	京都系土師器	皿	在地	(15.1)	-	1区包盆層	F9-NO.14
第91821	京都系土師器	皿	在地	-	-	1区包盆層	
第91822	京都系土師器	皿	在地	(10.5)	-	1区包盆層	C4-NO.28
第91823	京都系土師器	皿	在地	-	-	1区包盆層	
第91824	京都系土師器	皿	在地	-	-	1区包盆層	
第91825	京都系土師器	皿	在地	-	-	1区包盆層	
第91826	京都系土師器	皿	在地	-	-	1区包盆層	
第91827	京都系土師器	皿	在地	(11.0)	-	2.1 1区包盆層	F8-NO.10
第91828	京都系土師器	皿	在地	(13.2)	-	1区包盆層	C5 様出函
第91829	京都系土師器	皿	在地	-	-	1区包盆層	
第91830	京都系土師器	皿	在地	-	-	1区包盆層	
第91831	京都系土師器	皿	在地	-	-	1区包盆層	
第91832	京都系土師器	皿	在地	(11.9)	-	2.7 1区包盆層	F7-NO.4
第91833	京都系土師器	皿	在地	-	-	1区包盆層	
第91834	京都系土師器	皿	在地	(14.3)	-	1区包盆層	C4-NO.12
第91835	京都系土師器	皿	在地	(18.0)	-	1区包盆層	C5-NO.112
第9281	土師器	皿	在地	-	-	1区包盆層	

31次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器⑤)

押図 No.	器 種		生源地	法量 (単位cm)			遺物名	備考
				口径	底径	器高		
■ 928 2	土師器	皿	在池	-	-	-	1区西側	
■ 928 3	土師器	皿	在池	-	-	-	1区西側	
■ 928 4	土師器	皿	在池	(8.7)	(5.3)	2.2	1区西側	M14-N0.6
■ 928 5	土師器	皿	在池	7.7	5.2	2.2	1区西側	I10+S57-N0.32, 金色の釦母を煮む
■ 928 6	土師器	皿	在池	(8.0)	(6.6)	1.0	1区西側	I10
■ 928 7	土師器	皿	在池	-	-	-	1区西側	
■ 928 8	土師器	皿	在池	-	-	-	1区西側	
■ 928 9	土師器	皿	在池	(7.1)	(5.3)	1.3	1区西側	E8
■ 928 10	土師器	皿	在池	-	-	-	1区西側	
■ 928 11	土師器	皿	在池	(9.0)	(7.0)	2.0	1区西側	M14
■ 928 12	土師器	皿	在池	-	-	-	1区西側	
■ 928 13	土師器	皿	在池	(8.3)	(7.0)	1.1	1区西側	M14, 内面に横付痕
■ 928 14	土師器	皿	在池	(9.6)	(5.6)	2.1	1区西側	F9-N0.12
■ 928 15	土師器	皿	在池	-	-	-	1区西側	
■ 928 16	土師器	皿	在池	-	-	-	1区西側	
■ 928 17	土師器	皿	在池	-	(5.6)	-	1区西側	F9-No.20
■ 928 18	土師器	皿	在池	-	7.8	-	1区西側	D6-N0.19
■ 928 19	土師器	皿	在池	-	(5.6)	-	1区西側	J19, 石炭を煮む
■ 928 20	土師器	皿	在池	-	(5.6)	-	1区西側	E8
■ 928 21	土師器	皿	在池	-	(6.6)	-	1区西側	I11-N0.21
■ 928 22	土師器	皿	在池	-	(6.6)	-	1区西側	E7
■ 930 1	土師器	皿	在池	-	(7.0)	-	1区西側	I10, 金色の釦母を煮む
■ 930 2	土師器	皿	在池	(12.0)	(8.0)	2.7	1区西側	H10-N0.5, 外底面に横付痕
■ 930 3	土師器	皿	在池	(12.8)	(8.7)	3.7	1区西側	D7-N0.52
■ 930 4	土師器	皿	在池	(12.9)	(9.0)	3.0	1区西側	E8-N0.16, 石炭を煮む
■ 930 5	土師器	皿	在池	(14.2)	(11.6)	3.1	1区西側	H10-N0.5
■ 930 6	土師器	皿	在池	(11.4)	(8.2)	3.9	1区西側	E8-N0.14
■ 930 7	土師器	皿	在池	(12.7)	(8.6)	3.0	1区西側	E8-N0.11
■ 930 8	土師器	皿	在池	(12.4)	(8.7)	3.6	1区西側	
■ 930 9	土師器	皿	在池	-	-	-	1区西側	
■ 930 10	土師器	皿	在池	(11.8)	(8.6)	3.7	1区西側	F8
■ 930 11	土師器	皿	在池	(11.2)	7.0	4.4	1区西側	C5-N0.42
■ 930 12	青花	碗	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 930 13	青花	碗	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 930 14	青花	碗	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 930 15	青花	碗	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 930 16	青花	碗	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 930 17	青花	碗	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 930 18	青花	碗	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 930 19	青花	碗	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 930 20	青花	碗	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 930 21	青花	碗	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 930 22	青花	碗	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 940 1	青花	皿	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 940 2	青花	皿	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 940 3	青花	皿	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 940 4	青花	皿	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 940 5	青花	皿	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 940 6	青花	皿	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 940 7	青花	皿	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 940 8	青花	皿	中国 (景德鎮)	-	(5.2)	-	1区西側	F9-N0.16
■ 940 9	青花	碗	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 940 10	青花	碗	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 940 11	青花	碗	中国 (景德鎮)	-	-	-	1区西側	
■ 940 12	青磁	碗	中国 (龍泉)	(12.5)	-	-	1区西側	F8-N0.50
■ 940 13	青磁	碗	中国 (龍泉)	(16.2)	-	-	1区西側	
■ 940 14	青磁	碗	中国 (龍泉)	(15.0)	-	-	1区西側	E8
■ 940 15	青磁	皿	中国 (龍泉)	(15.8)	-	-	1区西側	C5-N0.87
■ 940 16	青磁	皿	中国 (龍泉)	(10.6)	(5.4)	(3.0)	1区西側	D5-N0.35-46, 梅花皿
■ 940 17	青磁	碗	中国 (龍泉)	-	-	-	1区西側	G9-N0.24
■ 940 18	青磁	碗	中国 (龍泉)	-	-	-	1区西側	
■ 940 19	青磁	碗	中国 (龍泉)	-	(5.6)	-	1区西側	C5-N0.12
■ 940 20	青磁	碗	中国 (龍泉)	-	-	-	1区西側	
■ 940 21	青磁	碗	中国 (龍泉)	-	-	-	1区西側	
■ 940 22	青磁	碗	中国 (龍泉)	-	-	-	1区西側	
■ 940 23	青磁	碗	中国 (同安)	-	-	-	1区西側	藤織器
■ 940 24	青磁	碗	中国 (同安)	-	-	-	1区西側	
■ 940 25	青磁	碗	中国 (龍泉)	-	-	-	1区西側	C5-N0.24, 100
■ 940 26	青磁	皿	中国 (龍泉)	-	-	-	1区西側	G9-No.34
■ 940 27	青磁	皿	中国 (龍泉)	-	-	-	1区西側	D6-N0.56
■ 940 28	青磁	皿	中国 (龍泉)	-	-	-	1区西側	
■ 940 29	青磁	碗	中国 (龍泉)	-	-	-	1区西側	G9
■ 940 30	青磁	碗	中国 (龍泉)	-	-	-	1区西側	

31次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器⑦)

押図 No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考
			口径	底径	器高		
■ 94831	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	1区包査層	
■ 94832	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	1区包査層	柳掻き
■ 94833	白磁	碗	中国	-	-	1区包査層	C5-No.55
■ 94834	白磁	碗	中国	(6.8)	-	1区包査層	H9-No.10
■ 94835	白磁	碗	中国	(7.4)	-	1区包査層	F8-No.45
■ 94836	白磁	碗	中国	-	-	1区包査層	C5-No.41, 毛彫り
■ 94837	白磁	碗	中国	-	-	1区包査層	D5, 聖押し
■ 94838	白磁	碗	中国	-	-	1区包査層	
■ 94839	白磁	碗	中国	-	-	1区包査層	C5, 毛彫り
■ 94840	白磁	碗	中国	-	-	1区包査層	A3
■ 94841	白磁	碗	中国	(3.9)	-	1区包査層	G9
■ 94842	白磁	碗	中国	(5.0)	-	1区包査層	G9-No.10
■ 94843	白磁	皿	中国	(6.0)	-	1区包査層	F7-No.1
■ 94844	白磁	皿	中国	-	-	1区包査層	
■ 958 1	瓦甎土器	火鉢	在り	-	-	1区包査層	F8-No.53
■ 958 2	瓦甎土器	火鉢	在り	30.0	-	1区包査層	C5-No.73, 93
■ 958 3	瓦甎土器	火鉢	在り	-	-	1区包査層	C4-No.10
■ 958 4	瓦甎土器	皿	在り	-	-	1区包査層	D6-No.55
■ 958 5	瓦甎土器	蓋	在り	-	-	1区包査層	D6-No.50
■ 958 6	瓦甎土器	蓋	在り	(20.3)	-	1区包査層	N14
■ 958 7	瓦甎土器	蓋	在り	-	-	1区包査層	F8
■ 958 8	瓦甎土器	土鍋	在り	-	-	1区包査層	E7-No.15
■ 958 9	瓦甎土器	鍋	在り	-	-	1区包査層	M14-No.8, 石炭を含む
■ 95810	瓦甎土器	火鉢	在り	-	-	1区包査層	N14
■ 95811	瓦甎土器	鉢	在り	-	-	1区包査層	E7
■ 95812	瓦甎土器	甕	在り	-	-	1区包査層	D6-No.54, 最大径12.4"
■ 95813	瓦甎土器	火鉢	在り	-	-	1区包査層	D6-No.31
■ 95814	瓦甎土器	鉢	在り	-	-	1区包査層	L13
■ 978 1	須恵器	蓋	日本	(8.8)	2.0	1区包査層	G9-No.9, 古代
■ 978 2	緑釉陶器	皿	日本	-	-	1区包査層	古代
■ 978 3	土師器	皿	日本	(11.5)	-	1区包査層	F7-No.32, 古代
■ 978 4	土師器	皿	日本	-	-	1区包査層	古代
■ 978 5	緑釉陶器	甕	中国南部	-	-	1区包査層	C4-No.31
■ 978 6	陶器	皿	備前	4.9	-	1区包査層	C4-No.33, 最大径6.0"
■ 978 7	瓦甎土器	鉢	在り	(5.3)	-	1区包査層	C4-No.38
■ 978 8	土師器	陶台	在り	-	-	1区包査層	C5-No.77
■ 978 9	瓦甎土器	鉢	在り	20.5	-	1区包査層	F8-12, 20.5口径部内径, 最大径は24.2
■ 97810	瓦甎土器	鉢	在り	18.8	-	1区包査層	18.8口径部内径, 最大径は24.4
■ 97811	陶器	備前	-	-	-	1区包査層	G9-No.32
■ 97812	陶器	瓶	備前	-	-	1区包査層	D5-No.40
■ 97813	陶器	瓶	備前	-	-	1区包査層	H9-No.6
■ 97814	陶器	鉢	在り	-	-	1区包査層	
■ 97815	陶器	備前	-	-	-	1区包査層	F9-No.17
■ 97816	陶器	備前	-	-	-	1区包査層	H10-No.14
■ 97817	埴生式土器	甕	在り	4.8	-	1区包査層	G9
■ 97818	埴生式土器	高坏	在り	11.4	-	1区包査層	G9-36
■ 998 4	白磁	皿	中国	-	-	S51・51	口縁部内面鉄錆(茶色)
■ 998 5	白磁	皿	中国	(10.0)	(5.8)	2.55	SD26
■ 998 6	白磁	甕	中国	(8.7)	-	-	SK19
■ 1058 1	土師器	皿	在り	-	-	-	SK17
■ 1078 1	土師器	皿	在り	(7.8)	(5.4)	2.4	SX4
■ 1078 2	土師器	皿	在り	-	8.3	-	SX4
■ 1078 3	土師器	皿	在り	-	-	-	SX4
■ 1118 1	京都系土師器	皿	在り	(11.2)	-	-	2区3層
■ 1118 2	土師器	皿	在り	(12.9)	-	-	2区3層
■ 1118 3	土師器	皿	在り	(5.0)	-	-	2区3層
■ 1118 4	瓦甎土器	皿	在り	7.1	-	-	2区3層
■ 1118 5	土師器	皿	在り	-	-	-	2区3層
■ 1118 6	瓦甎土器	火鉢	在り	-	-	-	2区3層
■ 1118 7	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	2区
■ 1118 8	青磁	碗?	中国(龍泉窯)	(8.2)	-	-	2区包査層
■ 1118 9	青磁	香炉?	中国(龍泉窯)	(9.2)	-	-	2区3層
■ 111810	青磁	香炉	中国(龍泉窯)	-	-	-	2区3層
■ 111811	青磁	碗	中国(同安窯)	-	-	-	2区3層
■ 111812	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	2区3層
■ 111813	青磁	碗	中国(同安窯)	-	-	-	2区3層
■ 111814	青磁	皿	中国(同安窯)	-	-	-	2区3層
■ 111815	白磁	碗	-	(13.7)	-	-	2区3層
■ 111816	白磁	碗	-	(20.0)	-	-	2区3層
■ 111817	白磁	皿	-	(13.5)	-	-	2区3層
■ 111818	白磁	碗	-	(8.8)	(4.2)	-	2区3層
■ 111819	白磁	碗	-	(5.1)	-	-	2区3層
■ 111820	白磁	碗	中国(景德鎮窯)	-	(3.0)	-	2区3層

### 31次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器⑧)

押附 No.	種 類	生産地	法器 (単位cm)			遺構名	備考	
			口径	底径	器高			
押112#21	陶器	瓦	備前	-	-	-	2区3層	瓦葺箱(S82)よりも下層出土
押114#1	土師器	皿	在地	-	(6.6)	-	SD25	
押114#2	土師器	皿	在地	-	(7.2)	-	SD25	
押115#1	土師器	皿	在地	-	-	-	P16	
押115#2	土師器	皿	在地	-	-	-	P16	
押115#3	土師器	皿	在地	(9.0)	(7.2)	2.6	P16	
押115#4	土師器	皿	在地	(12.7)	(7.6)	3.7	P16	
押115#5	土師器	皿	在地	(15.6)	(12.0)	3.6	O15	
押115#6	陶磁	瓶	中国	(6.6)	-	-	P16	
押115#7	福祇陶磁	甕	中国南部	-	-	-	3区近世層	
押115#8	白磁	碗	中国	-	(6.3)	-	P16	NO.26, 鉆の目録調査
押115#9	青磁	碗	中国	-	-	-	O16	内面に片切り彫り
押115#10	白磁	皿	中国	-	-	-	O16	
押115#11	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	P16	
押115#12	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	O16	

### 31次調査区遺物観察表 (土製品)

押附 No.	品類	材質	部位	寸法 (単位cm)				重量 (g)	遺構名	備考
				長さ	幅	孔径	厚			
押16#6	土師	土師質	-	長さ 5.5	幅 1.1	孔径 0.3	4.2	SK11	NO.9	
押28#10	土師	土師質	-	長さ 4.3	幅 1.2	孔径 0.5	5.9	SD19		
押28#11	土師	土師質	-	長さ 5.0	幅 0.9	孔径 0.2	4.3	SD19		
押32#21	土師	土師質	-	長さ 6.8	幅 1.4	孔径 0.5	12.3	SE1		
押32#22	土師	土師質	-	長さ 6.4	幅 1.3	孔径 0.5	11.2	SE1		
押36#16	土師	土師質	-	長さ 6.5	幅 1.3	孔径 0.4	10.4	S41	NO.17	
押22#4	土師	土師質	-	長さ 4.0	幅 0.9	孔径 0.3	2.9	SK11	下層	
押52#12	土師	土師質	-	長さ 4.2	幅 1.0	孔径 0.4	3.8	SD11		
押30#26	土師	土師質	-	長さ 6.6	幅 1.3	孔径 0.4	10.4	SD10		
押30#21	土師	土師質	-	長さ 4.0	幅 0.8	孔径 0.3	2.9	SD10		
押35#6	土師	土師質	-	長さ 4.8	幅 1.5	孔径 0.4	7.6	SD9	5層	
押79#13	土師	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.1	孔径 0.2	6.9	SK13	NO.2	
押96#11	土師	土師質	-	長さ 4.9	幅 1.1	孔径 0.3	5.7	1区包土層	C5-NO.2	
押96#2	土師	土師質	-	長さ (3.4)	幅 0.9	孔径 0.2	3.0	1区包土層	C5-NO.3	
押96#3	土師	土師質	-	長さ 5.4	幅 1.0	孔径 0.3	4.6	1区包土層	C5-NO.6	
押96#4	土師	土師質	-	長さ 4.7	幅 1.0	孔径 0.4	6.0	1区包土層	C5-NO.7	
押96#5	土師	土師質	-	長さ 4.7	幅 1.0	孔径 0.3	4.6	1区包土層	C4-NO.16	
押96#6	土師	土師質	-	長さ 5.5	幅 1.0	孔径 0.3	5.0	1区包土層	C5-NO.60	
押96#7	土師	土師質	-	長さ (4.2)	幅 1.0	孔径 0.4	3.5	1区包土層	C5-NO.74	
押96#8	土師	土師質	-	長さ (4.5)	幅 1.1	孔径 0.4	4.7	1区包土層	C5-NO.106	
押96#9	土師	土師質	-	長さ 4.7	幅 0.9	孔径 0.3	3.9	1区包土層	D5-NO.10	
押96#10	土師	土師質	-	長さ 6.0	幅 1.0	孔径 0.2	5.4	1区包土層	D5-NO.20	
押96#11	土師	土師質	-	長さ 6.1	幅 1.1	孔径 0.3	8.0	1区包土層	D5-NO.21	
押96#12	土師	土師質	-	長さ 4.3	幅 0.9	孔径 0.4	3.6	1区包土層	D5-NO.23	
押96#13	土師	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.0	孔径 1.0	5.3	1区包土層	D5-NO.25	
押96#14	土師	土師質	-	長さ 4.5	幅 0.9	孔径 0.2	3.4	1区包土層	D5-NO.26	
押96#15	土師	土師質	-	長さ (4.8)	幅 1.0	孔径 0.2	4.4	1区包土層		
押96#16	土師	土師質	-	長さ (3.5)	幅 1.0	孔径 0.2	2.6	1区包土層		
押96#17	土師	土師質	-	長さ (3.5)	幅 1.0	孔径 0.3	3.1	1区包土層		
押96#18	土師	土師質	-	長さ 5.4	幅 1.1	孔径 0.3	6.3	1区包土層	F7-NO.5	
押96#19	土師	土師質	-	長さ 4.6	幅 2.2	孔径 0.5	21.4	1区包土層	G10	
押107#3	土師	土師質	-	長さ 4.2	幅 1.3	孔径 0.3	7.6	Sx4	下層	
押112#23	土師	土師質	-	長さ 3.4	幅 1.0	孔径 0.3	2.9	2区3層		

### 31次調査区遺物観察表 (石製品)

押附 No.	品類	材質	部位	寸法 (単位cm)				重量 (g)	遺構名	備考
				長さ	幅	厚さ	厚さ			
320	1	黒	赤黒石	-	長さ 13.3	幅 7.2	厚さ 2.5	326.1	SD15	NO.3
330	1	灰石	白色砂岩	-	長さ 7.1	幅 4.8	厚さ 2.4	76.5	SE1	
350	2	灰石	石	-	長さ 7.8	幅 5.4	厚さ 4.0	245.1	SE1	
350	3	灰石	粘板岩	-	長さ 12.2	幅 4.1	厚さ 3.0	251.9	SE1	
350	4	灰石	白色砂岩	-	長さ 10.7	幅 4.5	厚さ 1.9	112.4	SE1	
350	5	石白	石	-	長さ 37.8	幅大 -	幅大 11.4	-	SE1	
360	1	石白	-	上白	幅大 38.8	幅 -	厚 20.4	-	SE1	
370	1	五輪	凝灰岩	水輪	長さ 29.4	幅大 29.4	厚さ 17.4	-	SE1	
370	2	五輪	凝灰岩	地輪	長さ 32.4	幅 21.8	厚さ 21.0	-	SE1	
370	3	五輪	凝灰岩	地輪	長さ 33.6	幅 33.8	厚さ 12.0	-	SE1	
370	4	五輪	凝灰岩	地輪	長さ 31.4	幅 31.2	厚さ 24.4	-	SE1	
370	5	五輪	凝灰岩	地輪	長さ 39.2	幅 30.2	厚さ 14.0	-	SE1	
370	6	五輪	凝灰岩	地輪	長さ 20.6	幅 25.8	厚さ 18.4	-	SE1	
330	13	腐石	柱化木	-	長さ 6.2	幅 4.0	厚さ 1.0	-	SD11	
330	16	腐石	柱化木?	-	長さ 3.1	幅 2.4	厚さ 1.9	14.3	SD11	
720	6	腐石	穴太砂石	-	長さ 2.9	幅 2.6	厚さ 2.2	28.2	SD9	
770	11	石白	石	-	長さ 20.7	幅 12.6	厚さ 10.5	-	SK3	
960	20	腐石	赤黒石	-	長さ 9.5	幅 8.0	厚さ 2.0	234.6	1区遺構名	CS-NO.8 GS, 欠損
960	21	腐石	粘板岩	-	長さ 5.3	幅 3.0	厚さ 1.2	41.9	1区遺構名	
960	22	腐石	砂岩	-	長さ 4.8	幅 3.5	厚さ 4.2	95.0	1区遺構名	
960	24	台輪	滑石	-	長さ (20.2)	幅 -	厚さ -	-	1区遺構名	M14
990	3	腐石	粘板岩	-	口幅 7.5	幅 4.0	厚さ 1.3	75.2	SP73	

### 31次調査区遺物観察表 (金属製品)

押附 No.	品類	材質	部位	寸法 (単位cm)				重量 (g)	遺構名	備考
				長さ	幅	厚さ	厚さ			
170	2	銅管	用鋼	-	長さ -	幅 -	厚さ -	-	SD17	
330	3	包丁?	鉄	-	長さ 20.6	幅 6.1	厚さ 0.4	158.8	SE1	

31次調査区遺物観察表(瓦・埴瓦)①

押出 No.	品種	部位	寸法(単位cm)				測測名	備考
			長さ	幅	厚さ	重さ		
118 2	埴管	長さ			厚さ		SK5	
138 1	割製金具	長さ			厚さ		SD3	
208 1	包丁?軒丸瓦	長さ	14.3		厚さ	3.1	SE1	
338 1	丸瓦	長さ			厚さ		SE1	
338 1	丸瓦	長さ		13.1	厚さ		SE1	
498 1	丸瓦	長さ	18.6		厚さ	2.7	SD10	
498 2	丸瓦	長さ	17.2		厚さ	2.6	SD10	
498 3	丸瓦	長さ	16.1		厚さ	3.0	SD10	
498 21	丸瓦	長さ			厚さ	17.5	SD10	
368 22	丸瓦	長さ			厚さ	14.6	SD10	
368 23	丸瓦	長さ			厚さ		SD10	
368 24	丸瓦	長さ			厚さ		SD10	
598 7	丸瓦	長さ			厚さ		SD9	
528 14	平瓦	長さ	18.2		厚さ	3.3	SD11	
698 22	平瓦	長さ			厚さ		SD9	
698 23	丸瓦	長さ		13.8	厚さ		SD9	
428 1	平瓦	長さ	23.9		厚さ	4.0	SK2	
428 2	軒平瓦	長さ	15.8		厚さ	3.7	SK2	
428 3	軒平瓦	長さ	22.1		厚さ	4.0	SK2	
428 4	軒平瓦	長さ	15.2		厚さ	4.0	SK2	
428 5	軒平瓦	長さ	9.4		厚さ	3.7	SK2	
428 6	軒平瓦	長さ	11.5		厚さ	3.8	SK2	
438 1	軒平瓦	長さ	14.3		厚さ	1.3	SK2	
438 2	軒平瓦	長さ			厚さ	19.4	SK2	
438 3	平瓦	長さ			厚さ	19.4	SK2	
438 4	平瓦	長さ	13.5		厚さ	2.8	SK2	
438 5	平瓦	長さ	13.7		厚さ	2.7	SK2	
508 22	瓦	長さ			厚さ	12.0	SD10	
508 23	瓦	長さ			厚さ	12.3	SD10	
508 24	軒丸瓦	長さ			厚さ		SD10	
508 25	丸瓦	長さ			厚さ		SD10	
798 15	丸瓦	長さ			厚さ		SK13	
798 16	平瓦	長さ	7.0		厚さ	3.9	SK13	
798 6	平瓦	長さ			厚さ		SD20	
798 7	丸瓦	長さ		5.9	厚さ		SD20	
798 8	軒丸瓦	長さ			厚さ		SD20	
808 8	平瓦	長さ			厚さ		SK18	
958 15	平瓦	長さ			厚さ		1区各劣部	
958 16	平瓦	長さ			厚さ		1区各劣部	
958 17	平瓦	長さ			厚さ		1区各劣部	
958 18	平瓦	長さ			厚さ		1区各劣部	
958 19	軒丸瓦	長さ			厚さ		1区各劣部	
958 20	丸瓦	長さ			厚さ		1区各劣部	
958 21	平瓦	長さ	15.7		厚さ	2.3	1区各劣部	
968 20	面丸瓦	長さ			厚さ		1区各劣部	
968 23	瓦	長さ	17.2		厚さ	3.1	1区各劣部	
998 1	瓦	長さ	(13.6)		厚さ	2.4	SP26	
998 2	瓦	長さ	18.8		厚さ	2.5		
998 3	瓦	長さ		(10.5)	厚さ		SP73	
1088 1	瓦	長さ			厚さ	11.2	SK4	
1088 2	瓦	長さ	5.2		厚さ	3.4	SK4	
1088 3	軒丸瓦	長さ			厚さ		SK4	
1088 4	軒平瓦	長さ			厚さ		SK4	
1088 5	丸瓦	長さ		6.6	厚さ		SK4	
1088 6	丸瓦	長さ			厚さ		SK4	
1088 7	平瓦	長さ			厚さ		SK4	
1088 8	平瓦	長さ			厚さ		SK4	
1088 9	平瓦	長さ			厚さ		SK4	
1088 10	平瓦	長さ			厚さ		SK4	
1088 11	平瓦	長さ			厚さ		SK4	
1088 12	平瓦	長さ			厚さ		SK4	
1088 12	平瓦	長さ			厚さ		SK4	
1088 13	平瓦	長さ	26.7		厚さ	2.8	SK4	
1088 14	平瓦	長さ	20.4		厚さ	2.9	SK4	

### 31次調査区遺物観察表（瓦・埴瓦）②

発掘 No.	品種	部位	寸法 (単位cm)				遺構名	備考
			長さ	幅	厚さ	厚さ		
81109 1	瓦		長さ 21.3	幅 12.4	厚さ 2.5	SX4	NO.194, 石炭を煮む	
81109 2	瓦		長さ 23.1	幅 21.7	厚さ 2.7	SX4	NO.65, 石炭を煮む	
81109 3	瓦		長さ 27.6	幅 17.6	厚さ 2.7	SX4	NO.271, 石炭を煮む	
81109 4	瓦		長さ 17.2	幅 14.4	厚さ 2.3	SX4	NO.67, 石炭を煮む	
81109 1	瓦		長さ 27.2	幅 19.0	厚さ 2.5	SX4	NO.275, 石炭を煮む	
81109 2	瓦		長さ 27.8	幅 16.9	厚さ 2.9	SX4	NO.29, 石炭を煮む	
81109 3	瓦	口・縁	長さ	幅	厚さ	SX4		
81112 22	軒丸瓦		長さ 8.4	幅 7.0	厚さ 3.6	2区 高3割		
81148 3	平瓦		長さ	幅	厚さ	SD25	古代	
81158 13	軒丸瓦		長さ	幅	厚さ	Q16	巴紋	
81158 14	軒丸瓦		長さ	幅	厚さ	O15	巴紋	
81158 15	軒丸瓦		長さ	幅	厚さ	Q16	巴紋	
81158 16	丸瓦		長さ	幅	厚さ	Q16		
81158 17	丸瓦		長さ	幅	厚さ	Q16		
81158 18	丸瓦		長さ	幅	厚さ	P16		
81158 19	軒平瓦		長さ 8.2	幅 11.5	厚さ 5.1	Q16		
81158 20	瓦	層	長さ 8.8	幅 6.0	厚さ 4.0	O15		
81168 1	丸瓦		長さ	幅	厚さ	Q16		
81168 2	丸瓦		長さ	幅	厚さ	Q16		
81168 3	丸瓦		長さ	幅	厚さ	Q16		
81168 4	丸瓦		長さ	幅	厚さ	P16		
81168 5	丸瓦		長さ	幅	厚さ	Q16		
81168 6	丸瓦		長さ	幅	厚さ	Q16		
81168 7	丸瓦		長さ	幅	厚さ	P16		
81168 8	丸瓦		長さ	幅	厚さ	P16		
81168 9	軒平瓦		長さ 15.2	幅 8.5	厚さ 3.0	Q16		
81168 10	軒平瓦		長さ 10.9	幅 7.1	厚さ 4.0	P16	NO.5	

### 31次調査区遺物観察表（その他）

発掘 No.	品種	材質	部位	寸法 (単位cm)				重量 (g)	遺構名	備考
				長さ	幅	厚さ	厚さ			
81288 8	磁土	土	長さ 12.1	幅 8.7	厚さ 5.0		SD19	NO.17		
81288 9	磁土	土	長さ 9.4	幅 9.4	厚さ 8.5		SD19			
81078 4	磁土	土	長さ 9.5	幅 7.3	厚さ 2.8		SX4	NO.3		
81078 5	磁土	土	長さ 4.1	幅 3.4	厚さ 2.6		SX4	下部		
81078 6	磁土	土	長さ 7.1	幅 5.2	厚さ 3.2		SX4			

### 31次調査区遺物観察表 (銅銭)

押出 No.	銭貨名	初鋳造年	国・王朝名	重さ (g)	直径 (mm)	書体	遺構名	備考
第 108 2	通寶		北宋				SK5	
第 178 1	通寶		北宋				SD17・18	
第 418 1	元祐通寶	1086		2.1			SD17・18	
第 658 1	紹聖元寶	1094	北宋				SD9	
第 838 29	治平元寶	1064	北宋			厚肉	SK18	
第 908 4	元祐通寶	1086	北宋			行肉	SD17・18	
第 1028 7	朝綱通宝	1423	朝鮮	3.5		備肉	SD11	
第 818 1	治平元寶	1064	北宋	2.5			SK18	
第 728 14	宋元元寶	1101	北宋				行肉	
第 658 1	紹聖元寶	1094	北宋				SD9	

### 31次調査区遺物観察表 (木製品)

押出 No.	品名	部位	寸法 (単位cm)				遺構名	備考		
			口径	長さ	幅	厚さ				
第 258 1	漆刷柄		口径	14	長さ	6.5	高さ	10.1	SD19	No.21. 最大径は14.2"
第 258 2	柄		長さ		幅		厚さ		SD19	内外両面漆塗り
第 258 3	下駄	足	長さ	9.6	幅	9.7	厚さ	1.6	SD19	
第 258 4	柄		長さ	9.3	幅	7.0	厚さ	0.4	SD19	一部に備肉
第 258 5	下駄		長さ	13.9	幅	8.7	厚さ	3.6	SD19	
第 258 6	下駄	足	長さ	9.3	幅	8.6	厚さ	1.2	SD19	
第 258 7	下駄	足	長さ	9.4	幅	8.0	厚さ	1.3	D19	
第 308 8	柄		長さ	21.4	幅	5.2	厚さ	5.2	SD19	No.17. 抜け残り
第 338 3	漆刷柄		口径	14.8	長さ	8.2	高さ	6.4	SE1	厚肉は厚肉最大外径・赤澤
第 338 4	漆刷柄		長さ	12.1	幅	4.1	厚さ	4.7	SE1	外面黒漆塗り・内面赤漆塗り
第438 15	紡錘状?		長さ	6.8	中心	1.0	厚さ	0.9	SE1	備肉
第 718 1	折敷		長さ	25.1	幅	22.2	厚さ	0.7	SD9	No.28+30+31
第 718 2	折敷		長さ	25.5	幅	13.5	厚さ	0.5	SD9	No.46
第 718 3	折敷		長さ	25.1	幅	12.2	厚さ	0.6	SD9	No.53+54
第 718 4	折敷		長さ	28.0	幅	6.8	厚さ	0.7	SD9	No.43
第 718 5	折敷		長さ	23.0	幅	3.1	厚さ	0.8	SD9	
第 718 6	折敷		長さ	25.0	幅	4.0	厚さ	0.4	SD9	
第 728 1	折敷		長さ	24.6	幅	24.5	厚さ	0.6	SD9	No.63
第 728 2	折敷		長さ	24.0	幅	2.1	厚さ	1.8	SD9	
第 728 3	折敷		長さ		幅		厚さ		SD9	
第 728 4	折敷		長さ	16.5	幅	15.2	厚さ	0.6	SD9	No.62
第 728 5	折敷		長さ	25.5	幅	7.2	厚さ	0.5	SD9	No.55
第 738 1	円蓋		長さ	10.2	幅	7.4	厚さ	0.5	SD9	No.47
第 738 2	円蓋		長さ	6.9	幅	4.4	厚さ	0.4	SD9	No.45
第 738 3	円蓋		長さ	4.5	幅	2.3	厚さ	0.2	SD9	下部黒色土層
第 738 4	柄	口径	14.6		幅		高さ	4.3	SD9	No.54
第 738 5	柄	長さ	9.1	幅	3.5	厚さ	1.1	SD9	5層	
第 738 6	折敷		長さ	25.5	幅	7.2	厚さ	0.5	SD9	No.55
第 848 8	棒		長さ	16.5	幅		厚さ	2.9	SD9	両面を染らす
第 888 1	柱礎		長さ	15.0	幅	12.0	厚さ	9.9	SP32	下部は漆面に切筋
第 888 2	柱礎		長さ	22.0	幅	11.4	厚さ	10.4	SP62	下部に漆による切筋痕
第 928 1	柱礎		長さ	21.8	幅	12.2	厚さ	10.8	SP68	下部に漆による切筋痕
第 968 25	折敷		長さ	28.0	幅	2.5	厚さ	1.4	EB	表面の漆材。釘穴一カ所



# 写 真 图 版



1区東北壁



近世初め頃の溝状遺構 (SD3周辺)



SE1の推積層



SD23東北壁付近の完土掘状態



前頁下の漆器椀出土状態



同左



SD9南北層序



SD9遺物出土状態



瓦集中部 (SX2)



古代の土師器(1区包含層)



越州窯青磁 (SD7)



(SK11)



IV14区



(SD23)



IV14区



(SK13)



(SD23)



(SD23)



大内系土器 (SD11)



(F7区)



(SD9)



(SD9)



(SD9)



(SD9)



(SD9)



(SK13)



(SK18)



(SX3)



(SD9)



(SD9)



(SD9)



(SD9)



(SK13)



(SD24)



(SX3)



(SK13)



(SD9)



(SD9) 土師器血類

京都市ヘソ皿 (SD9)





青花（中国製染付）



玉砂利 (蛇紋岩・石英)



壁土 (SX4)



青花 (中国製染付)



SE1青磁器台片  
(左「龍泉窯青磁」より)



タイ製ハンネラ土器 (SE1)



燧石 (左:SD11 右:SD9)



同左



SE1出土磁石



軒平瓦 (3区包含層)



鬼瓦 (SX4)



C5区



G10区



G9区



SP73

砥石



折敷 (SD9)



折敷 (SD9)



折敷 (SD9)





木柱 (SP68)



木柱 (SP62)



木柱 (SP32)



木製容器 (SD9)



円盤状木製品 (SD20)



円盤状木製品 (SD9)



折敷 (SD9)



調査風景 (1区)



1区西端



同左低地部



1区



1区上層部調査状況



SD3



近世初め頃の溝状遺構



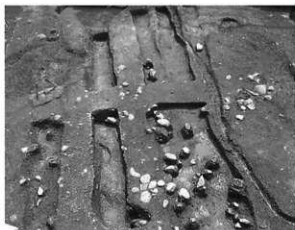
SD4周辺



近世初め頃の溝状遺構 (SD12~15)



その調査状況 (左)



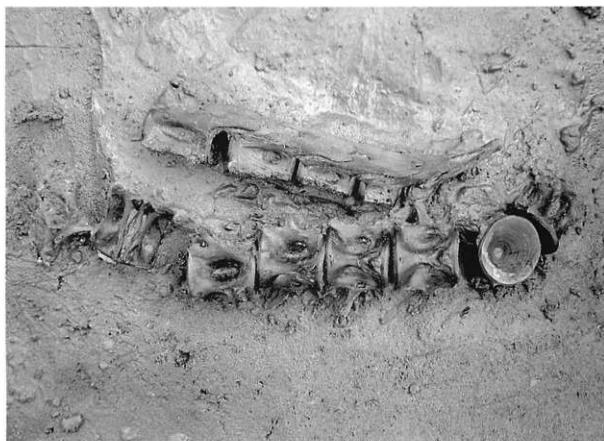
SD17周辺 (右)



SD12~15



3区





SD9検出状態



同上





SD10完壙状況



SD11土層



SD11上部 (上)



SE1



SD9調査状況



SX2出土状態



SK13・SD24完壁状態



1区東部



SD24西側柱穴群



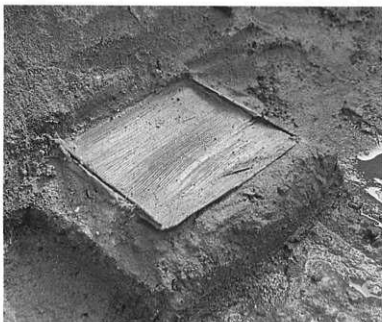
SD24



SK20



SD9全景



折散 (SD9)



SK18周辺



同上





遺物出土状況



1区東部から2区・3区を見る



SX4 (2区)



SX4



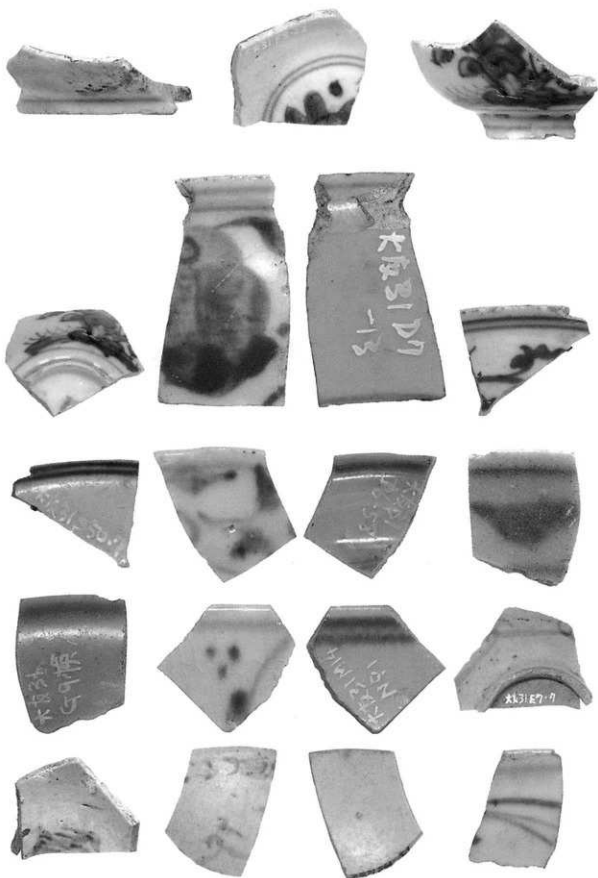
2区柱穴



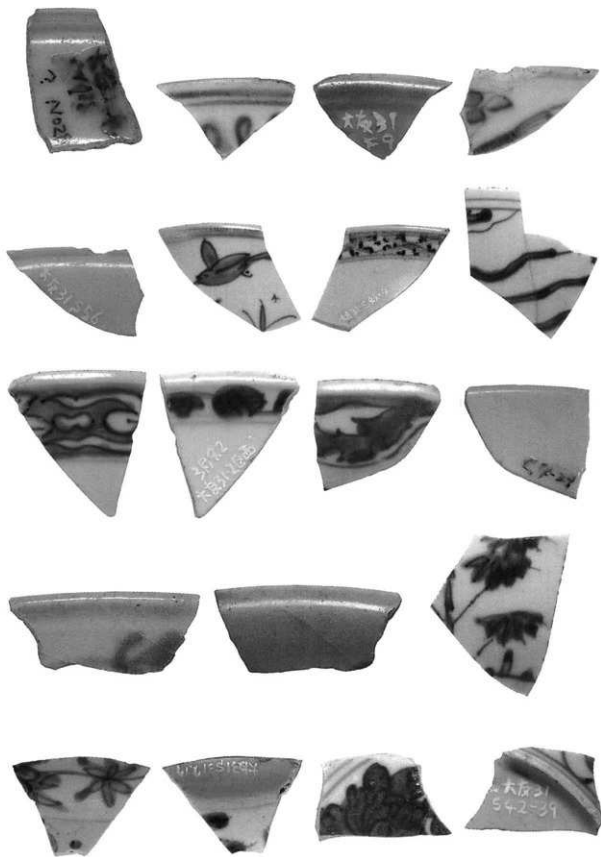
3区礎出土状況



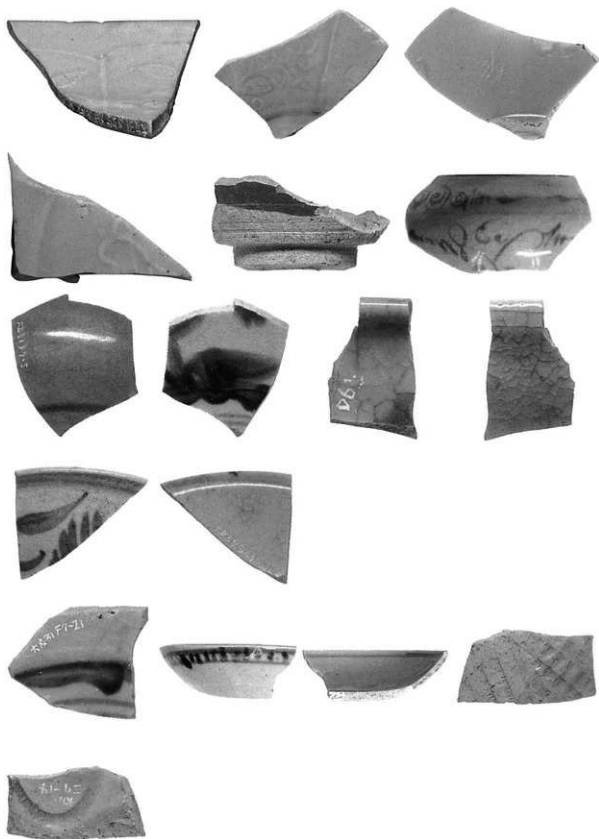
3区調査状況



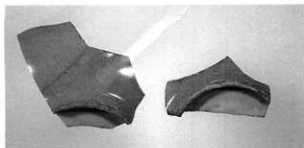
青花 (中国製染付)



青花 (中国製染付)



白磁・青花・青磁



青磁 (1区包含層)



青磁 (S41-78)



青磁 (S50-6)



青磁 (1区包含層)



(P-16一括)



青磁 (SE1)



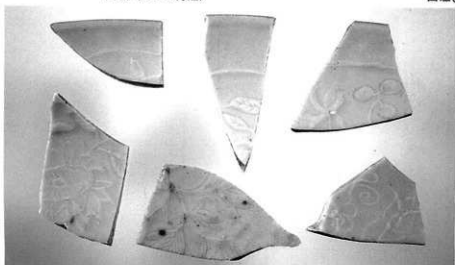
白磁(SD10)



白磁 (SD10付近)

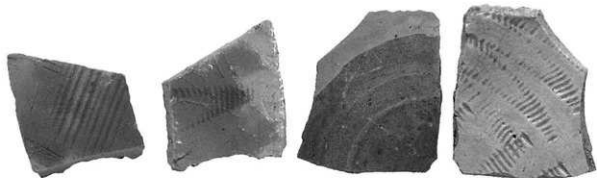


白磁(SX3)



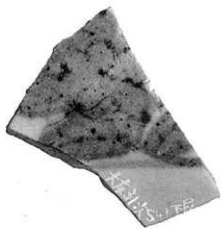
白磁(SD19)





青磁

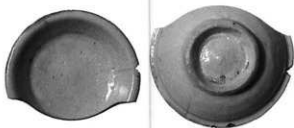
(1区包含層)



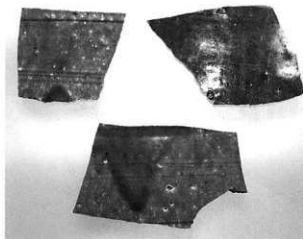
青花



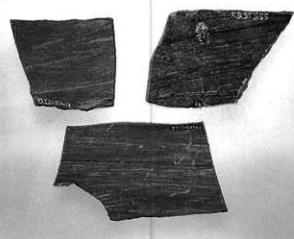
白磁 (S72)



白磁 (SD23)



福釉陶器 (SD23)



福釉陶器 (SE1)



福釉陶器 (上:表探 SK14)



鉄製品 (SE1)





瓦質土器火鉢 (SD23)



瓦質土器火鉢 (SD19)



備前焼 (SE1)



備前焼壺 (3区包含層)



備前焼搥鉢 (SE1)



青磁 (1区包含層)





銅



銅



火鉢



銅



火鉢



E8-12 銅



銅 M14-8



(SK16)



銅(SD9)

瓦質土器



(S48)

(SD15)



(3区)



鬼瓦

(SK13)

(S57)



軒平瓦 (SX2)



同上

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	ぶんごふない5 ちゅうせいおおともふないまちあとだい31じちょうさく
書名	豊後府内5 中世大友府内町跡第31次調査区
副書名	大分県付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	(4)
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター報告書
シリーズ番号	第10集
編著者名	高橋信武・西本豊弘
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市中判田1977
発行年月日	西暦2006年3月31日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
ちゅうせいおおとも 中世大友 ふないまちあと 府内町跡 だい31じちょうさ 第31次調査	おおいたし 大分市 ろくほうみな みまち 六坊南町	322	051	33° 13' 20"	131° 37' 11"	2003年 5月127日 ～ 2003年 9月130日	500㎡	大分駅 周辺連続 立体交差 事業

## 豊後府内5

### 中世大友府内町跡第31次調査区（瑞光寺周辺）

大分県付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第10集

平成18年3月31日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター  
〒870-1113  
大分市中判田1977番地  
TEL 097-597-5675

印 刷 丸徳印刷会社  
〒870-0911  
大分市新貝4-50  
TEL097-558-7737